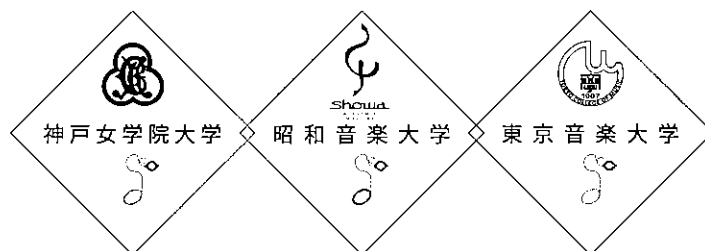
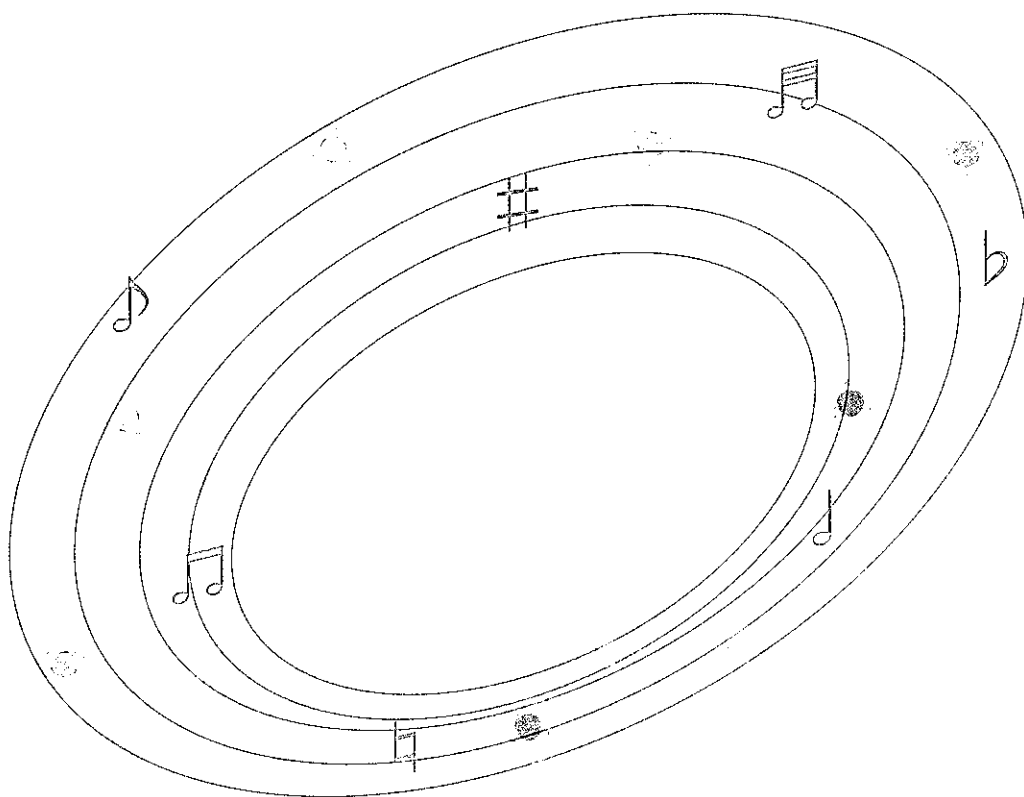


音楽系 3 大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 23 年度 活動報告書

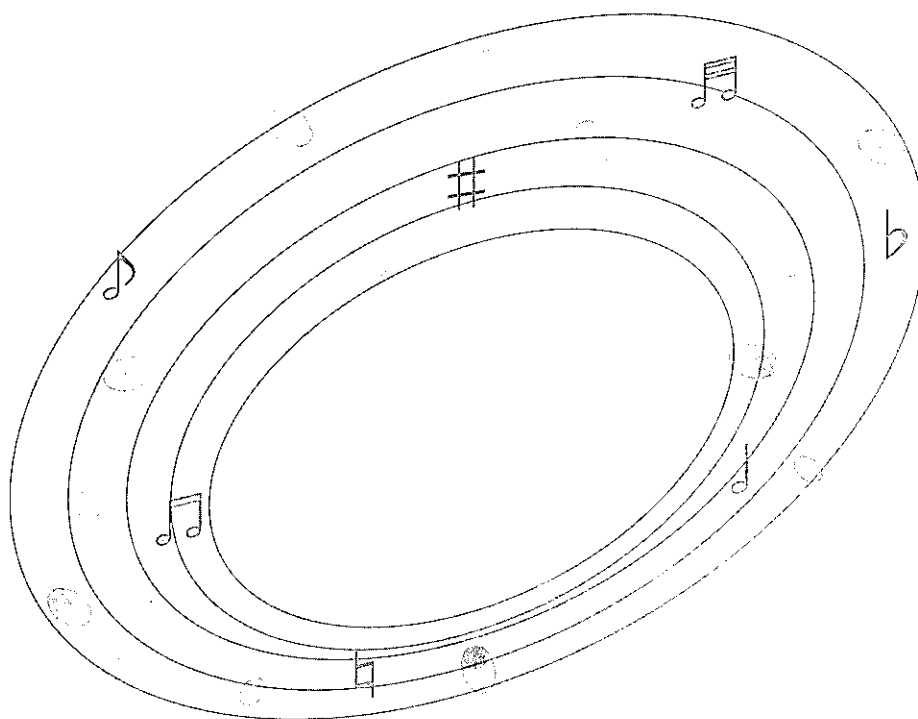


文部科学省平成 21 年度大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム選定

音楽系 3 大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 23 年度 活動報告書



<http://www.music-communication.com>

目 次

はじめに	03
I. 3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」	07
1. 平成23年度「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定	08
2. 2011年度「ミュージック・コミュニケーション講座」	22
2-1: 第1回 新しい学びとしてのアウトリーチを考える～音楽家が社会に出ることの意味を問い直す～	22
2-2: 第2回 実践コミュニケーション入門	24
2-3: 第3回 音楽によるワークショップ	26
2-4: 3大学合同夏期セミナー2011	28
2-5: 第4回 音楽づくりの新しいパラダイム	34
2-6: 第5回 リーダーシップ・スキルアップ	36
2-7: 第6回 アーティストの公共的役割 ～これからの私たちにできること～	38
II. 公共ホール共同事業実施報告	41
1. 学生たちが大きな成長を見せた公共ホールとの共同プロジェクト	42
2. 昭和音楽大学	44
3. 東京音楽大学	48
4. 神戸女学院大学	54
III. 研究活動報告	57
1. 「平成23年度 日本の音楽系大学等における地域音楽活動に関する調査」報告	59
2. ギルドホール音楽演劇学校 Guildhall School of Music and Drama	68
3. パービカンセンターとニューヨーク・フィルハーモニックによる合同プロジェクト	71
4. 音楽キャリア開発担当者ネットワーク NETMCDO 第17回総会 大学音楽アウトリーチ・ネットワーク会議 C'MON 参加報告	77
5. 外部講師招聘研究会	79
6. 国内アート・ワークショップ調査報告 ―音楽ワークショップ展開への出発点―	81
IV. 3大学連携事業学外評価員会議報告	87
V. 3大学連携シンポジウム「音楽コミュニケーションの未来を語る」報告	93
資料編	109
1. 「ワークショップで社会が変わる」シンポジウム	110
2. 「施設まるごと! 文化発見フェスタ in ちば」文化フォーラム	111
3. 「卒業生のデータベースを活用した音大生のためのキャリア形成支援」シンポジウム	113
4. 新聞掲載記事	114
おわりに	116

はじめに

平成21年度より開始した取組「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も、今年度が最終年度となりました。この取組は、文部科学省より平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」の選定を受けて、音楽系の3つの大学（神戸女学院大学音楽学部・昭和音楽大学・東京音楽大学）がそれぞれの特性を生かした連携のもとに、教育研究資源の相互補完や学生・教職員の交流を実現し、関連団体と協力しながら、社会の様々な場で音楽活動を創造・実践することができる、専門力・社会性・コミュニケーション能力を備えた「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成をめざしてきたものです。

最終年度に至り、教育面では、大学間をインターネット・ビデオ会議システムでつないだ共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」と、夏に東京音楽大学で開催する合同セミナーが、3大学の学生にとって意義深い体験と共同の場として定着しました。実践面では、各大学がそれぞれ遠隔地の公共ホールと初めての連携コンサートを実施し、大学から社会へ発信・連携する第一歩を踏み出すことができました。また研究面では、国内外の事例調査を進め、本取組の意義や今後の方向性について重要な視点やネットワーク構築の足掛かりが得られました。さらに評価員会では、この取組の目標・教育方法・効果・問題点について学外の視点からご検討いただき、建設的なご意見やアドバイスをいただきました。

本報告書は、2年半にわたる取組のまとめとして、本年度を中心に活動報告をまとめたものです。音楽・芸術・教育に関わる多様な方々に広くご高覧いただき、今後の展開に向けて、皆様からのご助言・ご指導をいただければ大変ありがたく存じます。

平成24年3月

3大学連携運営委員会
委員長 野本 正平
(東京音楽大学副学長)

* 「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」とは、国公立大学間の積極的な連携を推進し、各大学における教育研究資源を有効活用することにより、当該地域の知の拠点として、教育研究水準のさらなる高度化、教育活動の質保証、個性・特色の明確化に伴う機能別分化と相互補完、大学運営基盤の強化等とともに、地域と一体となった人材育成の推進を図ることを目的としています。

3 大学連携運営委員会

連携運営委員会構成・メンバー（平成 24 年 3 月現在）

東京音楽大学	野本 正平	東京音楽大学 副学長
	武石 みどり	// 音楽学部 教授
	村中 洋子	// 音楽学部 准教授
	原山 耕造	// 事務局長
	笹島 茂	// 教務一課長
神戸女学院大学	澤内 崇	神戸女学院大学 音楽学部長
	津上 智実	// 音楽学部 教授
	田中 修二	// 音楽学部 教授
	竹下 直美	// 音楽学部 事務長
昭和音楽大学	高田 俊治	昭和音楽大学 音楽学部長
	武瀧 京子	// 音楽学部 教授
	赤木 舞	// 音楽学部 専任講師
	榎 英夫	// 学務部長
	下八川 公祐	// 企画推進課長
連携コーディネーター	小島 レイリ	東京音楽大学 連携コーディネーター
事務局	花畑 昌彦	東京音楽大学 総務課 係長

平成 23 年度連携運営会議実施日程

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、3 大学間を結んで実施

第 1 回連携運営委員会：平成 23 年 6 月 15 日（水）

第 2 回連携運営委員会：平成 23 年 9 月 28 日（水）

第 3 回連携運営委員会：平成 24 年 1 月 25 日（水）

3 大学連携研究会

メンバー（平成 24 年 3 月現在）

東京音楽大学	武石 みどり、小島 レイリ
神戸女学院大学	津上 智実
昭和音楽大学	武瀧 京子、赤木 舞、布目 藍人、佐藤 良子

平成 23 年度研究会スケジュールは次頁を参照

平成 23 年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

合同夏期セミナー以外の講座は、いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、3 大学間を結んで実施

オリエンテーション：平成 23 年 5 月 11 日（水）	発信校：東京音楽大学
第 1 回：平成 23 年 5 月 18 日（水）	発信校：東京音楽大学
第 2 回：平成 23 年 5 月 25 日（水）	発信校：昭和音楽大学
第 3 回：平成 23 年 6 月 1 日（水）	発信校：東京音楽大学
3 大学合同夏期セミナーガイダンス：平成 23 年 7 月 6 日（水）	発信校：東京音楽大学
3 大学合同夏期セミナー：平成 23 年 8 月 31 日（水）～9 月 2 日（金）	於：東京音楽大学
第 4 回：平成 23 年 10 月 5 日（水）	発信校：神戸女学院大学
第 5 回：平成 23 年 10 月 19 日（水）	発信校：昭和音楽大学
第 6 回：平成 23 年 11 月 30 日（水）	発信校：神戸女学院大学

●公共ホール提携企画の実施

東京音楽大学	和歌山市民会館、有田川きびドーム、上富田文化会館（和歌山県） 流山市生涯学習センター、浦安市文化会館、東総文化会館、千葉県文化会館、 市川市市民会館（千葉県）
神戸女学院大学	八女市民会館（福岡県）
昭和音楽大学	河口湖円形ホール（山梨県）、魚沼市小出郷文化会館（新潟県）

●平成 23 年度研究会スケジュール

第 1 回研究会：平成 23 年 4 月 18 日（月）	於：東京音楽大学
第 2 回研究会：平成 23 年 5 月 30 日（月）	同上
第 3 回研究会：平成 23 年 6 月 20 日（月）	同上
第 4 回研究会：平成 23 年 7 月 25 日（月）	同上
第 5 回研究会：平成 23 年 8 月 26 日（月）	同上
第 6 回研究会：平成 23 年 10 月 24 日（月）	同上
第 7 回研究会：平成 23 年 11 月 28 日（月）	同上
第 8 回研究会：平成 23 年 12 月 12 日（月）	同上
第 9 回研究会：平成 24 年 1 月 23 日（月）	同上
第 10 回研究会：平成 24 年 2 月 22 日（水）	於：昭和音楽大学

研究・調査活動

外部講師招聘研究会（於：青山学院大学）：	平成 23 年 7 月
シンポジウム「ワークショップで社会が変わる」参加（青山学院大学主催）：	平成 23 年 10 月
「施設まるごと！ 文化発見フェスタ in ちば」文化フォーラム参加：	平成 23 年 11 月
「音楽大学・学部のキャリア教育・支援を考える」：シンポジウム参加（国立音楽大学主催）	平成 23 年 12 月
音楽団体・音楽大学主催ネットワーク会議参加（ニューヨーク）：	平成 24 年 1 月
英国視察（ギルドホール、バービカンセンター）：	平成 24 年 2 月
第 17 回 FD フォーラム参加（大学コンソーシアム京都主催）：	平成 24 年 3 月
リフレクティブ・コンセルバトワール（Reflective Conservatoire）会議（ロンドン）：	平成 24 年 3 月

3 大学連携事業学外評価員会

3 大学連携事業学外評価員（平成 24 年 3 月現在）

久保田 慶一 国立音楽大学 教授

澤 恵理子 社団法人日本演奏連盟 事務局長

田村 孝子 静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」 館長

原 武 サントリーホール 総支配人

善積 俊夫 社団法人日本クラシック音楽事業協会 常務理事

3 大学連携事業学外評価員会議

第3回評価員会：平成 23 年 10 月 7 日（金）

於：東京音楽大学

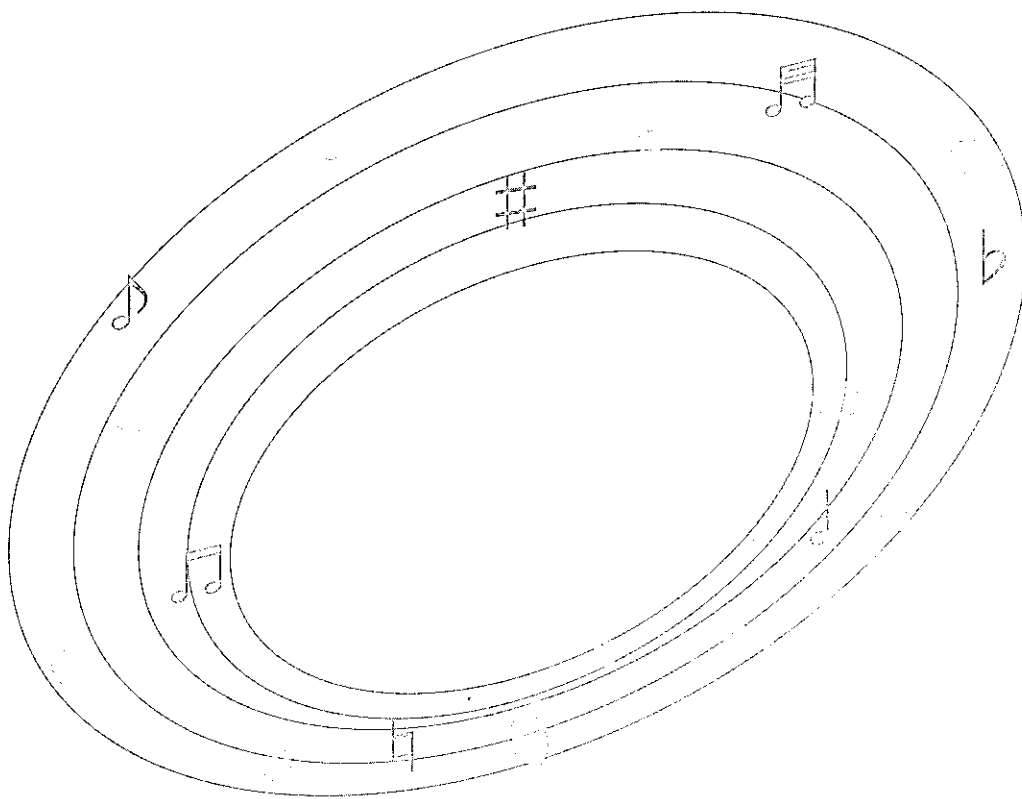
（インターネット・ビデオ会議システムを使用して、3 大学間を結んで実施）

第4回評価員会：平成 24 年 2 月 26 日（日）

於：昭和音楽大学

I. 3大学共通科目

「ミュージック・コミュニケーション講座」



平成23年度「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定

1. 平成23年度「ミュージック・コミュニケーション講座」の概要と教育効果測定

「ミュージック・コミュニケーション講座」（以下、MC講座）は、音楽系3大学による共同プロジェクト（以下、3大学連携プロジェクト）において、音楽系大学同士では初の共通科目として平成22年度に新設された。講座はインターネット・ビデオ会議システム（以下、IV会議システム）を活用し、各大学から2回ずつ（年間計6回）90分の授業が3大学間の同時配信・同時受講で行われる。また、MC講座の一環として、3大学の学生が合同で参加する夏期セミナーが開催される。

平成23年度は、講座全体のテーマを「コミュニケーション」とし、ワークショップの理論と実践を取り入れた内容で組み立てられた。とりわけ、夏期セミナーでは英国より講師を招聘して「クリエイティブ・ワークショップ」を体験し、講座のハイライトとなった¹。また、昨年度の経験を踏まえ、事前のガイダンスや講座後の振り返りを行う等よりきめ細かなフォローアップも組み込まれている。

上記のようなMC講座について、昨年度に続き平成23年度も教育効果測定を実施した。本稿では、その調査の概要及び結果を、昨年度の調査結果を参照しつつ報告する。なお、調査は3大学の教員の協力により、実施及び取りまとめたものである。

2. 調査方法

調査は昨年度と同様、①MC講座受講前（第1回講座開始前のオリエンテーション時）及び講座受講後（第6回講座終了時）に実施する「履修者調査シート」²による調査と、②夏期セミナー終了時の受講生に対するアンケート調査並びに3大学教員に対するコメントシートによる調査、の2つを基本的な枠組みとしている。調査対象期間は、平成23年度のMC講座（オリエンテーション平成23年5月11日～第6回平成23年11月30日）及び3大学合同夏期セミナー（平成23年8月31日～9月2日）である。また、調査対象者は、東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学の受講生である。

3. 「履修者調査シート」回答者の内訳

上記①の調査では、講座に出席した履修者及び履修者以外の受講生（聴講等）に対し「履修者調査シート」を配布し、回答を得た。回答者の内訳は表1・表2の通りとなった。

MC講座の受講生は、学年や専攻の枠組みを超えて、様々な学生が参加している。その中でも、平成23年度の受講生は、1年生の器楽・声楽専攻が半数以上を占めた。これを地域音楽活動関連科目³の参加者との相互の関係で見ると、MC講座受講生は必ずしも地域音楽活動の経験者ではなく、実践前の学生も多いことがわかる（表3）。これは、MC講座との同時履修を必須としていないことに加え、各大学によって地域音楽活動関連科目の対象年次が異なることにもよる。

1 第1回から第6回のMC講座及び夏期セミナーの詳細については、22頁～39頁を参照。

2 「履修者調査シート」の設問は、昨年度のものをベースとしつつ、今年度の講座内容に合わせて改訂した。20頁を参照。

3 地域音楽活動（アウトリーチ活動等）やコンサートの企画・運営等を体験し修得するプログラムで、3大学各校で内容は異なるが、いずれも授業科目となっている。プログラム名は、東京音楽大学「アクト・プロジェクト」、神戸女学院大学音楽学部「音楽によるアウトリーチ」、昭和音楽大学「アーツ・イン・コミュニティ」である。

表 1 平成 23 年度講座開始前調査回答者の内訳

	履修			専攻			学年					計
	履修者	非履修者		A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	大学院・短大	
		初めて	継続									
東京	15	6	7	22	6	0	17	3	5	3	0	28
神戸	20	0	0	18	0	2	5	8	1	6	0	20
昭和	12	8	4	13	9	2	17	2	2	1	短1:1 短2:1	24
合計	47	14	11	53	15	4	39	13	8	10	2	72

※ A 群は、器楽、声楽、作曲専攻。B 群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ、音楽療法専攻。C 群は、舞踊、ミュージカル専攻。

(参考) 平成 22 年度講座開始前調査回答者の内訳

	履修		専攻			学年					計
	履修者	非履修者	A 群	B 群	C 群	1 年	2 年	3 年	4 年	大学院	
東京	4	28	27	5	0	6	8	13	2	1	32
神戸	15	0	11	0	4	0	1	12	2	0	15
昭和	14	17	15	16	0	20	10	1	0	0	31
合計	33	45	53	21	4	26	19	26	4	1	78

表 2 平成 23 年度講座終了時調査回答者の内訳

	履修			専攻			学年					計
	履修者	非履修者		A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	大学院・短大	
		初めて	継続									
東京	6	4	2	11	1	0	7	2	2	1	0	12
神戸	12	0	0	11	0	1	3	8	1	0	0	12
昭和	8	2	0	4	6	0	10	0	0	0	0	10
合計	26	6	2	26	7	1	20	10	3	1	0	34

表 3 平成 23 年度講座終了時における地域音楽活動関連科目参加者

東京音楽大学	講座終了時 12 人中、「アクト・プロジェクト」のメンバー 6 人
神戸女学院大学音楽学部	講座終了時 12 人中、「音楽によるアウトリーチ」履修 2 人
昭和音楽大学	講座終了時 10 人中、「アーツ・イン・コミュニティ」参加 9 人

4. MC講座受講生の期待と成果

ここではまず、MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問 I の結果から、受講生の期待と成果を分析する。そして、その結果を踏まえ、夏期セミナー終了時の調査結果を分析する。

4-1. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問 I の結果

講座開始前の設問 I では、MC講座に対する期待を選択肢の中から複数回答可として質問した。図 1 から図 3 にその結果を示す。

〈講座開始前・設問Ⅰ〉

あなたがミュージック・コミュニケーション講座を履修しようと思ったきっかけは何ですか？

図 1 東京音楽大学受講生の回答

n=28, MA (%)

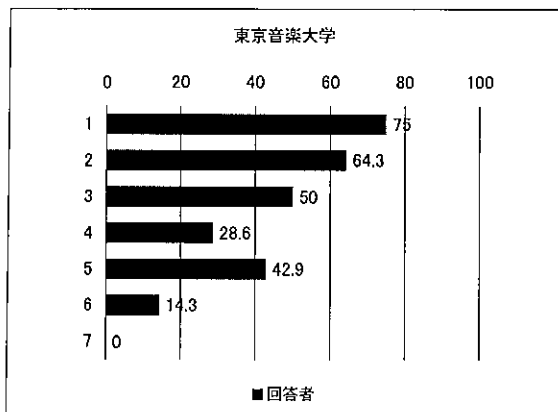


図 2 神戸女学院大学受講生の回答

n=20, MA (%)

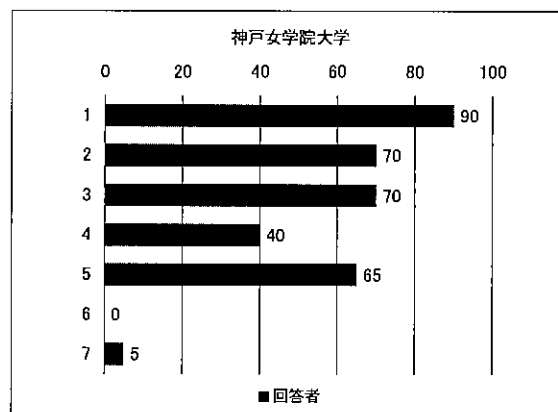
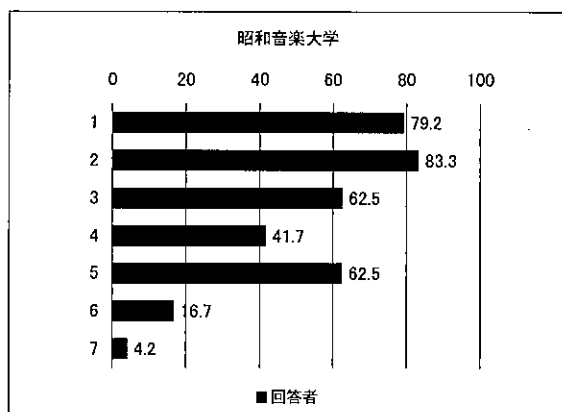


図 3 昭和音楽大学受講生の回答

n=24, MA (%)



〈設問Ⅰ 選択肢（複数回答可）〉

1. 音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたいと思ったから。
2. 将来、仕事をするときに役立ちそうだから。
3. 音楽に関して幅広く知識を得たいから。
4. 授業の形態（インターネット・ビデオ会議システムによる3大学同時受講）に興味を持ったから。
5. 他の大学の学生と交流したいから。
6. 昨年も受講して、継続的に学びたいと思ったから。
7. その他（自由記述）

結果から、東京音楽大学、神戸女学院大学では「1. 音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたいと思ったから」が選択肢の中で最も高い割合となっている一方、昭和音楽大学では、「2. 将来、仕事をするときに役立ちそうだから」が最も高い割合となっている。このほかの選択肢についても、大学によって割合が異なっている。このように、学生のMC講座への期待を大学ごとに分析すると、各大学の学生のニーズの違いが現れた。これは3大学共通科目の特徴のひとつとして、踏まえておく必要があると言えよう。

次に、講座終了時の設問Ⅰでは、MC講座で得た成果を選択肢の中から複数回答可として質問した。図4から図6にその結果を示す。

〈講座終了時・設問Ⅰ〉

あなたがミュージック・コミュニケーション講座で得た成果は何ですか？

図 4 東京音楽大学受講生の回答

n=11, MA (%)

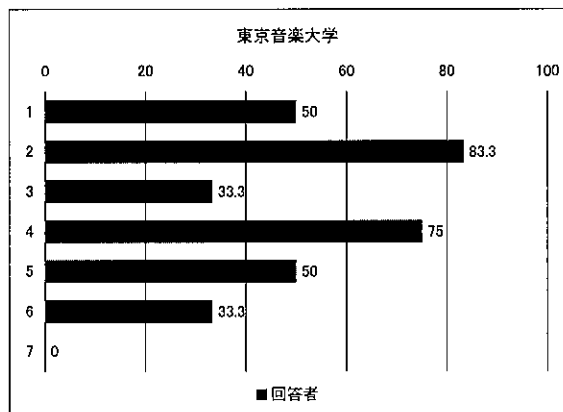


図 5 神戸女学院大学受講生の回答

n=12, MA (%)

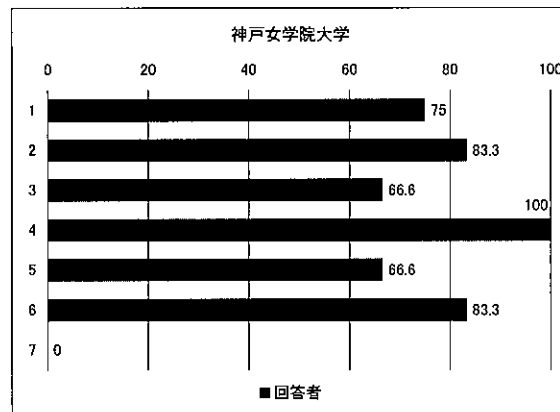
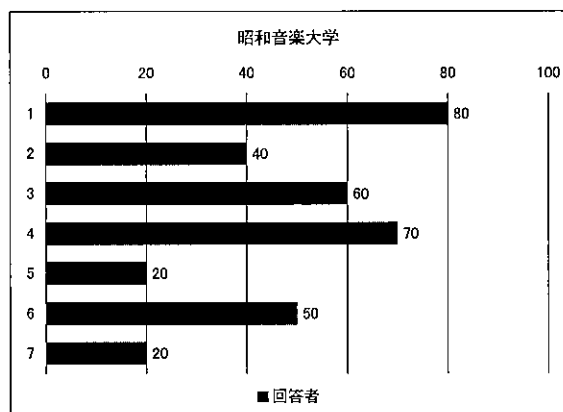


図 6 昭和音楽大学受講生の回答

n=10, MA (%)



〈設問Ⅰ 選択肢（複数回答可）〉

1. 音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。
2. 将来、音楽に関わる仕事をするために役立った。
3. 音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた。
4. 人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた。
5. インターネット・ビデオ会議システムによる3大学同時受講で講義が一層有意義なものになった。
6. 他の大学の学生と交流することができた。
7. その他（自由記述）

講座開始前の回答よりも顕著に、各大学によって割合の順位が異なり、成果の認識に違いがあることが示されている。東京音楽大学では、「2. 将来、音楽に関わる仕事をするために役立った」が83.3%、次いで「4. 人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた」が75%となっている。神戸女学院大学では、「4. 人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた」が100%、次いで「2. 将来、音楽に関わる仕事をするために役立った」と「6. 他の大学の学生と交流することができた」が83.3%となっている。昭和音楽大学では、「1. 音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった」が80%、次いで「4. 人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた」が70%となっている。

このように、各大学の学生が成果として挙げた項目は必ずしも一致していない。その原因は本調査から直接に導き出すことはできないが、先に触れたように地域音楽活動関連科目をはじめとした科目構成・内容が大学によって異なることや、受講生の学年・専攻の違いが影響していると考えられる。

一方で、「4. 人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた」が
いずれの大学でも高い割合となっていることは、今年度のMC講座のテーマが講座内容に反映され
た結果と考えられる。表4に示すように、3大学全体の割合を見ても最も高い割合の84.8%となっ
ており、昨年度の結果と比較すると、学生が学んだ内容をはっきりと読み取ることができる。

この結果に最も大きく影響していると考えられるのが、MC講座の一環として開催された「3大
学合同夏期セミナー」であり、次にこのセミナーにおける調査の結果を見てみたい。

表4 設問Ⅰ 平成23年度講座終了時（3大学全体）

n=33, MA

	度数(人)	割合(%)	東京(人)	神戸(人)	昭和(人)
1. 音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。	23	69.7	6	9	8
2. 将来、音楽に関わる仕事をするために役立った。	24	72.7	10	10	4
3. 音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた。	18	54.5	4	8	6
4. 人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた。	28	84.8	9	12	7
5. インターネット・ビデオ会議システムによる3大学同時受講で講義が一層有意義なものになった。	16	48.5	6	8	2
6. 他大学の学生と交流することができた。	19	57.6	4	10	5
7. その他	2	6.1	0	0	2

(参考) 平成22年度講座終了時

n=42, MA

	度数(人)	割合(%)	東京(人)	神戸(人)	昭和(人)
1. 音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。	15	35.7	1	9	5
2. 将来、音楽に関わる仕事をするために役立った。	23	54.7	9	9	5
3. 音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた。	36	85.7	11	14	11
4. 音楽を理解するためのアプローチ方法について考えることができた。	23	54.7	8	9	6
5. インターネット・ビデオ会議システムによる3大学同時受講で講義が一層有意義なものになった。	12	28.5	3	5	4
6. 他大学の学生と交流することができた。	27	64.2	8	12	7
7. その他	1	2.3	0	1	0

4-2. 3大学合同夏期セミナーにおける調査結果

平成23年度の夏期セミナーは、3日間の体験を通して、創造性、コラボレーション（協働）、リー
ダーシップを実践的に学ぶことが主眼であった（詳細は28頁～33頁を参照）。セミナー終了後、受
講生に対しアンケート調査を実施するとともに、3大学教員からもコメントシートによる回答を得
た。以下にその結果をまとめる。なお、受講生は3大学合計で53名である（表5）。

表5 夏期セミナーアンケート回答者の内訳

	専攻			学年						計
	A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	大学院	短大1年	
東京	10	1	0	6	1	2	2	0	0	11
神戸	21	0	2	5	8	1	8	1	0	23
昭和	10	8	1	14	0	3	1	0	1	19
合計	41	9	3	25	9	6	11	1	1	53

※ A群は、器楽、声楽、作曲専攻。B群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ、音楽療法専攻。
C群は、舞踊、ミュージカル専攻。

4-2-1. 受講生に対するアンケート調査

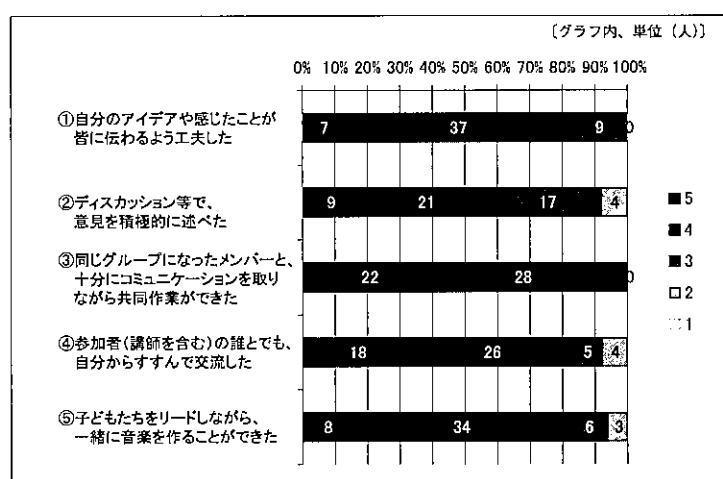
受講生に対するアンケート調査では、①自分自身の取組についての評価、②グループとしての取組についての評価、③セミナーによる自分の考えの変化や気づき、の3つの観点から質問をした。

①自分自身の取組についての評価

自分自身の取組については、「③同じグループになったメンバーと、十分にコミュニケーションを取りながら共同作業ができた」が最も高い評価となった。これに対し、「②ディスカッション等で、意見を積極的に述べた」については相対的に低い評価となっている（図7）。

図7 夏期セミナー自己評価（3大学全体）

質問：セミナーにおいて、あなた自身の取り組みはいかがでしたか。（5段階で当てはまる数字を回答）

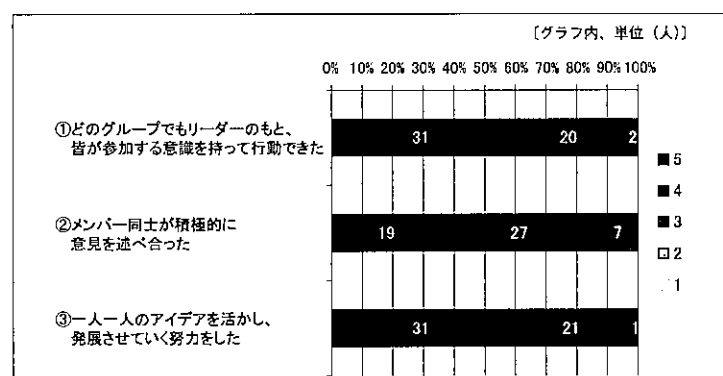


②グループとしての取組についての評価

グループとしての取組は、「③一人一人のアイデアを活かし、発展させていく努力をした」が最も高い評価となった。一方、「②メンバー同士が積極的に意見を述べ合った」が、他の選択肢に比べ若干低い評価となっている（図8）。

図8 夏期セミナーグループ評価（3大学全体）

質問：3日間で、あなたが加わったグループの取り組みはいかがでしたか。（5段階で当てはまる数字を回答）



③セミナーによる自分の考えの変化や気づき

セミナーを振り返って、自分の考えの変化や気づきについて記述形式で質問したところ、思考や態度の柔軟性、積極性、協調性について学んだという回答や、即興的に音楽をつくっていくことの楽しさを体験することができたという回答が多く見られた。以下にその一部を掲載する。

〈記述回答の抜粋〉

- ・頭の使い方が全く変わりました。音楽にしても言動にしてもどこか「良いものを作らなければ、正しいことを言わなくては」という意識が強かったのですが、そのような無意識のワンクッションが自然に消えていったように思います。目の前で出来上がっていく音楽に体が勝手に反応したり、場の空気を体の内側が瞬時に感じようと思いました。湧き出るアイデアを人に伝えたり、共有したくてしょうがない気持ちになりました。(東京／ピアノ／4年)
- ・リーダーというのはどのようなものか、考えるようになりました。今まではただ人を引っ張るだけだと思っていましたが、周りを見て空間を作り出したり、補助をする役割があるのではと気づくことができました。(昭和／アートマネジメント／1年)
- ・参加するまでは、最後のディスカッションが嫌だったけれど、いざ活動してみると自分の思ったことを伝えたいと思ったり、皆が思ったことを知りたいと思うようになりました。(神戸／声楽／2年)

4-2-2. 教員からのコメント

学生自身の自己評価は以上の通りであるが、3大学教員側からは、学生の取り組み方はどのように見えたのだろうか。教員⁴によるコメントシートでは、夏期セミナーにおける指標として①自己表現力、②言語化・思考能力、③協調性、④積極性・行動力、⑤子どもとのコミュニケーション能力の5つの項目についてコメントを求めた。ここでは、コメントの概要を記述する。

まず、①については、3日間のセミナーの初日は戸惑う姿が見られたが、次第に、言葉や視線、息遣い等を工夫して伝えようとするようになった。これは、講師の巧みなリードや周りの人々への信頼感が醸成されたことが学生にとって大きなバネとなったとのコメントがあった。

②については、最終日に行われたディスカッションで大きな成長が見られた。学生同士の小グループでの話し合いでは「セミナーで得たことの意義や新しく得た視点についての指摘がかなりの確に細かく叙述された」と評価するコメントがあった。

③については、3日間を通してスムーズに共同作業が行われるようになった。一方で、協力して取り組もうという姿勢はあったものの、「実際にそれを実行に移す、ということについては、かなり個人差があったように思う」という指摘も挙がっている。

④については、初日から積極的に意思疎通を図り、交流する姿が見られた。大学や専攻を混合してグループを組んだことや、それまでのMC講座の積み重ね（コミュニケーション能力の重要性の認識やIV会議システムを通じた交流）の効果が、これにつながったのではないかとのコメントがあった。

⁴ コメントシートの回答は、武石みどり教授（東京音楽大学）、武濤京子教授（昭和音楽大学）、津上智実教授（神戸女学院大学音楽学部）、村中洋子准教授（東京音楽大学）、赤木舞専任講師（昭和音楽大学）より提出された。

⑤については、「それまでのセッションでは見られないような協調性・思いやりを示す学生が多く見られたことは、日常接している教員にとっては新しい驚きであった」というコメントが示すように、子どもが加わったことによって普段と大きく異なる学生の姿が見られ、教員側は驚いた様子であった。一方で、「個人差が大きく、周りに子どもがいてもあまり意識を向けない学生も散見された」という指摘もあるが、総じて積極的に子どもと接する学生が多かった。

3大学の教員は日常的に学生と接している立場から、上記のようにセミナーで大きな成長が見られたり、普段とは異なる態度や姿勢から強い印象を受けたことが示されている。学生の自己評価と比較すると、特にディスカッションに関する点は、学生自身はあまり高い評価をしていないものの、教員側は3日間での成長を実感した様子である。

ここまで、MC講座への期待と成果に関する調査、及び夏期セミナーに関する調査の結果を見てきた。受講生はIV会議システムを通じたMC講座の授業でコミュニケーション能力の重要性を学ぶと同時に、夏期セミナーでは実際に体験することによって、その必要性や自分自身の課題を発見した様子である。特に夏期セミナーでは、それまでになかった新たな視点を得たり、他の人との関わり方について学生自身が幅を広げて考えられるようになったことが示されている。

5. MC講座受講生の意識・意欲の変化

次に、MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの結果から、受講生の意識や意欲の変化を見ることとしたい。

5-1. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅱの結果

設問Ⅱでは、将来の活動の希望について、①音楽家②スタッフとして音楽に携わる③音楽指導者④まだわからない、の4つの選択肢で質問した。受講前後で対象者を同じくして比較するため、履修生に限定して集計を行った（表6・表7）。

開始前と終了時の調査結果を比較すると、特に「3. 音楽指導者として活動をしたい」と回答した割合が、開始前14.9%から終了時23.1%へと増加している。また、「1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい」と回答した割合も、開始前34.0%から終了時38.5%へと若干割合が高まっている。これに対し、「4. まだわからない」は開始前29.8%から終了時19.2%へと減少し、昨年度と同様、講座終了時には将来に向けた目的意識の高まりが見られる。

〈設問Ⅱ〉あなたは将来、主にどのような活動をしたいですか？

表6 講座開始前（3大学履修生合計）

n=47

	度数(人)	割合(%)	A群(人)	B群(人)	C群(人)
1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。	16	34.0	16	0	0
2. スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい	7	14.9	0	7	0
3. 音楽指導者として活動をしたい	7	14.9	7	0	0
4. まだわからない	14	29.8	12	0	2
その他	3	6.4	1	0	2

表7 講座終了時（3大学履修生合計）

n=26

	度数(人)	割合(%)	A群(人)	B群(人)	C群(人)
1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。	10	38.5	9	0	1
2. スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい	4	15.4	0	4	0
3. 音楽指導者として活動をしたい	6	23.1	6	0	0
4. まだわからない	5	19.2	4	1	0
その他	1	3.8	1	0	0

5-2. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅲの結果

設問Ⅲでは、自由記述により、「音楽活動をするためには、どのようなコミュニケーション能力が必要だと思うか」を質問した。

開始前の回答を見ると、「自分の考えを伝える・相手の考えを理解する」ことや、「様々な人と話す」ことをはじめ、「コミュニケーション能力」を多様な角度から捉えていることが表れている（表8）。

一方、終了時には、相手の考えや気持ちを傾聴すること、相手を受け入れること、自分からオープンな気持ちになること等、講座の内容の中で学んだことが表れている（表9）。すなわち、人と人との関わる際の基本的な態度や姿勢に関し理解が深まったことが示されており、こうした記述から、講座として一定の方向性を持って「コミュニケーション」のあり方を学んだと考えられる。

〈設問Ⅲ〉音楽活動をするためには、どのようなコミュニケーション能力が必要だと思いますか？

表8 講座開始前（3大学全体）

主な記述	件数	備考
自分の意見を伝える力。自分の考えを的確に相手に伝える能力。	20	東京・神戸・昭和
相手の考えを理解する能力。	15	東京・神戸・昭和
音楽に限らず様々な分野の方と話す能力。誰とでもコミュニケーションを取りたいという気持ちが大切。	10	東京・神戸・昭和
コンサート企画する側や裏方、表方のことも理解できること。出演者、聴衆など、色々な立場になって考えた行動ができる力。	6	東京・神戸・昭和
それぞれの個性を尊重し合い、お互いに刺激し合うことが必要。	3	昭和・神戸
自己満足で終わらず、相手（聴衆）への思いやりを大事に出来る能力。	3	神戸・東京
自分から関わろうとする積極的な姿勢が必要。	3	昭和・神戸
音楽を言葉で伝えられるだけの幅広い語彙力や表現力	3	東京・昭和
その場の状況に対応するために必要な交渉力。語学力。情報収集力。	2	昭和・東京
その場に合った臨機応変に対応する能力	2	東京
音でアンサンブル出来る能力と会話、相手を思いやる事が大切。	1	昭和
フレンドリーに、優しく、明るくなること。	1	昭和
リーダーシップをとる能力	1	東京
柔軟な考え方。人の意見を素直に聞き入れる能力が必要。	1	神戸
色々な人たちの意見を聞き、話し合いをスムーズに進める能力	1	東京
自分自身のことを上手に売り込んでいく力	1	東京
“間”を大切にできる能力	1	昭和
トラブルが起きてもすぐに対応できる能力	1	神戸
社会人としての一般常識を持ち合わせた能力	1	東京
どんな時でも真摯な姿勢を持つことが必要	1	東京
まだあまり分からない。	2	昭和・神戸

表9 講座終了時（3大学全体）

主な記述	件数	備考
相手がどのように感じているかを考えること。相手をおもんばかること。	6	東京・神戸・昭和
自分の考えを伝えると同時に、相手の考えを聞くこと。	4	東京・神戸・昭和
相手を受け入れる、認めること。	4	東京・神戸
一方通行ではなくお互いが対等になって音楽を楽しむこと。	2	昭和
皆と一緒に一つのものを共有し合うこと。	2	神戸
積極的になること。自分から心を開く前向きな意識を持つこと。	2	東京・昭和
感じたことを行動にうつすこと。	2	神戸
皆がそれぞれ気持ちよく、楽しくなること。	1	東京
謙虚であること。	1	昭和
報（報告）・連（連絡）・相（相談）をきちんとすること。	1	昭和
人と人のつながりを大切にすること。	1	昭和
広い視野を持って周りをよく見ること。	1	昭和
瞬発力のあるアイデアの出し方ができること。	1	神戸
音楽だけでコミュニケーションできること。	1	昭和
表情や声で表現すること。	1	東京
基本的な人間性	1	東京
相手の感性を引き出すこと。	1	東京
幅広い年齢層や音楽の知識のない人にもわかりやすい言葉の使い方や表現	1	東京

5-3. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅳの結果

設問Ⅳでは、「音楽コミュニケーション・リーダー」となるための意欲を持ち、必要な学習を行っているかどうかを、15の項目について「非常にあてはまる」を5、「全くあてはまらない」を1とする5段階評価で質問した。受講前後で対象者を同じくして比較するため、履修生に限定して集計を行った（表10・表11）。

開始前と終了時の数値を比較すると、以下の10の項目で0.1ポイント以上の増加が見られた。

1. ホールだけではなく、いろいろな場所で演奏や音楽活動をしたい
3. 曲目を選ぶときには、聴き手のことも考えている
4. 音楽を伝えるために、演奏だけではなくトークにも挑戦したい
5. コンサートのつくり方やマネジメントを学んでみたい
6. 自分の専攻以外の楽器や、学科にも興味がある
9. インターネットや新聞等で情報を集め、社会の動きに関心を持っている
10. 地域の学校の子どもや、演奏会に足を運ばない人に音楽を届ける活動を積極的にやりたい
13. 他人の話をよく聞くようにしている
14. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる
15. チームの仲間を導き、まとめることができる

この結果から、少なくとも1年間の講座を継続して受講した学生は、音楽活動の際観客への伝え方を工夫することや、自分の専門分野以外にも興味・関心の幅を広げること、コミュニケーション能力を高めること等の点で、意欲が高まったことが示されている。

〈設問Ⅳ〉

表 10 講座開始前 (3 大学履修生合計)

n=47

設問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
5	31	16	16	15	24	24	28	34	5	25	26	7	18	19	6
4	11	21	21	12	18	15	18	10	15	15	16	20	23	22	16
3	4	9	6	11	4	5	1	3	21	5	5	17	5	6	18
2	1	1	3	8	1	3	0	0	5	2	0	3	1	0	5
1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
数値平均	4.53	4.11	4.02	3.68	4.38	4.28	4.57	4.66	3.38	4.34	4.45	3.66	4.23	4.28	3.40

表 11 講座終了時 (3 大学履修生合計)

n=26

設問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
5	19	12	11	12	14	14	17	18	3	16	14	2	12	12	4
4	5	7	8	7	11	9	5	6	13	7	8	15	12	11	9
3	2	7	6	6	1	3	4	2	7	3	3	7	1	2	10
2	0	0	1	1	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	3
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
数値平均	4.65	4.19	4.12	4.15	4.50	4.42	4.50	4.62	3.62	4.50	4.44	3.72	4.44	4.40	3.54

6. まとめ — 平成23年度MC講座の教育効果

平成23年度MC講座では「コミュニケーション」をテーマとした組み立てを行った。これは昨年度の講座内容を踏まえ、今年度は一つのテーマに焦点を当てて学びが深められるよう工夫したものであるが、調査結果から、受講生が講座の趣旨を理解し、自分自身の課題を発見したり、意欲を高めることができた点で一定の成果が得られたと言えよう。

その上で、MC講座の教育効果を取りまとめるにあたり、下記の3つの視点を挙げて述べることにしたい。

①MC講座が対象とする学生

受講生の内訳から、本講座では1年生の器楽・声楽専攻が多数であるものの、各学年から受講生がおり、かつ専攻も幅広い。調査結果では、受講生のニーズや成果が大学によって異なる結果となっていたが、このように受講生が多様であり、さらにはカリキュラム等各大学の個性の違いが背景にあることは、3大学共通科目の重要な特徴とも言える。したがって、3大学の受講生それぞれの受けとめ方を尊重し、今後もこれに留意する必要がある。

②大学間の交流

①の視点を前提としつつ、MC講座においては、3大学をIV会議システムで接続し授業内で意見交換をしたり、合同夏期セミナーで同じ空間を共有し共同作業を体験することによって、大学の枠組みを超えて交流したことが大きな意味を持っている。受講生の中には、こうした自由な雰囲気の中で前向きな考えを持つようになったり、積極的に人と関わりたいという気持ちが生まれたという感想が見られる。

③キャリア意識の醸成

②の効果を含め、社会との関わりを持ちたいという意欲が、実際の行動として受講生の将来の活動にどのように結び付いていくのかは、本講座が2年目ということもあり成果が表れているとは言えない。しかし、講座終了時に「MC講座に関連する、講座以外の活動に参加したか」を問うたところ、3大学連携プロジェクトの枠組みで実施した「公共ホール共同事業」⁵への参加をはじめ、

⁵「公共ホール共同事業」については、42頁～55頁を参照。

学外でのワークショップやアウトリーチ活動への参加・見学、自主的な演奏会の企画等、自ら行動する学生が現れている。そのため今後は、こうした授業外の活動への波及についても、きめ細かく把握する必要があると考えられる。

本報告の終わりに、MC講座を受講した学生の感想を以下に掲載する。

(佐藤 良子)

「ミュージック・コミュニケーション講座」を受講しての感想（自由記述）

- ・この講座を受講する以前は、私にとって音楽というのは演奏するもの、鑑賞するもののどちらかでしかありませんでした。いくつかの講座でお話を聞いたり、実際に他の受講者のみなさんとコミュニケーションを取ったりして、音楽と一緒にやっていくことや、音楽を通じてコミュニケーションを取ることを学ぶことができました。ここで学んだことを、これからの活動に活かしていきたいです。この講座を受講しているみなさんが、とても積極的な方々だったので楽しく学べました。(東京音大／ピアノ／2年)
- ・この講座での一番の収穫は、「1つの答え」はないということです。皆それぞれ目線や感じる違う分、たくさんの意見や感情が生まれてきて、それが音楽に繋がっていくのに、「これでいいのか」「おかしくないか」と、粹にはまったような事を考えていると、ずっとそのまま止まってしまうと思いました。それを夏期セミナーで自ら体験して痛感しました。実際、即興で音楽を作る時も、思いついても「これって変かもしれない」と考えてなかなか出せない自分がいて、逆に最終日の小学生とのワークショップで、思ったことを素直に言ってくれる子どもたちの発想力の豊かさに感動しました。「音楽」という、感情を伝えることが出来ることに携わっているのだから、もっと積極的に色々なことに挑戦していきたいと思いました。(神戸女学院大／ピアノ／2年)
- ・全ての講座を通して、講師の先生方が、全員が積極的にワークショップ（講義）に参加できるような進捗をされていて、とても参加しやすかったです。また実際に行ったワークショップの例を見せていただいた際に、成功した例だけでなく、あまり上手くいかなかった例も見せてくださり、さらに、何故だめだったか、何が良かったのか、ということの説明してくださった点が理解しやすかったです。そして自分がいつかワークショップ・コンサートを開く時の参考になると思いました。(昭和音大／アートマネジメント／1年)

平成23年度「ミュージック・コミュニケーション講座」履修者調査シート（講座開始前）

平成 23 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」履修者調査シート(調査開始頁)

学籍番号	学年	専攻	性別	男	女
履修 1. N1C 課外 1	2. MC 課外 II	「オーディエンス」に 1. 参加する 2. 参加しない			

Ⅰ あなたが「ミュージック・コミュニケーション」を履修しようと思ったきっかけは何ですか？(複数回答可)

- 音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたいと思ったから。
- 将来、仕事をするとときに役立ちそうだから。
- 音楽に関して広く知識を得たいから。
- 授業の形態(インターホート・ビデオ会議システムによる 3 人同時受講)に興味を持ったから。
- 他の大学の学生と交流したいから。
- 昨年も履修して、継続的に学びたいと思ったから。
- その他 記述:

Ⅱ あなたは将来、主になような活動をしたいですか？(どれかひとつに○)

- 音楽家(演奏家や作曲家)として音楽活動をしたい。
- スタッフとして音楽に関わる仕事をしたい。
- 音楽関係者として活動をしたい。
- まだわからない。

Ⅲ 音楽活動を続けるためには、どのようなコミュニケーション能力が必要だと思いますか？

記述:

9	以下の設問について、自分の考えを「6段階」であてはまる 4 ややあてはまる 3 どちらともいえない 2 あまりあてはまらない 1 全くあてはまらない 0 の段階で選択して番号に○をつけてください。					
1	ホールだけでなく、いろいろな場所でも演奏や音楽活動をしたい。	5	4	3	2	1
2	コンサートのお金をよってみたい。	5	4	3	2	1
3	曲目を選ぶときには、聞き手にも考えてみたい。	5	4	3	2	1
4	音楽を伝えるために、演奏だけでなくトークにも挑戦したい。	5	4	3	2	1
5	コンサートのつくり方やマネジメントを学んでみたい。	5	4	3	2	1
6	自分の演奏以外の楽器や、学問にも興味がある。	5	4	3	2	1
7	音楽に関連する様々な職業に興味がある。	5	4	3	2	1
8	音楽に関わる仕事や環境を体験してみたい。	5	4	3	2	1
9	インターネットや新聞等で音楽に関する、社会的動きに関心を持っている。	5	4	3	2	1
10	地域の子どもや若者、障がい者に音楽について伝えたい活動に関与したい。	5	4	3	2	1
11	広く多くの人と、コミュニケーションすることが好きである。	5	4	3	2	1
12	自分の意見をわかりやすく述べよう工夫している。	5	4	3	2	1
13	他人の話をよく聞くようにしている。	5	4	3	2	1
14	周りの人と協力して仕事に取り組むことができる。	5	4	3	2	1
15	チームの役割を明確にし、まとめることができる。	5	4	3	2	1

調査は以上です。ご協力いただきありがとうございました。

平成23年度「ミュージック・コミュニケーション講座」履修者調査シート（講座終了時）

平成 23 年度 「ミュージック・コミュニケーション講座」 履修者調査シート（最終研修時）				性別	男	女
学籍番号		学年		専攻		
科目等 1. 科目名	2. 教科・成績	「ミュージック・コミュニケーション」に 1. 参加した 2. 参加しなかった				

1 あなたが「ミュージック・コミュニケーション講座」で得た成果は何ですか？（複数回答可）

1. 音楽を通して広いいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。
2. 音楽を通して広いいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。
3. 音楽を通して広いいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。
4. 人と人とのコミュニケーションやグループについて学ぶことができた。
5. インターネット・ビデオ公開システムについて学ぶことができた。
6. 他大学の学生と交流することができた。
7. その他 音楽

2 あなたは将来、生にどのような活動をしたいですか？（どれかひとつに○）

1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。
2. スタッフとして音楽に関わる仕事をしたい。
3. 音楽関係者として活動したい。
4. まだわからない。
5. 音楽活動をするためには、どのようなコミュニケーション能力が必要だと思いますか？

回答：

V あなたは今年度「「英語」が「コミュニケーション」の環境」に関連する、環境以外の活動に参加しましたか？（複数回答可、可、否
はまる数字に○） ※学外の活動でも、参加した場合は記入してください。

1. 公共・民間共同事業（公演）に参加した。 フータージュ展、場所等；
2. ワークショップに参加した。 シンポジウム名、場所等；
3. シンポジウム等に参加した。 フータージュ展、場所等；
4. アクトーザ活動に参加もしくは見学した。 場所・出演者等；
5. 音楽事業の環境を体験もしくは見学した。 事業名、出演者等；
6. その他 自由記入；

VI 「「英語」が「コミュニケーション」の環境」を体験したの感想を、自由に記入してください。

VI 「*Love's Labour's Lost*」の演習を受講しての感想を、自由に記述してください。(質問ゼミナーを含めます)。

・いただきありがとうございました

平成 23 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

第 1 回実施報告書

講座の名称	第 1 回ミュージック・コミュニケーション講座 「新しい学びとしてのアウトリーチを考える ～音楽家が社会に出ることの意味を問い直す～」
講 師	荻宿 俊文（青山学院大学 教授）
実施日時	2011 年 5 月 18 日（水）18:30-20:00
実施場所	東京音楽大学 A 館地下 100 教室
講座の概要	<p>3 大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第 1 回は、青山学院大学教授の荻宿俊文氏を招き、東京音楽大学にて実施した。</p> <p>講座は「新しい学びとしてのアウトリーチを考える～音楽家が社会に出ることの意味を問い直す～」と題し、教育学・社会学の視点からアウトリーチやワークショップについて研究し、人材育成にも積極的に関わっている荻宿氏が、現在の社会変化の流れを踏まえながら、アウトリーチおよびワークショップの定義、そのあり方を話した。</p> <p>そもそも音楽家が社会に出ることはなぜ必要なことで、その手段にはどんなことがあるのかというポイントについて、現在芸術分野及び教育分野で注目されているワークショップの学問的定義、それを支える理論体系、そしてこのワークショップがなぜここまで社会に支持され始めているのかということについて、様々な例を使って解説された。特に今までの 50 年間とこれからの 50 年間は圧倒的に異なり、特に 2011 年 3 月 11 日の震災以降、コミュニティのあり方が変化する中で、アウトリーチやワークショップという「分かち合う」ことを重視した活動が今後より発展していくだろうということが強調された。その中で社会が求めている「生きる力」がまさにコミュニケーション力であり、その力の人々、特に子どもたちが培う手段のひとつとして音楽が高い可能性を有すること、そしてその活動を率いる能力のある音楽コミュニケーション・リーダーとは、「音楽の専門性+コミュニケーション力+社会性」を兼ね備えている人材を指し、「人の心を理解し、結びつけ、様々な状況に適応し問題を解決する能力とリーダーシップ」を持った人であると語った。</p>

《学生のことば》

・今回の講座で、“教育”という場の新たな角度からの楽しみ、やりがいを知ることができました。学ぶ空間をどれだけ居心地の良いものにするか、考えられることはたくさんあると知り、教育者として社会に出たいという気持ちが高まりました。ありがとうございました。

（東京／ピアノ／1年）

・「やりたいからやる」という自発的な意志を子供達に持ってもらえるように、子供との会話の仕方、説明の仕方について考え、実際にボラ

ンティア活動をするときに役立てたいと思いました。「やりなさい」と言われるからやっていることでも、新しい発見をすることでどんどん楽しみが広がっていくことを子供達に分かってもらいたいです。

（東京／ピアノ／1年）

・東日本大震災後、時代は変わっていくというお話を聞いて、本当にその通りだと思いました。私が社会に出た時に音楽コミュニケーション・リーダーとして、他者と分かち合い、自発的に学ぶような時代にしていきたいです。これから

の50年について、自分たちで考えていきたいです。人口の問題などを聞いて、とても危機感をおぼえました。

(東京／ピアノ／3年)

・正しい答えを探すのではなく、それぞれが導き出した答えがでるまでの過程を大切にすることが一つの特性である。正しい答えではなく原因追求が大切という事だ。答えは自分の中にあり、自分が何か、何が出来るかを発見して納得する事の喜びを参加者に味わってもらう事が魅力である。

(神戸／ピアノ・声楽／4年
※2～3人のグループで協同回答)

・子どもたちに、音楽の楽しさを伝えたいという漠然とした考えを持っていたが、ただ楽しさを伝えるだけではなく、そこから生まれた分かち合いで関係性を変化させていく事も可能なのだと分かった。

(神戸／ピアノ・声楽／2年
※2～3人のグループで協同回答)

・今まで、「間違っではいけない」という潜在的な刷り込みが頭の中にあったことに改めて気

付いた。これからはそれを恐れずにいろいろなことに取り組みたいと考えるとともに、(そういった考えを)これからの子どもたちに対する教育にもどんどん組み込んでいって欲しいと思います。

(神戸／ピアノ・声楽／1年
※2～3人のグループで協同回答)

・アウトリーチやワークショップは正しい答えを要求するのではなく、一人一人が納得する答えを探すというお話が印象に残りました。

(昭和／クラリネット／1年)

・ワークショップをやっていく上での基盤になると思いました。また、これから私たちが社会にどのように貢献していけば良いか、ということを考えるきっかけになったと思います。

(昭和／アートマネジメント／1年)

・コミュニケーションは「自分」対「他者」の間に起きることだと思っていたが、もう一歩踏み込んで「自分の考え」対「他者の考え」を分かり合うことだと思った。

(昭和／アートマネジメント／3年)



※写真は東京音楽大学の様子です。

平成 23 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」 第 2 回実施報告書

講座の名称	第 2 回ミュージック・コミュニケーション講座 「実践コミュニケーション入門」
講 師	絹川 友梨（株式会社インプロ・ワークス 代表取締役） 廣瀬 日美子（アシスタント）、島崎 真弓（アシスタント）
実施日時	2011 年 5 月 25 日（水）18:30-20:00
実施場所	昭和音楽大学 南校舎 C511 階段教室
講座の概要	<p>3 大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第 2 回は、インプロ（即興演劇）を用いた授業や企業研修の講師等、多方面で活躍する絹川友梨氏を講師に迎え、昭和音楽大学主導による遠隔ワークショップを実施した（他の 2 会場にアシスタントを配置）。</p> <p>机や椅子を取り払った教室で自由に歩き回りながら、握手をする等ウォーミング・アップから始まった。その後、言葉のキャッチボールをしながら自分の意図を的確に相手に投げたり、ペアになって相手のリードに身をまかせたり、グループで一つの物語を即興的に作る「シェアード・ストーリー」を行い、学生たちはコミュニケーションの構造としての「投げる（発信する）」「受け取る（受信する）」「投げ返す（積み上げる）」を実体験した。また、アクティビティの都度コミュニケーションのポイントを振り返り、パワーポイントを使用しつつ解説が行われた。</p> <p>学生たちは、初対面でもアクティビティに積極的に参加し、振り返り際には互いに素直に感想を述べ合った。絹川講師は、神戸女学院大学、東京音楽大学に派遣されたアシスタントの各講師と連携し、楽しく活発に講座を進めることによって、心をオープンにし、相手の気持ちを感じて柔軟に対応するよう、学生をリードした。また、相手の考え方を受け入れる「イエス・アンド」を意識することによって自分の世界も広がるという絹川講師の解説に、学生たちは大きな示唆を得た様子であった。</p> <p>絹川氏は第 5 回の講座も担当するため、MC 講座全体の流れを踏まえながらより一層実践的な講座にしたいと意欲を見せた。</p>

《学生のこぼ》

・相手に自分の話を聞いてもらうには、まず自分が相手の話を聞かないといけない。話を聞いてほしいと思っている人の心にまでしっかりと耳を傾けて、表面だけでなく、しっかり意思の疎通をとっていきたいです。

（昭和／器楽／1年）

・私は企画することに興味があるのですが、その中で「イエス・アンド」ということを活かしていきたいと思いました。話し合いなどで、「イエス・バット」としていたら、なかなか良いアイデアは浮かばないと思うからです。「どれ

かひとつだけ」でなく、いろいろな意見を受け取っていきたいと思いました。

（昭和／アートマネジメント／1年）

・即興で何かをしたりする時に「正しい答え」や周りにどう思われるかを考えがちで固くなってしまいますが、そうではなく、思ったこと、感じたことを受け止めることが大事だと思いました。

（神戸／ピアノ／2年）

・最初は少し不安な部分もありましたが、少しずつ相手を信頼する気持ちが出てきてどんどん波長を合わせることが出来ました。言葉で言わ

なくても気持ちが一つになったのが分かって、不思議な気分でした。

(神戸／ピアノ／1年)

・動きやすい格好でと言われて、どんなことをするのかと思ったら、とてもユニークなことをしていて面白かったです。コミュニケーションを取ることは誰でもやっているはずなのに時に難しく、でもこの講座ではそれを体現することでコミュニケーションをじかに感じる事が出来たし、とてもシンプルな気がしました。

(東京／器楽／1年)

・自分の投げかけ方次第で、相手の受け取り方やそれに使うエネルギー量がかなり違って来るんだろうなと思いました。

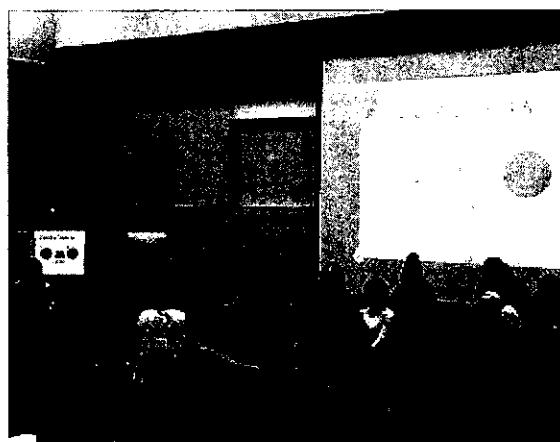
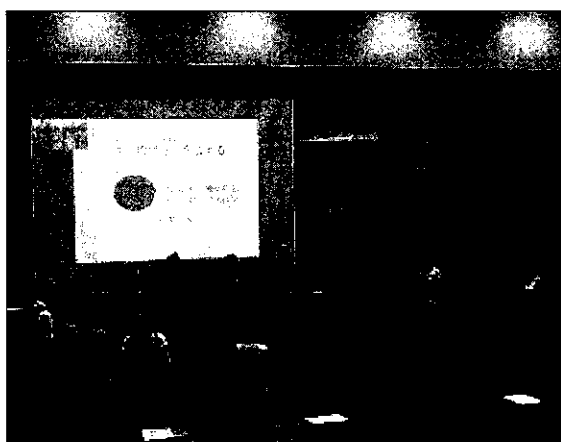
(東京／声楽／1年)

・「イエス・アンド」の考え方がすごく心に残りました。相手を肯定するだけでもいい印象を与えるし、もっと相手の事を知りたいなと思えるのだと分かりました。

(東京／ピアノ／1年)

・たった数時間という短い中で、これだけ多くの人たちと親しくなれたことに非常に驚いています。コミュニケーションの取り方を今回の講座で修得したので、もっと積極的に、自発的に他者とのコミュニケーションをつなぎ、深めていきたいです。

(東京／ピアノ／1年)



※写真は昭和音楽大学の様子です。

平成 23 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

第 3 回実施報告書

講座の名称	第 3 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽によるワークショップ」
講 師	坪能 由紀子（日本女子大学 教授）
実施日時	2011 年 6 月 1 日（水）18:30-20:00
実施場所	東京音楽大学 A 館地下 100 教室
講座の概要	<p>3 大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第 3 回は、日本女子大学教授の坪能由紀子氏を招き、東京音楽大学から発信した。</p> <p>講座は「音楽によるワークショップ」と題し、現在、日本の学校教育、つまり幼稚園、小学校、中学校、高等学校では「音楽づくり」がどのように取り入れられているのか、事例紹介と実践を交えながら、音楽づくりのリーダーとして必要なものは何かということについて話された。</p> <p>授業は開始からアクティビティを中心に進められ、まず手拍子をまわすなどのウォームアップ・アクティビティ、次に実際に楽器（クラベス、マリンバ、ピアノ、トーンチャイム等）を使用したものへと移った。楽器の有無に関わらずどんなことができるのか、そしてそれらの活動の中でどんなことに気をつけなくてはいけないのか、ひとつひとつの活動に沿って説明が付け加えられた。事例紹介では坪能氏が行った幼稚園でのケース映像を見ることで、子どもたちがどのような反応を見せるのかを実際に確認し、個々の意図や気持ちをくみ取りながら工夫や自発性を引き出すことの重要性が説明された。</p> <p>質疑応答では「障害児への対応」や「子どもたちのまとめ方」、「興味のない子どもへの対応方法」など、より実践的な質問が多くあがり、坪能氏からは「なによりも子どもたちをよく見ること、その子が欲しているものは何なのかを大切にすること」が重要だとのコメントがあった。そしていろいろな方法を試しながら、子どもの表現を認め、生かし、「間違いのない音楽」を共有すること——それが今、実際の教育現場で求められていることだと強調された。</p>

《学生のことば》

・今回の講義で一番関心を持ったキーワードは、「間違いのない音楽」です。クラシックの世界では音の間違いは一音も許されないの、「間違いをする＝いけないこと」と頭の中で認識されています。けれど、そのせいで音楽を嫌いになったり、その人のもっている才能が埋もれてしまい引き出せなくなってしまうのだと思いました。私も、坪能先生のように「間違いのない音楽」を子どもたちと共有していけたらいいなと思います。

（東京／ピアノ／1 年）

・先生の教え方にとても柔軟性があり、私たちが多少違うことをしてもそれをまた発展させるような授業ですばらしいと感じました。私もこれから教えることがあったら、「しかる」のではなく相手の声を、音を聴き、感じられるようになっていけたらと思いました。

（東京／ピアノ／1 年）

・日常のもの、こと、何でも音楽にすることができるし、誰でも音楽はできること、とても身近にあることで楽しめることを知りました。私たち音楽をやっている者が少し手助けするだけ

で、すごく音楽を楽しんで体験してもらえ
こともわかりました。反対に私たちワークショッ
プを開く者が導き方を少し間違ふことはとても
怖いものだという事も知り、難しいという印
象も受けました。様々なことを柔軟に考えて
やっていかなければいけないと思いました。

(東京／ヴァイオリン／1年)

・「音楽をやっていく上で失敗を恐れないこと」。
私はいつも自分に自信がなく失敗ばかりを気に
していたので、今回の実習でとても自由に自分
を表現することの楽しさを学びました。

(昭和／声楽／1年)

・子どもの音を聴く、自由な発想の芽を摘んで
しまわないように気をつけないといけない、と
いうのが印象に残りました。即興で音楽を楽し
むのは誰でも入りやすい楽しみ方だと思いま
した。

(昭和／アートマネジメント／1年)

・楽器を演奏したことがない人や初めてのメン
バーでリハーサルなしでも、「循環性」「応答
性」「反復性」をもとに、個人個人のアイディ
アであれほど簡単に音楽を作ってしまうことに

感動しました。どちらかが演奏をしてどちらか
が聴くといった一方的ではない、新しい音楽の
コミュニケーションだと思いました。

(昭和／ミュージカル／1年)

・映像を見ることで、こんなにも子どもの発想
は豊かなのだと実感し、逆に私達は先入観から
思考が凝り固まっていたことに気づきました。

(神戸／声楽／2年)

・今まで即興演奏に難しいイメージがあったの
でどう対応するべきなのかと思っていました
が、即興演奏が少しの知識があるだけで簡単に
できることを知り、難しいイメージから親しみ
やすいイメージに変わりました。

(神戸／ホルン／2年)

・リズムを重ねるゲームで、少し変わったリズ
ムを叩きたいと思い、三連符を重ねた。授業の
場で目立つ事が苦手だった私が、他の人と違う
リズムを叩こうとしたことは、今考えると意外
なことだ。楽譜も間違いもないために、安心し
て自分の表現したい事をする事が出来たのだ
と思う。

(神戸／声楽／1年)



※写真は東京音楽大学の様子です。

3 大学合同夏期セミナー 2011

2011年度の「3大学合同夏期セミナー」は東京音楽大学を会場に、2011年8月31日（水）から9月2日（金）までの3日間の日程で開催された。受講生は、3大学の学生65名（内訳：東京音楽大学22名、神戸女学院大学音楽学部23名、昭和音楽大学20名）。

音楽によるコミュニケーションの新しい方法を実践的に学ぶため、本セミナーの講師として、ロンドンのギルドホール音楽演劇学校音楽学部およびバービカンセンターにおいて「クリエイティブ・ラーニング」プログラムを推進するショーン・グレゴリー（Sean Gregory）氏と、

助手のデッタ・ダンフォード（Detta Danford）氏、ナターシャ・ジエラジンスキ（Natasha Zielazinski）氏の3名を迎えた。

プログラムは、グレゴリー講師による基調講演を皮切りに、音楽づくりの実践、さらには最終日に小学生を交えた「クリエイティブ・ワークショップ」へと発展した。学生たちは、皆で協力して音楽づくりをする体験の中で「クリエイティビティ」「コラボレーション」「リーダーシップ」について学び、いきいきと行動し、また各々の考えを述べ合った。

【9月1日】

9:30-11:15 開講式・基調講演

「未来のアートセンター、アーティストのあり方～バービカン／ギルドホールの視点から～」

グレゴリー講師より、ギルドホール音楽演劇学校とバービカンセンターの連携プログラム「クリエイティブ・ラーニング」をめぐり、その意義や具体的な内容についてのプレゼンテーションが行われた。音楽・美術・演劇・ダンス・映画の各分野が接点をもち、あらゆる世代をターゲットとして、ワークショップからプロ・アーティストによる公演までを複合的に結び付ける「クリエイティブ・ラーニング」のコンセプトが紹介され、21世紀の音楽家に求められる役割について熱のこもった講演が展開された。

12:15-13:45 ワークショップ・セッション1

ワークショップへの導入。全員でひとつの大きな円を作る。グレゴリー講師の指示を見ながら、まずは、足を肩幅に開き、力を抜いて肩回しをしたり手をぶらぶらとさせて体をほぐす。続いて、手拍子や「シュッ」という声を次々に隣の人に回していく。講師によると、これはグループの意識を高め、グループのコーディネーションの練習を目的としたものとされる。

次に、足踏みや体のいろいろな部分を叩いたり、手拍子を入れ、リズム打ちをする。4拍の中に各自自分なりのリズムをのせ、拍とリズムを感じながら続ける。さらに、アフリカ・ガーナの唄を口ずさむと、参加者にいつの間にか一体感が生まれていった。

一連の動きは Warm up とされる。音楽家にとって体や呼吸、指先に至るまでウォーミング・アップが必要であるとともに、皆で円になって立ち、グループを意識することは、ワークショップという経験にアクセスするためにも重要であるとのことである。

ジエラジンスキ講師が、もっと個人として知り合うために、今度は名前を一人ずつ言っていくことを提案した。全員で一巡りした後、3つのグループに分かれて名前と一緒に動きや声もつけていく。各グループでは、さらに3つのグループに分かれて7～8名程度になり、ジェスチャーを組み合わせ、グループとしてまとまりのあるものを作っていた。

再び全員が集合し、小グループで作ったジェスチャーを発表した。中には盛り上がりやストーリー性を考えて構成しているグループもあり、初対面の学生同士、若干のぎこちなさがあるものの、皆で協力しようとしている姿勢が見られた。

14:00-15:30 ワークショップ・セッション2

参加者が持参した楽器（管楽器・弦楽器）や、会場で用意した楽器（打楽器・マリンバ等）を各自手にして、全員で輪になった。

まずは好きな音を出し続け、グレゴリー講師の合図で強弱を変化させる。そして、グレゴリー講師の Stab（一打）で瞬時に別の音に変える。合図に集中すると、全員が参加している意識も高まっていく。

次は、D 音で拍を刻みつつ、拍に合わせてひとりひとりが自分のリズムを作る。拍（パルス）を担当する人と、自分のリズムをのせる人に分け、担当を交替させてやってみる。さらに、自分のリズムを D、F #、G、A、D（オクターブ上）の音程を使って表現する。

以上の動作は、「大人数で、皆で一緒にするという感覚」を共有しようとしている、とグレゴリー講師の説明があった。

小グループに分かれ、適宜講師陣がファシリテートし、各自のリズム素材をどのように組み合わせることができるか、考えながら構成していった。打楽器・管楽器・弦楽器・ピアノ・マリンバ・シロフォン等様々な楽器の音が飛び交った。その後、各グループの音の構成を全員で聞いてみて、グレゴリー講師の指示により、一定のパターンをリピートする楽器と、グループで作ったリズムをのせていく楽器が割り振られ、全員がひとつになる音楽づくりを体験した。

【9月2日】

9:45-11:15 ワークショップ・セッション3

本日の活動では、小学生とのワークショップを翌日に控え、これをどのように運んでいくかを実際に学んでいく。また、ワークショップを通して、グレゴリー講師らのプロとしての活動を知るとともに、夏期セミナーの事前に講師から提示されていた課題（1. Why do you do what you do? / 2. What is the role of a musician/music teacher/arts administrator in society today? / 3. What does 'creativity', 'collaboration' and 'leadership' mean to you as an arts practitioner?）について、3日間で学生それぞれに自分の意見を考えることが求められた。

ダンフォード講師、ジェラジンスキ講師のリードにより1日目と同様の Warm up が行われ、全体の空気をほぐしていった。続いて、円を4等分し、中心にいる講師陣がそれぞれのリーダーとなってリズムや声の出し方を指示する。リーダーは隣のグループの出方を見て自分のグループを変化させていく、というアクティビティが行われた。

30分程度の Warm up の後、3つのグループ（1グループ22人程度）に分かれてのワークショップとなった。各グループはダンフォード講師担当、ジェラジンスキ講師担当、グレゴリー講師担当の3つの教室に楽器を持って移動した。

ーグレゴリー講師のグループー

グレゴリー講師のグループでは、子どもたちと一緒にワークショップをするためのマテリアルを作ることをねらいとしてアクティビティが進められた。

まずは楽器を持たずに、お互いを知るための Warm up が以下のように行われた。

- ①足を肩幅に開き、手拍子をしながら名前を言って隣に回していく。子どもとのワークショップの際には、自然でいられるよう、リラックスして笑顔でいることが必要とされる。
- ②手拍子とともに、今度はランダムに名前を言い合う。一人が名前を言った後は、皆でその名前を繰り返す。誰の名前を言っているかわかるように、身ぶりも大きく、相手を力強く見るようにする。
- ③繰り返しをせず、一人が名前を言うと、すぐに別の人が名前を言う。

このアクティビティは、グループのメンバーの名前を覚えて、相手を見ながらすばやく考えることによって、少しずつコミュニケーションの取り方を体験していくものとなっている。

続いて、手や足を使ってリズム打ちが始まり、グレゴリー講師が口ずさむアフリカ・ガーナの唄を、全員で後をついて模倣した。初めて耳にする言葉やメロディーだが、皆で一緒に音楽を共有していることを実感することができる。

次に、一人一人自由に歩き回り、グレゴリー講師が「ストップ!」と合図するとそこで静止する。

そして、同じ色の靴を履いている人同士グループになったり、誕生月が同じ人同士グループになるというゲームが行われた。

こうして、メンバーの動きや表情が自由になったところで、7人ずつの小グループに分かれ、グループごとに生活の中で毎日使うものをひとつ決めて、体を使ってそれを表現するアクティビティが行われた。各グループでは「なんとなく」アイデアを出し合っているうちに、次第にジェスチャーが形作られていき、電子レンジや洗濯機、掃除機が表現された。

セッションの最後は、床に円になって座り、子どもとワークショップをする際には以上のような Warm up を通して、互いに心配するのをやめてすばやく考えること、自分たちのアイデアを出すとともに子どもたちをリードしてあげることが大切であるとのアドバイスがあった。

そして、子どもとの音楽づくりの素材になるようなテーマを出してほしいとグレゴリー講師が学生に投げかけた。すると、学生からは、ジャングル、宇宙、海、自然、動物、遊園地、バリ島、日本など様々なテーマが出された。次の時間にはこれらのアイデアに基づいて、音楽づくりを行うこととなった。

12:15-13:45 ワークショップ・セッション4

担当講師のもと、各部屋に分かれてセッションが引き続き行われた。

ーグレゴリー講師のグループー

グレゴリー講師を囲んで円になり、先の時間に出されたアイデアを使ってどのように音楽づくりをすると良いか、意見を出し合った。一人の学生が日本の雰囲気表現して、そこから国を変えていくという考えを出すと、グレゴリー講師が国から国に旅行する感じにしてはどうかと提案した。そこで、日本、中国、バリ島、アフリカを巡る旅を表現することとなった。さらに、学生から機関車が走る音を表現する「シュッ、シュッ、ポッ、ポッ」「ピーッピッピッ」というかけ声とリズムのアイデアが出た。

次に、これらのアイデアを、ひとつひとつ積み上げていく。まずは、動き(ジェスチャー)から始めて、「シュッ、シュッ、ポッ、ポッ」「ピーッピッピッ」という声を次第にのせていく。すると、グレゴリー講師が即興的にピアノ伴奏を始めた。さらに、機関車の旅を描写する言葉である「機関車」「青」「トーマス」という歌詞を付けていった。

このように基本的な枠組みができた後、今度は各々楽器を持って集まった。「何か簡単なメロディーを作って」という指示で、学生たちは即興的にメロディーを鳴らし、グレゴリー講師が適宜アレンジを加えながら「国から国へと旅をしている時の音楽」を作った。

さらに、3つのグループに分かれ、日本、中国、バリ島の3つの国を表す音楽づくりに取り組んだ。グレゴリー講師は、各グループを見て回り、「まずは各国を表す音階を確認してから、メロディーを組み立てていくように」とアドバイスをした。ピアノ、ヴァイオリン、フルート、鍵盤ハーモニカ、マリンバ、シロフォン、サックス、ホルン、ジャンベ、ボンゴ、タンバリン等を使用し、各グループで学生が話し合いながらリズムやメロディーを作り上げていった。

最後に、「旅の音楽」をひとつにまとめていった。機関車のリズムやかけ声から始まり、「キカンシャ」「アオ」「トーマス」という歌詞が入る。そして、楽器による「国から国へと旅をしている時の音楽」を経て、日本を担当するグループの演奏に移った。それが終わると、間に「国から国へと旅をしている時の音楽」を挿み、バリ島を担当するグループの演奏となる。同様に、中国を担当するグループの演奏の後、最後はグレゴリー講師の合図により、アフリカの唄を歌い、「旅の音楽」を締めくくった。

グレゴリー講師のグループの音楽づくりと同様に、ダンフォード講師、ジェラジンスキ講師のグループでも、それぞれアイデアを出し合いテーマを決定し、それに基づく音楽づくりのワークショップが行われた。

14:00-15:30 ディスカッション

グレゴリー講師、ダンフォード講師、ジェラジンスキ講師の3つのグループが集合し、互いにどのようなアクティビティを行ったかをシェアした。

- a ジェラジンスキ講師のグループ：ボディパーカッションやドラム、管楽器を使用し、「夕焼けは赤い空」という歌詞を付けて、夕日をテーマとした音楽づくりを行った。
- b ダンフォード講師のグループ：声やドラム、ウッドブロックを使い、「台風がやってくる」という歌詞を付けて、台風もしくは嵐をテーマとした音楽づくりを行った。
- c グレゴリー講師のグループ：「旅の音楽」をテーマとし、国と音階を決めて、そこから発展させて音楽づくりを行った。

以上の各グループの音楽づくりを互いにシェアした後、グレゴリー講師は「初めて知り合ってこれだけすばやく協力できたのは驚くべきことです。この中で、すでに一人ひとりの考えを生かしながら導いていくリーダーが現れています。」と感想を述べた。そして、翌日の小学生とのワークショップでは、本日のアクティビティをもとに、「子どもたちに良い機会を与えられるよう、子どもたちを励まし、アイデアを引き出すこと」が大切であると説明があった。

ディスカッションが締めくくられた後も、翌日に向けてアクティビティの仕上りをより良くするため、時間を延長して各講師のグループごとにセッションの続きが行われた。「子どもがどうしても参加するのが嫌だと言ったらどうすれば良いのか」という学生からの質問に、講師が「子どもの心がほぐれて心配がない状態にしてあげることが大切」とアドバイスをするなど、学生が積極的に考えて取り組もうとする姿勢が高まり、アクティビティにいかにして子どもを巻き込んでいけるのか、皆で話し合った。

【9月3日】

9:40-12:10 小学生とのクリエイティブ・ワークショップ

夏期セミナー最終日は、会場である東京音楽大学に、豊島区目白小学校の4年生3クラス（75名）及び同小学校教諭、見学希望の父兄等を迎え、クリエイティブ・ワークショップが実践された。

子どもも学生も混じって、全員で大きな輪を作る。前日までのワークショップと同じように、講師のリードで手足を使った様々な動きやリズム、アフリカの唄を歌ううちに、皆がひとつの空間を共有している雰囲気が生まれてきた。体や気持ちいがほぐれたところで、子どもも含め、3つのグループに分かれてアクティビティが始まった。

グレゴリー講師のグループでは、お互いをもっとよく知り、グループとして協力できるように十分にウォーミング・アップをした。最初は「真面目すぎるので、笑顔で！」と講師から指示が出されるほどであったが、歩き回って合図があるとピタリと止まるゲームをすると盛り上がり、輪の中に入れない子どもを学生がフォローする様子も見られるようになった。

その後、「旅の音楽」に皆で取り組んだ。子どもたちもリコーダーや鍵盤ハーモニカ、すず、トランペット等の楽器を持参し、学生と一緒に音楽づくりに参加した。楽器ごとに意見を出し合いリズムやメロディーを考えていると、自然にリーダー的な役割を果たす学生も現れ、子どもと考えた音楽を、前日に考えた音楽に組み込んでいった。限られた時間を超えても、熱のこもった音楽づくりが繰り広げられた。

各講師のグループ・ワークショップが終わり、全員の前でアクティビティのパフォーマンスが行われた。グレゴリー講師は、「一緒に何かをやってきたことが大事であり、パフォーマンスをすること自体が目的ではなく、経験を分かち合い、お互いの発表を見て、聞いて、楽しむことです」と解説した。学生も子どもも、各グループのパフォーマンスを興味深く見守り、最後に大きな拍手で締めくくられた。

12:20-13:20 懇親会

小学生とのワークショップを終え、講師を囲み懇親会が開催された。学生からは講師の活動に関する具体的な質問が出されるなど、講師や他大学の学生同士、積極的に交流し、あちこちに輪ができていた。



※小学生とのクリエイティブ・ワークショップの様子

全員、円になって着席し、3日間のセミナーの総括として、テーマに基づくグループ・ディスカッションが行われた。

グレゴリー講師から示されたキーポイントは以下の3点である。

- ① 3日間の中で学んだことを1つだけ挙げるとすれば何か。
- ② 夏期セミナーの課題（事前に配布）で各々書いたことを思い出し、3日間で変わったかどうか、もしくは、思いがより強くなったか。
- ③ 講師陣に聞きたいこと。

3点を踏まえ、8人ずつのグループになり、20分程度の自由なディスカッションを行った。ディスカッションの中では、ワークショップに対する考え方が変わったことや、子どもや同じグループの人との関わりの中で発見したこと、音楽家の役割や今後の活動について考えたこと、等について学生たちが真剣に語り合った。その後、ディスカッションをして皆で出し合った意見の中から、グループごとに代表者が発表した。

上記③に関連し、学生からは以下のような質問が出された。

- ・音大生はワークショップのスキルを学んでも、活かせる場が少ない。先生方は、活動の場を得るために、どのようにしてチャンスをつかんでいるのか。
- ・なぜアウトリーチ活動をしているのか。先生は、指導する時どのようなことを考えておられるのか。
- ・先生にとっての「リーダーシップ」とはどういうものか。

学生からの発表を受けて、グレゴリー、ダンフォード、ジェラジンスキの各講師がそれぞれ意見を述べた。

ジェラジンスキ講師（以下Z）：チャンスは自分次第なので、アイデアを湧かせて試してみる。外に出てみる。わからなくてもやってみる。そうした強い気持ちが大事です。

ダンフォード講師（以下D）：私たちにとってリーダーシップとは、グループの中でリードし合う、あるいはアシスタントとしてサポートすることです。また、子どもを励ますこともリーダーシップです。

音楽的な空間、社会的な空間など、グループの中でエネルギーをどのように作り上げていくかということだと思います。

Z：指導する時何を考えているかということ、その場を一瞬で捉えて、今までのことを総動員して、感覚で作っています。即興性や柔軟性を持って捉えていくことが大事だと思います。

グレゴリー講師（以下G）：イギリスでは、教育と音楽芸術がお互いに属し合うということがカリキュラムの始まりでした。（教育の中で）「評価される」ということが課題になっていますが、音楽の時間だけでも「評価される」のではなく、一緒にやってみて、いろんな音楽を聴いてもらうということが大事ではないかと考えています。

これが正しいという考え方をせず、いろんな可能性を探っていくことが大切です。その際、芸術家として新しい考え方を取り入れた教育をする、あるいはコンサートの中に取り入れていくことができるのではないのでしょうか。

クラシック音楽において、どういうものが優れているのかと問われることがあります。様々な考え方があり、すべてが一緒という考え方もあります。また、いろいろな音楽があるのです。

D：懇親会の時に、子どもとどのような活動をしているのですかという質問がありましたが、最近では高齢者施設でも活動しています。高齢者が対象の場合、子どもとはまた違いますが、表現してもらうという根本は変わりません。

Z：デッタ（ダンフォード講師）と私は、バービカンセンターでの活動などで、違った芸術分野の人と協力してどのようにつながり合えるかということをやっています。積み重ねるうちに、すべての活動が融合していき、自分自身も変わっていきます。そして将来豊かなものになるのです。

G：一人ではなく一緒にやっていくことが大切です。時間をかけてじっくりと仕上げていってください。あなたたちこそが新しいリーダーです。

《学生のことば》

・グループリーダーとしてみんなをまとめたり、興味をもたせたり、逆に静めるにはどうしたらよいかを見て感じることができました。講師の先生をよく見ると、自分に比べると顔の動きが全然違って、表情の変化が豊かでした。「話さないで伝える」のにとっても大切なことだと感じました。

(東京／ピアノ／1年)

・シャイな子供に対してどんな対応をしますかという質問に、心を開くまで気にかけてというのが印象的だった。コミュニケーションを取りながら音楽を作ることにとっても興味がわいた。子どもの細かい所まで見ている先輩がいて、そういう風に考えることができるのかと思った。

(昭和／サクソフォーン／1年)

・リーダーというのは、今まではただ人を引っ張るだけだと思っていたが、周りを見て空間を作り出す補助をする役割があるのではと気付くことができた。自然とリーダーになっていく学生や、おもしろいアイデアを出す学生もいて、それぞれの個性を発見することができた。

(昭和／アートマネジメント／1年)

・音楽は美しいメロディーを作り奏でるだけでなく、本来は楽しむため、自分や自然を色々な楽器で表現するものでもあるということを改めて教えてもらいました。自分には無い相手の発想、相手には無い自分の考え、良い面も悪い面も見えてきて、自分を見直すことができました。やっている内容は同じなのに、子どもたちと一緒にセッションすることで全く新しいことをするような楽しみが増して新鮮でした。

(昭和／ミュージカル／1年)

・まず1人1人の良さがあって、みんなが同じではなくて良いということを学びました。自分の意見をしっかりと言うことがどれだけ重要か、伝えたいことを人の目を見てしっかり話すことが大事だと改めて感じました。もっと素直に音楽を作り上げ、楽譜ばかりではなく、もっと色々なことに目を向けていきたいです。

(東京／ピアノ／1年)

・元からある（作られた）音楽ではなく、一から音楽（背景なども）を作った瞬間に全員で一体となり大きな喜びを得た。リーダーになる人は、相手や周りの人の心をほぐし、リラックスさせ、柔軟にアイデアを拾っていく姿勢が必要だと分かった。音楽は個人でするものではなく、周りの人と共有するものである。

(神戸／声楽／2年)

・発想の転換、状況をみて素早く行動できる能力の大切さ、誰にでも公平に楽しめる実践のヒントをいただけたと思います。何か意見を求められた時に、一番に話したせる人がいると他の方からもどんどん意見が出てきて、一番に意見が言えるのはすばらしいなと思いました。また、積極的に取り組む人、周りに気を配って動ける人がいたりして、同じ場にいてもいろいろな役割があることがわかりました。

(神戸／ホルン／2年)

・最初にみんなの緊張をほぐしてから音楽を作るという方法はすばらしいと思いました。音楽を心から楽しみ、体全体で表現することが本当に楽しかったし、子どもたちを先導する体験を通して、リーダーシップとはどういうものかを理解することが出来てよかったです。声やリズムの表現だけでなく、表情、目力などでさらにコミュニケーション力が高まるのではないかと思います。ここで学んだことは、今後の教育実習や、幼稚園・老人ホームに演奏にいく際、是非応用してみたいです。

(神戸／声楽／3年)



※ワークショップ・セッションの様子

平成 23 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

第 4 回実施報告書

講座の名称	第 4 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽づくりの新しいパラダイム」
講 師	スーザン・ウェスト（オーストラリア国立大学 音楽学部教授） Dr. Susan West (Senior Lecturer in Music Education Convenor, Open School of Music, School of Music, ANU College of Art and Social Science)
同時通訳	渡辺 玲子（神戸女学院大学大学院文学研究科通訳コース 博士前期課程） 中村 昌弘（神戸女学院大学文学部英文学科 准教授）
実施日時	2011 年 10 月 5 日（水）18:30-20:00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 オルチン館
講座の概要	<p>「ミュージック・コミュニケーション講座」の第 4 回目は、連携の 3 校に加え、オーストラリア国立大学（ANU）とも 4 地点目のインターネット・ビデオ（IV）接続を行い、オーストラリアにいる講師から 3 大学の学生に講義を発信、同時に神戸女学院から、同校の同時通訳チームによる訳語を他の 2 校に並行して配信するという初めての形式で実施した。</p> <p>講師のスーザン・ウェスト氏は、フルート奏者として活躍した経験の持ち主だが、現在はアウトリーチ活動で成果を挙げており、音楽には人と人を結ぶ力があることに注目している。氏は、伝統的な技術重視の音楽教育を克服しがたい登山に例え（資料：ヴィルトゥオーゾの山）、その頂点に達する人数は僅かであることを図解で示した。しかし、テクニックを必要とせず、誰もが参加できて楽しむことのできる、ユニバーサル・デザインとも言うべき新しい手法があり、それには歌が効果的だと語った。</p> <p>その具体例として、福祉施設での活動の一端を DVD で紹介し、「大人にはしばしばく選択的無言症（歌うことを躊躇、拒否する）>が見られるが、子どもは自然に歌う。そんな子どもと一緒に歌うことで、大人も徐々に心を開き、楽しく歌うようになる。歌には社会的に人と人を繋ぐ＜かけ橋＞となる力がある」と主張した。また別の例では、音楽作りの持つ「治療的な（一緒に音楽を作ることで治療のような役割を果たす。音楽療法とは異なる）」側面も紹介。「それはパフォーマンスではなく、プレゼントだ」と述べた。</p> <p>学生からの「これまでと全く違う価値観に気づいて驚いた。しかし日本で受け入れられるか不安」という意見に、氏は「それはオーストラリアでも同じ。徐々に理解者が増え、一般に広がっていった。子どもたちは自然に歌を歌い、それが大人に波及する。教え広めていくのではない」と回答。最後に「音楽とはコミュニケーションのツールのひとつ。自分の心の内にあるものを表現することのできる根源的なものであることを覚えておいてほしい」と述べて、講座は締め括られた。</p>

《学生のこぼ》



・演奏家としてもコミュニケーション・リーダーとしても活動して行けたら良いなと思っていたので、ウェスト先生の言葉を聞いて、勇気づけられた。今はしたいことが多い。

(神戸／フルート／2年)

・普段の生活の中では技術を優先し、自分に否定的になる傾向が強いと思います。夏期セミナーやこの講義を通して、技術面がすべてではないことを知った現状でも、練習している間に否定的になる場面は少なくありません。それを変えていくことが私の課題です。

(神戸／ホルン／2年)

・音楽業界の外にいる人達も巻き込んで音楽を作り、その中でコミュニケーションを図っていくために、これから私たちのような学生が小さなきっかけを起こすことが重要になるのではないかなと思う。小さなものを少しずつ広げ、技術を必要としない、特別ではない音楽を一般的なものにしたい。社会的な問題においても音楽を取り入れやすくなるだろうし、音楽で互いに助け合うことが容易くなるだろう。

(神戸／声楽／2年)

・音楽は一部の人だけが行うものではなく、誰でも参加できる。みんなの音楽であるという事がわかりました。今、音楽大学で学んでいることが内向きだけになってはいけないと思いました。外に向けて音楽の素晴らしさを伝えていきたいです。

(昭和／ホルン／1年)

・音楽は特別に教育を受けた人のためだけのものではなく、皆で一緒にできるもの、作っているものである。技術的なことだけを気にするのではない。身体や心に障害のある人／ない人関係なく、参加した人誰にでも利益がある。「みんなと一緒に参加」という言葉が印象に残りました。

(昭和／アートマネジメント／1年)

・こういう講座を受けられる環境が今の日本や世界の技術にある訳だから、もっと授業に取り入れて、情報発信の場を増やしたら、意識改革につながると思います。参加者やこのような場がもっと多ければ、そこからも広まると思います。

(昭和／クラリネット／1年)

・日本でも外国でも音楽教育の問題点は似ていると感じた。日本人にはなおさらSM（選択的無言症）の傾向が強いと思った。小中学校の音楽教育に、今回のアウトリーチの考え方を持ち込めると良いと思った。

(東京／チェロ／1年)

・アウトリーチをどのように広めていくか、どのように人を巻き込んでいくのか？音楽＝難しいというイメージをどのように変えていくのか？これまで学んだアウトリーチの仕方ではなく、アウトリーチへの持っていく方を分かりやすく理解することができました。

(東京／ピアノ／1年)

・音楽をする、というよりも音楽を通して人と人をつなぐ、楽しんでもらうということを忘れないようにしたい。外向きの音楽をしていこうと思います。

(東京／フルート／2年)



※写真は神戸女学院大学の様子です。

平成 23 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」 第 5 回実施報告書

講座の名称	第 5 回ミュージック・コミュニケーション講座 「リーダーシップ・スキルアップ」
講 師	絹川 友梨（株式会社インプロ・ワークス 代表取締役） 廣瀬 日美子（アシスタント）、島崎 真弓（アシスタント）
実施日時	2011 年 10 月 19 日（水）18:30-20:00
実施場所	昭和音楽大学 南校舎 C511 階段教室
講座の概要	<p>3 大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第 5 回は、第 2 回 MC 講座「実践コミュニケーション入門」も担当した絹川友梨氏を講師に迎え、昭和音楽大学主導による遠隔ワークショップを実施した（他の 2 大学にアシスタントを配置）。</p> <p>今回の講座は「リーダーシップ」をテーマに、「身体」と「言葉」という 2 つのカテゴリーで実践的に理解するためのワークショップが行われた。「身体」のカテゴリーでは数人ずつのグループになり、一人ひとりが「リーダー体験」をするアクティビティや、恥ずかしがらずに自分を表現するための「パフォーマンスゲーム」を体験した。</p> <p>また、「言葉」のカテゴリーでは、話をしながら聴衆全員とアイコンタクトをとるアクティビティや、相手と一緒に物語を作っていく「シェアードストーリー」が行われ、自分の考えを皆に伝えたり、相手のアイデアを「イエスアンド」で受けとめることを身をもって学んだ。振り返りでは、各自発見した事や感じた事について盛んにディスカッションする姿が見られ、絹川講師からは「第 2 回の講座時に比べて、学生がはっきりと意見を言えるようになり、オープンになってきている」との講評があった。</p>

《学生のこぼれ》

・この講座では皆が積極的なので、自分もオープンになりやすい。次は、皆がつい消極的になってしまうような場で、自分からオープンになりたいと思った。皆をオープンにするリーダーになりたい。

（昭和／電子オルガン／1年）

・私は普段負けず嫌いなので“イエスアンド”が一番苦手なのかもしれないと感じました。相手の良いところをどんな小さなことでも良いので見つけて、それを相手に伝えるということを普段から心がけたいです。

（昭和／声楽／1年）

・自分が目が合っていると思っても、相手はそう思っていない。いかに周りを見ながらコミュ

ニケーションを取ることが大変かが分かった。

（昭和／アートマネジメント／1年）

・1人1人それぞれのリーダーシップがあるという言葉がとても印象に残った。自分らしいリーダーシップを見つけていきたいと思う。たくさん体を動かして、考えながら話して・・・最近使っていなかった自分の中の要素をフル回転させることができ、とても楽しかった。

（昭和／アートマネジメント／1年）

・リーダーとして人の前に立つということは、生徒側や受ける側の時の姿勢とは180度違います。人の目を見ることも、自分が思っている以上にしっかり見て、気持ちを伝えようとしない人には伝わらないと気付いたので、人前に立つ時は一つひとつのアクションを思っているよ

り大きく、相手に伝えたいという気持ちをしっかり持って臨みたいです。

(神戸／声楽／3年)

・自分はリーダーに向いていないと思っていましたが、この講座を受けて、私もリーダーをすることができるかもしれないと思うことができました。ありがとうございました。

(神戸／声楽／1年)

・今回は講座の回数も積み重なってきたこと、そして講座内のメンバーにも慣れたので、あまり恥ずかしがることなく自分をさらけ出すことができました。どの講座の時もいつも思うのですが、相手に受け入れてもらうということは、どんな場面でも安心するし、逆に自分も相手の意見を受け入れやすくなると思います。

(神戸／ピアノ／2年)

・前回の講義でもおっしゃっていましたが、やはり「イエスアンド」という言葉が印象に残り

ました。批判する姿勢ではなく、肯定することの大切さが、前回の時よりも何か月かの経験を積んだことで一層分かりました。他人に対してもそうですが、自分が音楽をする時も、イエスアンドの姿勢でいたいと思いました。

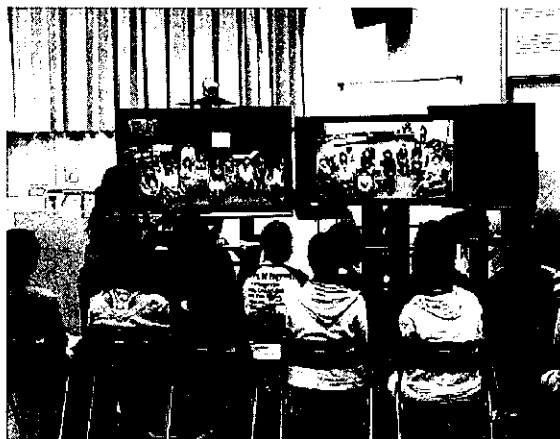
(神戸／ホルン／2年)

・「全員と目を合わせながら話をする」、「全員の視線を堂々と浴びることを怖がらずにする」というリーダーとしても音楽家としても必要なことを、たくさん教わりました。

(東京／フルート／2年)

・あまり前に出るとは得意ではないので、授業でもっと経験を積みたいと思いました。より良いコミュニケーションのためには恥ずかしがってはいけないと思うし、もっと自分から相手に関わりたいという意思表示ができればいいと思います。

(東京／ピアノ／1年)



※写真は昭和音楽大学の様子です。

平成 23 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」 第 6 回実施報告書

講座の名称	第 6 回ミュージック・コミュニケーション講座 「アーティストの公共的役割 ～これからの私たちにできること～」
講 師	仲道 郁代（ピアニスト）
実施日時	2011 年 11 月 30 日（水）18:30-20:00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 オルチン館
講座の概要	<p>3 大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第 6 回（今年度最終回）は、ピアニストの仲道郁代氏を講師に招いて神戸女学院大学で実施し、他の 2 校に IV 会議システムで発信した。</p> <p>講座は、仲道氏が今年 11 月に埼玉県所沢市の 4 つの小学校と 1 つの中学校の計 5 校で行ったアウトリーチ活動の具体例を紹介しながら、そこでの成果や問題点を率直に語る形で進められた。</p> <p>アウトリーチを行うには、対象となる子どもの年齢、人数、学校の雰囲気、会場のスペースと音響、ピアノの状況など、アウトリーチ先ごとに異なる環境に相応しい内容とやり方を考える必要がある。また子どもたちに対しては、音楽をただ受け取らせるのではなく、そこから想像させ、絵を書かせたり言葉で表したりといった音楽外の表現での可能性を獲得し、相互にコミュニケーションをとっていくことが大切だと指摘した。その上で、「アウトリーチ活動を通じて、（参加者は）音楽の素晴らしい世界により近づくことができる。そのための手法を今後開発して行く必要がある」との将来展望を示した。</p> <p>後半では、学生と講師とのディスカッションも行われたが、3 大学合同夏期セミナーでの経験を踏まえて話が展開したため、各大学の学生から意見が出されて活発な議論となった。</p> <p>最後に、「アウトリーチ活動は、様々な世代の様々な人々を繋ぐ大きな一歩になる。大学にいる間に失敗も含め様々な経験を積み、色々考え、そして希望を持って前に進んでほしい」と講師から学生へ励ましの言葉が送られて、講座は締め括られた。</p>

《学生のことば》

・仲道先生が言って下さった「合い言葉は、愛。それを音楽と共に…」という言葉が心に残っています。自分自身が音楽を楽しんで、愛して、聞いてくださる方にも愛を持っていったら、きっとその気持ちは相手に伝わるのではないかと思います。

（神戸／声楽／3年）

・音楽のアウトリーチをどんどん行っていくことによって、たくさんの人に音楽の楽しさを伝えることができると思うし、きっと世界は今よ

りも明るくなると思います。そして震災があった今だからこそ、このような活動はたくさんしていきべきだと思います。

（神戸／ピアノ／1年）

・（1年間講座を受けて）人の目を見て話すことや、練習に対する姿勢、発言する時の前向きな気持ちなど、普段から意識しておかなければすぐに忘れてしまうことが、講座と、講座の間の時間を体験してわかりました。また、仲道先生も仰っていましたが、今の内に失敗することに抵抗をなくし、将来失敗を恐れず自ら行動でき

るようになりたいです。

(神戸／ホルン／2年)

・相手の反応によって自分を変えていくこと。自分がピンチになった際、臨機応変にできなければならないと思う。

(昭和／サクソフォン／1年)

・自分がアウトリーチに実際に関わる時、相手の年齢や性別のことを考え、計画を立てていくことも重要であると感じました。中学生は恥ずかしがったりしてしまい、扱いにくい時期だと思いますが、全員が音楽を通じてコミュニケーションをとっていただけたら良いと思います。

(昭和／アートマネジメント／1年)

・学校側との打ち合わせや主旨の伝達など、本当に難しく、課題であると感じた。また、多人数を相手に1人でやることの大変さ、難しさをとて感じた。しかし、仲道先生の活動はとても素晴らしいと思う。

(昭和／クラリネット／1年)

・実践例がたくさんきけてよかった。場所や状況によって進行も左右されてしまうので、それでもうまくやっていくのは大変なことだと思った。今まで、うまくいった例をたくさん聞いて

いたので、うまくいかなかった例をたくさん聞いたのでよかった。先生の勉強する姿勢、話し方がすごくコミュニケーション能力においても素晴らしいなと思った。

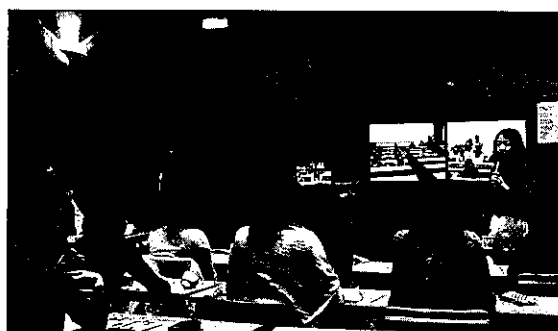
(東京／フルート／2年)

・先生が行ったアウトリーチ1つ1つを詳しく教えていただき、感想や考察を聞いていると、私が体験した（子どもを対象とした）公演を通じて感じたことと同じことを感じられたり、なるほどなと思ったり、とても強く共感することができました。その後のディスカッションを経て、1つ1つの公演やアウトリーチの意義が見えてきて、これを理解した上でもう一度作ってみると180度違ったものを作り出してしまうように感じました。

(東京／ピアノ／4年)

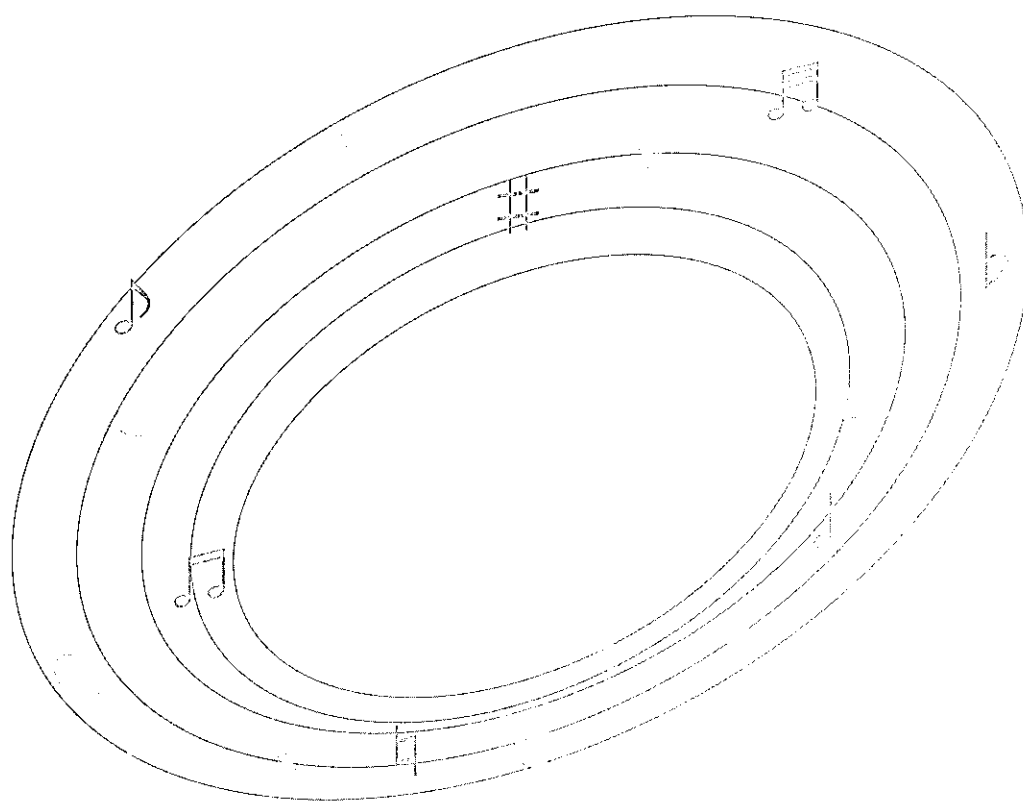
・公演を見て、講義を聞き、自分も子どもたちと一緒に音楽を共有してみたいと強く思いました。まだアウトリーチをしたことは無いですが、地域の小学校などでいつか絶対やりたいです。その為には知識や、私に欠けているリーダーシップ力を身につける必要があるのもっと多くのことを音楽以外からも学びとっていきたいです。

(東京／ピアノ／1年)



※写真は神戸女学院大学の様子です。

Ⅲ. 公共亦一ル共同事業実施報告



3大学連携の「実践」報告：

学生たちが大きな成長を見せた公共ホールとの共同プロジェクト

今年度の3大学連携プロジェクトの柱の一つである「実践」として、各大学はそれぞれ地方公共ホールと提携して、学生のアイデアによる音楽プログラムを舞台で実現した。昭和音楽大学は山梨県の富士河口湖町円形ホール（7月）と新潟県魚沼市の小出郷文化会館（9月）、東京音楽大学は和歌山県下の3つのホール（9月）と千葉県下の5つのホール（8月、10月～11月）、神戸女学院大学音楽学部は福岡県八女市の八女市民文化会館（12月）と組んで、それぞれのステージを実現することができた。

この「公共ホールとの共同プロジェクト」の目的は、学生に具体的な音楽プログラムを立案・実現するためのプロセスを体験させることによって、そのために必要な視点やスキルを獲得させることである。それも慣れ親しんだ大学のホールにおいてではなく、文化的背景や住民の年齢構成等が異なる地方公共ホールにおいて実践することによって、それぞれの背景や嗜好を読み込みながら制作を進めることが必要となり、よりハードルの高いものとなる。音楽プログラムは一方的に与えることで成立するものではなく、聴衆の存在を強く意識し、想定される聴衆のニーズを読み込むことによって初めて有意義なものになることを、実践的に学生たちに学ばせるのが主眼であった。

この計画の準備は、2010年8月5日に東京芸術劇場で行われた「財団法人地域創造フェスティバル2010」のシンポジウム「地域と大学の連携プログラム（音楽分野）」においてスタートした。ここで3大学連携事業の取組みと次年度のプロジェクト概要について説明し、パートナーを組んでくれる地方公共ホールを募ったところ、シンポジウム終了直後に幾人もの公共ホール関係者が話し掛けてきてくれた。そこでこの出会いがきっかけとなって、東京音楽大学は和歌山県・千葉県下の公共ホールと、また神戸女学院大学音楽学部は福岡県八女市のホールとの提携を実現することができた。昭和音楽大学がアートマネジメント専攻を擁して全国の地方ホールに卒業生のネットワークを有しているのに対して、そのような後ろ盾を持たない東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部がパートナー

を得ることができたのは、このお蔭であった。

演奏会の実現に至るまでの進め方は、各大学の歴史やシステムの違いによってそれぞれ異なるものであった。東京音楽大学は従来のアクト・プロジェクトの実績を踏まえて、学生が複数の企画を提案し、実施ホールが確定した段階以降は、学内の演奏委員会とも連携を保ちながら教職員による指導を重ねて行った。最終的に、小さな子供たちにクラシック音楽を楽しみながら聴いてもらうことを目的とする未就学児入場可能な演奏会として、「となりに、天才モーツァルト」と「どうぶつたちのおんがくかい」との2本の企画が、和歌山県下と千葉県下の計8館の公共ホールの舞台で実現した。

昭和音楽大学は、大学演奏室とアートマネジメント専攻の教職員の指導の下、「富士山河口湖音楽祭2011」の一環として、サクソ四重奏と木管五重奏を中心とするミニ・コンサート、アフタヌーン・コンサートと室内楽コンサートを、また新潟県魚沼市においては、金管五重奏による小学校2校と学童クラブ1件への訪問コンサートを実現した。

神戸女学院大学音楽学部は、2011年夏にリニューアル・オープンする八女市文化会館に市民団体からの寄贈によってベーゼンドルファーとスタインウェイの2大名器のピアノが並ぶというホール側からの情報提供に応じて、これをテーマとするコンサートを企画することとした。2011年7月3日、オープン間もないホールを教職員2名が訪問し、ホール職員ならびに市民団体代表と話し合いの場をもって方針や細部の確認を行った。学生たちは春から準備を始め、学内勉強会や学外勉強会を重ねてピアノの歴史や構造に対する理解を深めた。予算の関係で準備に関わった全ての学生が現地入りできた訳ではないが、各班に分かれて分担・協力して準備を進めた学生たちは、それぞれ苦勞しただけ達成感も大きかったようである。

演奏プログラム等、各大学のプロジェクトの詳細については、後継ページに掲載の各大学による報告書を参照されたい。

各大学の公演およびその準備は、それぞれの大学が単独で行ったが、都合3回、3大学によ

る情報共有の機会を持った。まず、7月6日に行われた合同夏期セミナーのガイダンス時に、インターネット・ビデオ会議システムで結ばれた3大学の学生が、それぞれ自分たちのプロジェクトの進捗状況を報告し合った。中でも、直前に富士山河口湖町でのコンサートを終えたばかりの昭和音楽大学チームが臨場感溢れる報告を行ったことで、他大学の学生たちも大きな刺激を受け、準備に拍車がかかった。

次に、9月1日、3大学合同夏期セミナーの第2日に「公共ホール公演の中間報告会」を設定して、3大学の学生が各々のプロジェクトの進捗状況を報告すると共に、問題点や解決策についての意見交換を行った。画面を通してではなく、生身の対面で行う報告やディスカッションは学生たちにとって新鮮で、インパクトが大きい様子が見て取れた。

さらに、すべての公演が終了した後、12月14日にインターネット・ビデオ会議システムで3大学を繋いで、各々の成果報告を学生が行い、公共ホール・プロジェクトによる学びを3大学で共有する時間を持った。苦勞したことや学んだことなどが率直に語られて、学生にとっては学びの共有とよい振り返りの時間となった。

この公共ホール・プロジェクトの一連の歩みの中で、学生たちは様々な体験をして着実に力をつけていった。中には思いがけない体験もあった。例えば、昭和音楽大学の学生の発表の中で、河口湖駅でのミニ・コンサートを行ったところ、同駅の駅長から「富士山駅でも演奏してくれるとよい」との提言があり、さらに「せっかくなら富士山駅まで移動する電車の中でも演奏して下さい」という話になった顛末が語られた。急な話で、しかも電車の中で演奏する時には譜面台が使えないのでどうしよう、困ったと思ったが、急遽、わずかな時間で暗譜して、車中では譜面なしでの演奏を行うことができたとの報告であった。このように、時にはピンチに立たされた学生もあったが、それを意欲と努力で乗り切ることによって、確かな自負と自信を身につけていったことが感じられた。

自然災害による影響もあった。東京音楽大学が公演を予定していた和歌山県日高川交流センターは豪雨による河川の氾濫で甚大な被害を受けたため、公演中止に追い込まれた。出演学生たちが宿泊する予定だった宿が流されてしまったと聞いた時には寒気がした。

神戸女学院大学チームは、12月4日の公演終了後、ピアノを寄贈した市民団体との茶話会をホール内で持ち、様々な質問や励ましを得たことを含めて報告した。学生たちが苦勞して作ったピアノの構造や歴史についてのポスターが好評で、ホールの職員や市内の中学校の音楽の先生をしている方から貸してほしいとの申し出があったことが、誇らしげに語られた。

地方に出て行くに当たっては大変なこともあったが、学生たちが自分たちの企画によるプロジェクトを実現していく中で大きな成長を見せたのは何よりの成果であった。とりわけ一つのプログラムを複数のホールで実施した東京音楽大学の場合、学生たちが一回毎に工夫を加えて絶えず向上していった様子が如実に伝わってきた。このような成果とノウハウを今後の各大学の活動に活かしていくことで、さらに有意義な学びの場を提供していくことが、各大学にとって次なる課題であろう。

最後に、本プロジェクトの趣旨を理解して協力下さった各公共ホールの関係者の皆様に厚く御礼を申上げる。

(津上 智実)

昭和音楽大学（山梨県富士山河口湖町）

公演名称	<p>①昭和音楽大学提携プロデュース 「サックス四重奏によるミニコンサート at 河口湖駅・富士山駅」</p> <p>②昭和音楽大学提携プロデュース 「木管アンサンブルによるアフタヌーンコンサート at 河口湖美術館」</p> <p>③河口湖円形ホール室内楽シリーズ特別企画 昭和音楽大学提携プロデュース 「木管五重奏、ピアノ、サックス四重奏によるアンサンブルの魅力」</p>
日時・期間	<p>① 2011 年 7 月 2 日（土）11:00-11:45（河口湖駅）／ 14:00-14:45（富士山駅）</p> <p>② 2011 年 7 月 2 日（土）14:00-14:45</p> <p>③ 2011 年 7 月 3 日（日）16:00-18:00</p>
場 所	<p>①富士急行 河口湖駅（山梨県南都留郡富士河口湖町船津 3641） 富士山駅（山梨県富士吉田市上吉田 2-5-1）</p> <p>②河口湖美術館（山梨県南都留郡富士河口湖町河口 3170）</p> <p>③河口湖円形ホール（山梨県南都留郡富士河口湖町河口 3030）</p>
参加学生	<p>演奏：①ハバネロサックス（神保佳祐、細川慎二、牧野遼介、奥野祐樹） ②リリエ木管アンサンブル（Fl. 森田久美子、Ob. 上遠野瑞季、Cl. 飯塚健太 Fg. 鈴木優人、Hn. 古越恵美、Pf. 宮野佑実子） ③ハバネロサックス（同上）、リリエ木管アンサンブル（同上）</p> <p>企画・制作：（①②③いずれも）石田美弓、加藤未沙貴、中條辰啓</p>
主 催	富士山河口湖音楽祭 2011 実行委員会
共 催	昭和音楽大学
公演の概要	いずれも、昭和音楽大学と河口湖円形ホールとの共同事業として企画され、③の「木管五重奏、ピアノ、サックス四重奏によるアンサンブルの魅力」は富士山河口湖音楽祭 2011 プレイバントの一つとして実施された。
来場者数	①河口湖駅 約 50 名／富士山駅 約 100 名 ②約 90 名 ③ 45 名（座席数 50 席中）
報告・成果	<p>河口湖駅、富士山駅での演奏は、アニメ主題曲や童謡、往年のヒット曲など親しみやすい選曲のプログラムにしたことが功を奏し、アンコールでは自然と手拍子が起こるなど、子供から大人までが楽しんでいる様子がみてとれた。</p> <p>河口湖美術館での公演も近隣の方がたくさん来場され、用意していた 90 席がほぼ満席となった。曲目は美術館の雰囲気に合わせて、ドビュッシーのピアノ小品やベートーヴェンのピアノ三重奏曲など落ち着いた曲想のものを選んだが、1、2 曲ポピュラーなものを取り入れれば、さらに聴衆の反応も良くなったであろうと思われる。</p> <p>円形ホールでの演奏会は、木管アンサンブルとサックス四重奏それぞれの個性が活きる選曲を行ったため、来場客のアンケートも「木管六重奏やサクソフォン四重奏など聴く機会の少ない編成の演奏を楽しむことが出来た」という感想が多かった。</p> <p>公演実施に係る業務は、ホール担当者や美術館職員、音楽祭のボランティア等の協力のもと、アートマネジメントコースの学生が中心となって行われた。正課の合間を縫う過密なスケジュールではあったが、学生たちのスキルは確実に向上したのではないだろうか。円形ホールでの公演には、前日の駅や美術館での演奏会をご覧下さった方の来場もあり、企画相互の連関においても成果があった。</p>

夏休みの音楽祭のイベント 河口湖・形ホール室内楽シリーズ 昭和音楽大学提携プロジェクト

木管五重奏、ピアノ、サクソフォーン四重奏による

アンサンブルの魅力

2011年

7月3日(日)

開場 15:30
開演 16:00

会場 河口湖形ホール

出演 昭和音楽大学 リリエ木管アンサンブル
ハバネロサクソ

曲目 プーランク：六重奏曲
イッパノバックス：
音楽劇「天国と地獄」より 他

入場料 一般1,500円(学生会員1,300円)
高校生以下600円(学生会員500円)
中学生以下入場不可

昭和音楽大学プロデュース企画で富士山河口湖音楽祭を先取り！
湖のほとりに響き渡る、若くプレイヤ、たのびの音楽セッションのハイ・パフォーマンス。
木管アンサンブルとサクソフォーン四重奏、異なるふたつの個性が織り成すアンサンブルに注目してください。

お問合わせ 申し込み
富士山河口湖音楽祭2011実行委員会事務局
(河口湖ステラシアター内・火曜休館)
TEL 0555-72-5588
<http://www.stellartheater.jp/ongakusai/>

チケット アクセス

主催 富士山河口湖音楽祭2011実行委員会 共催 昭和音楽大学

出演者プロフィール

ハバネロサクソ

HABANERO SAX
2009年に昭和音楽大学に入塾した男子4名で結成し、大学周辺地域でのイベントや、都立、私立など各地で演奏活動を行っている。今年2月にはNHK放送局に「主眼コンサート」に出演、5月には神奈川県にてリサイタルを開催し、好評を博す。同級生ならではの息の合ったアンサンブルはもちろん、クラシック曲のアレンジについても高く評価されている。

リリエ木管アンサンブル

Woodwind Ensemble Lille
昭和音楽大学の音楽科に在籍する6名の学生によって結成。古典曲から現代曲まで幅広いレパートリーを持ち、五重奏の他にもデュオやトリオなど様々な編成の楽曲を演奏することが出来る。ピアノを加えた六重奏としては、木管楽器での演奏がデビューとなる。

昭和音楽大学について

昭和音楽大学は、神奈川県川崎市に位置し、音楽や音楽、作曲をはじめ、アートマネジメントや音楽療法など多岐にわたる学科・コースを有する総合音楽芸術大学。学内の本格的なオペラ劇場やコンサートホールを有する。また、音楽科の学生は、世界的に活躍する音楽家を輩出している。また、音楽による地域連携活動「アート・イン・コミュニティ」プログラムにおける演奏や指導などの芸術文化活動を通して、周辺地域のアートシーンに欠かせない存在となっている。(昭和音楽大学HP: <http://www.tokai-shoina.ac.jp/>)

プロムナードコンサート

河口湖駅 2011年7月2日(土) 開演 11:00 (河口湖駅)
富士山駅 14:00 (富士山駅)

出演 昭和音楽大学 ハバネロサクソ
曲目 カーペンターズ：音響の魔法
リー・ハーライン：星に願いを 他

無料

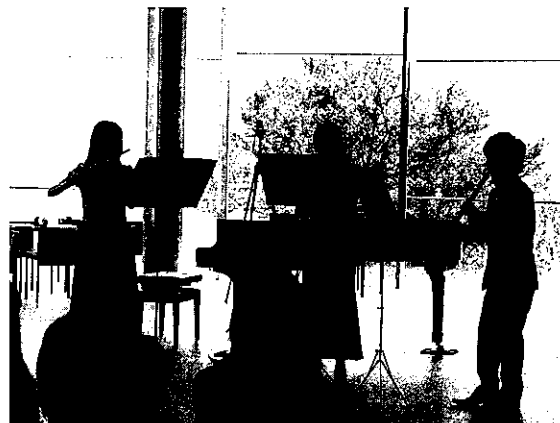
河口湖美術館
2011年7月2日(土)
開演 14:00

出演 昭和音楽大学 リリエ木管アンサンブル
曲目 ベートーヴェン：ピアノ/三重奏曲
ドビュッシー：12の練習曲より第11番 他
・美術館の入館料がコンサートの入場料です。

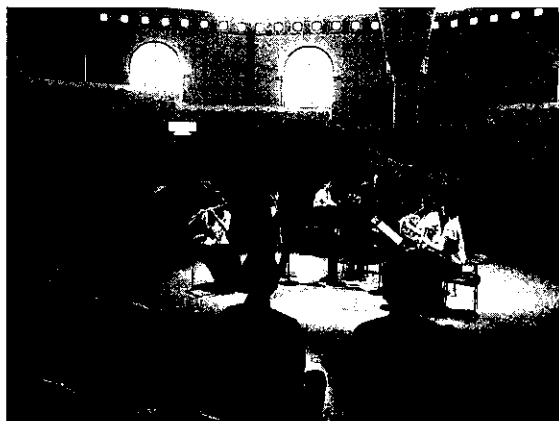
学生が作成した公演のチラシ



富士山駅での様子



河口湖美術館での様子



リリエ木管アンサンブルの演奏



ハバネロサクソの演奏

昭和音楽大学（新潟県魚沼市）

公演名称	<p>①昭和音楽大学×魚沼市小出郷文化会館 「ショウワ・プラス・クインテット 訪問コンサート」</p> <p>②昭和音楽大学×魚沼市小出郷文化会館 「楽器を体験しよう！ ショウワ・プラス・クインテット コンサート IN 魚沼市」</p>
日時・期間	<p>① 2011 年 9 月 9 日（金）10:40-11:25（井口小学校）／ 13:55-14:40（堀之内小学校）</p> <p>② 2011 年 9 月 10 日（土）9:30-10:30</p>
場 所	<p>①魚沼市立井口小学校 体育館（新潟県魚沼市井口新田 192） 魚沼市立堀之内小学校 体育館（新潟県魚沼市堀之内 430-3）</p> <p>②魚沼市小出つくしクラブ（新潟県魚沼市佐梨 777-4）</p>
参加学生	<p>演奏：ショウワ・プラス・クインテット（Tp. 與座有璃、Tp. 才川恵、Tb. 村上美希、Hr. 東妙成巳、Tu. 阪井賢哉）</p> <p>企画・制作：永田美幸、中村百合絵、中條辰啓</p>
主 催	魚沼市小出郷文化会館、昭和音楽大学
公演の概要	<p>魚沼市小出郷文化会館との共同事業として、魚沼市内の小学校、及び学童でのアウトリーチ活動を計画。演奏を行ったショウワ・プラス・クインテット（金管五重奏）は、本学器楽学科に在籍する学生 5 名で結成された。</p> <p>小学校では、4、5 年生を対象にした 45 分のプログラムを披露。小学生でも楽しめるよう、シャイト「戦いの組曲」やアンダーソン「トランペット吹きの子守歌」など幅広い選曲を行い、また楽器紹介を兼ねたアクティビティなども盛り込んだ。</p> <p>学童でのプログラムは、前日の小学校の流れに、金管楽器のマウスピース体験などのアクティビティを加えた 1 時間の構成。低学年の児童でも楽しめるよう、クラシック曲に加えて「となりのトトロ」など親しみやすい曲も演奏した。</p>
来場者数	<p>①井口小学校 約 140 名（4～5 年生）／堀之内小学校 約 80 名（5 年生）</p> <p>②約 25 名（幼児から小学校 6 年生までの児童、他）</p>
報告・成果	<p>今回の企画に際し、本番の 2 ヶ月前に担当教職員 2 名、及び企画・制作の学生 3 名で魚沼市小出郷文化会館に赴き、同館館長、担当者とミーティングを実施。さらに、企画・制作の学生は、アートマネジメントコースの学外実習として、8 月の末に同館が実施するアートマネジメント研修に参加していたため、その期間中（8/25）に小学校と学童を訪問し、担当教諭らと直接打ち合わせを行うことが出来た。事前に綿密なミーティングを実施できたことも、今回の成果の一つである。</p> <p>井口小学校の演奏では、マイクを持ちながらのトークや楽器紹介のアクティビティなどに多少手間取っている様子だったが、堀之内小学校ではいずれも改善され、小学生の素直な反応を取り入れながら良い演奏を行っていた。</p> <p>学童では、前日の小学校での成果を活かし、児童たちとのやりとりやアクティビティを取り入れた充実したプログラミングとなった。学生たちのコミュニケーション力の進歩は目ざましく、とりわけ司会を務めたトロンボーンの学生のこの 2 日間での成長ぶりには目をみはるものがあつた。保育園併設の学童だったため、乳幼児や未就学児も何名か聞きに来ていたが、いずれの児童も演奏時は静かに、アクティビティでは元気に楽しんでいる姿が印象的だった。</p> <p>企画・制作の学生たちは、限られた時間で打ち合わせを行う際の段取りや、急場での意思決定などに若干の課題が見られたが、主催者、演奏者、小学校教諭など立場の異なる人たちの間に入って、積極的にコミュニケーションの仲介役となっていた。また、配布物作成のスキルについては期間を通して相当な成長が見られた。</p>

楽器を体験しよう！

ショウワ・ブラス・クインテット
コンサート IN 魚沼市

みんなでいっしょに音楽を聴いて、
体験して楽器を楽しく知ろう！

2011年9月10日(土)

場所 魚沼市佐製
佐製保育園 2 階 小出つくレクラブ

開演 9:30 (10:30 終演予定)

出演 Showa Brass Quintet

お問い合わせ先 025-792-8811 (魚沼市小出郷文化会館)

主催 魚沼市小出郷文化会館、昭和音楽大学

マウスピース体験もできるよ！

★ Showa Brass Quintet ★
ショウワ・ブラス・クインテット

昭和音楽大学の音楽学科に在籍する5名の学生によって結成。
クラシックからポピュラーまで多岐にわたるパートリートを持ち、
「アーチー・イン・コミュニティ」プログラムにおいて、地域の
小中学校で演奏活動を行っています。

★ 昭和音楽大学 ★

昭和音楽大学は、音楽や音楽、作曲を学ぶ、アート・マネジメントや音楽療法など多彩な専攻コースを設置した総合音楽
大学です。学校の本部は音楽部やコンサートホ
ールを擁した「東横の森」を多く持ち、世界中に多くの自
然を演出しています。また、音楽に学ぶ音楽家「アーチー
・イン・コミュニティ」プログラムにおける音楽や音楽などの
芸術文化と音楽を深めて、大学周辺のアートシーンに
欠かせない存在となっています。

★ プログラム (予定) ★

- ・トランペット吹きの子守歌
(ルロイ・アンダーソン作曲)
- ・組曲「アメリカーナ」
(エンリケ・グレスボ作曲)
- ・ディズニーメドレー
- ・楽器体験コーナー

ほか

学生が作成した学童アウトリーチのチラシ



魚沼市立井口小学校での様子



魚沼市立堀之内小学校での様子



小出つくレクラブでの様子



楽器紹介コーナーの様子

東京音楽大学（千葉県流山市、和歌山県）

公演名称	「となりに、天才モーツァルト。」（計4公演）
日時・期間・場所	<p>① 2011年8月20日（土）14:00 開演 千葉県流山市生涯学習センター 多目的ホール</p> <p>② 2011年9月22日（木）18:30 開演 和歌山県和歌山市民会館 小ホール</p> <p>③ 2011年9月23日（金）19:30 開演 和歌山県有田川町きびドーム</p> <p>④ 2011年9月24日（土）14:00 開演 和歌山県上富田文化会館 文化ホール （台風被害により中止：2011年9月25日（日）14:00 開演 和歌山県日高川交流センター）</p>
参加学生	<p>演奏：五十嵐優(司会)、鈴木啓太(Pf)、推屋瞳(Sop)、砂田愛梨(Sop)、廣木孝多(Ten)、土屋繁孝(Bar)、大杉那々子(VI)、西浦詩織(VI)、大辻ひろの(Va)、石貝梨華(Vc)、柿沼隼(Cb)、古湊優(CI)</p> <p>企画・制作：金田萌子、山本愛、坂本夏樹、櫻井れいな、山中梨菜、石崎育美</p>
主催／共催	下記参照／東京音楽大学
公演の概要	<p>2010年末に千葉県 県民交流・文化課および和歌山県 和歌山県企画部企画政策局文化国際課より県内公共ホールとの連携コンサートの提案があり、東京音楽大学から企画案を3案提示した。</p> <p>〔千葉県〕</p> <p>2011年3月に教職員が現地視察を行い、担当者から本公演の趣旨、および意見交換を行った。それを基に既存企画に修正を加え制作を進めた。7月23日に学生と共に現地での打ち合わせを実施し、公演当日の詳細について確認をした。</p> <p>〔和歌山県〕</p> <p>2011年2月7日に、本学の担当教職員3名で和歌山県にて実施予定の4会場に赴き、会場施設等の視察を行った。翌日8日には和歌山県庁において和歌山県企画部企画政策局及び各ホールの担当者と打ち合わせを行った。また7月28日にも本学の担当教職員2名で現地に赴き再度打合せを行った。</p> <p>公演は未就学児入場可能な演奏会として企画。小さな子供たちにクラシック音楽を楽しみながら聴いてもらうために、モーツァルトに扮したMCが聴衆と会話をし、モーツァルトの生い立ちやオペラのあらすじを説明しながら進行していく内容。オペラ「魔笛」の声楽メンバーを中心に、演奏者も客席とのコミュニケーションをとれるように配慮した。</p>

①公演名称	子どもから大人まで楽しめるモーツァルト名曲コンサート 「となりに、天才モーツァルト。」
日時・期間	2011年8月10日（土）14:00-15:45
場所／主催	流山市生涯学習センター／流山市生涯学習センター指定管理者アクティオ株式会社
来場者数	約200名

報告・成果	<p>本学の公共ホール共同事業として初の公演であり、出演者及び制作担当の学生にとっても初めての本番ということで若干の緊張も見受けられた。当日は広報の成果もあってか非常に多くの聴衆の皆様にお越し頂くことができた。終演後のロビーにて出演者によるお客様との触れ合いの時間を設け、公演の感想や励ましや言葉等を直にお聴きすることができた。公演内容については、演奏の質やスタッフの動き等にも改善の余地が見られ、今後の公演に向けての課題を見つけることのできる公演でもあった。またプログラムの後半で、演奏時間の長い曲が多かったため会場内での未就学児の対応に追われる場面が多く、静かに聞いていることが難しくロビーで休まれる親御様や、「子どもの声に集中して演奏を聴けなかった」とお話し頂いたお客様もあり、今後の公演のプログラム構成に際しては、公演のコンセプトと聴衆のターゲット層を照らし合わせて更なる工夫が必要と感じられた。</p>
--------------	--

②公演名称	「となりに、天才モーツァルト。一天才だって人間だもの！ー」 ゼロ歳児も入場可能の親子コンサート
日時・期間	2011 年 9 月 22 日（木）18:30 開演
場所／主催	和歌山県和歌山市民会館／財団法人 和歌山市都市整備公社
来場者数	393 名
報告・成果	<p>初の地方公演ということで当日に現地入りし、また制作担当の学生が事前にホールの下見をすることができず会館スタッフとも初対面であったということから、仕込みの段階で色々と手間取ることが多く感じられた。だが、千葉県流山市での公演に引き続き2回目の公演ということもあり、本番は演奏者、スタッフ共に前回以上に質の高いものを提供することができたと感じる。当日は多数のお子様連れのお客様がお見えになり、特に未就学時から小学校低学年までのお子様が多く見受けられた。本番中客席内は少々騒がしかったが、お客様の大半が子ども連れであったということもあり、そのことに対するクレーム等は見受けられなかった。集客に関しても有料での公演にも関わらず、当初の予想を越える沢山の方々にお越し頂くことができた。学生たちにとっても、普段馴染みのない初めての土地とホールで戸惑うことも多かったようだが、お客様の温かい拍手と励ましの言葉を頂き、翌日以降の公演に向ける意気込みも一層高くなったようであった。</p>

③公演名称	「となりに、天才モーツァルト。一天才だって人間だもの！ー」
日時・期間	2011 年 9 月 23 日（金）19:30 開演
場所／主催	和歌山県有田川町きびドーム／有田川町教育委員会
来場者数	約 300 名
報告・成果	<p>前日の和歌山市民会館と同様に事前の下見なしの仕込みとなったが、仕込み、リハサルに時間的余裕があったことと、前日の反省を踏まえてすぐの公演であったこと</p>

	もあり、比較的スムーズに準備と本番を進めることができた。演奏の学生たちにおいても、公演を重ねるごとにその質も良くなってきたように感じた。特にモーツァルトに扮して司会進行役を務める学生は、そのセリフにアドリブ等を含めるなど、出演者と聴衆のコミュニケーションをはかるといふ点において大きな成長を見ることができた。集客においては有田川町教育委員会担当者の尽力もあり、立ち見のお客様がいらっしゃるほどの盛況ぶりであった。またホール内の構造上ステージと客席の距離が非常に近く、出演者と聴衆の一体感をより感じられる公演であった。
--	--

④公演名称	「となりに、天才モーツァルト。—天才だって人間だもの！—」 ゼロ歳児も入場可能の親子コンサート
日時・期間	2011年9月24日（土）14:00 開演
場所／主催	和歌山県上富田文化会館／上富田町・上富田町教育委員会
来場者数	216名
報告・成果	和歌山での連日公演、また本演目での最後の公演となったが、演奏の質、スタッフの動き等いずれもこれまでの公演での反省点が活かされた公演であったと思う。学生たちも連日の本番と移動で大変ハードなスケジュールではあったが、最後の公演まで「よりよいコンサートを作る」という点で惜しみない努力を続けてくれたと感じた。一連の公演の成功には出演者、制作担当の学生一人一人の努力が大きな役割を果たしたと感じている。上富田文化会館 文化ホールはこれまでの公演中、最も大きなホールであったが、お越し下さった聴衆の皆様にも大変好評を博し、最後の公演にふさわしい内容であった。また、終演後のロビーでは出演者と一緒に写真撮影をする小さなお子様も多くみられ、短い時間ではあったがお客様とのコミュニケーションの場を設けることもできた。



公演のチラシ



モーツァルトに扮するMC



「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」



オペラ「魔笛」より



オペラ「魔笛」より



「クラリネット五重奏曲」

東京音楽大学（和歌山県）

公演名称	「どうぶつたちのおんがくかい」（計4公演）
日時・期間・場所	① 2011年10月23日（日）① 13:00-13:40 ② 15:00-15:45 浦安市文化会館小ホール ② 2011年11月2日（水）11:00-11:45 千葉県東総文化会館 ③ 2011年11月6日（日）12:15-12:55 千葉県文化会館 ④ 2011年11月21日（月）11:00-11:45 市川市市民会館
参加学生	演奏：東京音楽大学アンサンブル・カーニバル [Aチーム：10/23、11/21] 碓山隆一郎(Cond)、小澤麻里(VI)、櫻田悟(VI)、横島俊介(Va)、井上貴信(Vc)、中村杏葉(Cb)、河野彬(Fl)、三上奈々子(Cl)、小山田萌(Perc)、桑原温子(Perc)、高橋ドレミ(Pf)、片山朗らか子(Pf) [Bチーム：11/2、11/6] 水戸博之(Cond)、高木早紀(VI)、宮島華子(VI)、仁科友希(Va)、細井唯(Vc)、八尋清史(Cb)、小林愛(Fl)、小野寺緑(Cl)、小山田萌(Perc)、堀田理恵(Perc)、児玉明日実(Pf)、朝倉麻里亜(Pf) 企画・制作：大沢めぐみ、向後茜、北山奏子、澤野詩織、石引康子、堀内美樹、西下航平、野原舞花、石崎育美、新井千尋
主催／共催	下記参照／東京音楽大学
公演の概要	2010年末に千葉県 県民交流・文化課より県内公共ホールとの連携コンサートの提案があり、東京音楽大学から企画案を3案提示した。6月に教職員が現地視察を行い、担当者から本公演の趣旨、および意見交換を行った。それを基に既存企画に修正を加え制作を進めた。9月下旬より学生と共に現地での打ち合わせを実施し、公演当日の詳細について確認をした。 公演は未就学児入場可能な演奏会として企画。小さな子供たちにクラシック音楽を楽しみながら聴いてもらうために、音楽に合わせて体を動かしたり、絵を描いたパネルを用いたクイズを入れる等の工夫を随所に挿入した。「動物の謝肉祭」演奏メンバーに加え、スタッフによるMCを配置。聴衆との会話を重視し、聴くだけでなく参加できる構成を目指した。

①公演名称	未就学児のためのコンサート「どうぶつたちのおんがくかい」
日時・期間	2011年10月23日（日）① 13:00-13:40 ② 15:00-15:45
場所／主催	浦安市文化会館小ホール／財団法人浦安市施設利用振興公社
来場者数	①約280名、②約300名
報告・成果	計4回行われた「どうぶつたちのおんがくかい」シリーズの初回の公演ということもあり、とくにMCの進行や台詞について指導を行った。用意した台本をそのまま話すのではなく、会場の子供たちとの会話や表情に応じてのアドリブが重要であることを学生たちは痛感したようだ。来場した聴衆は子供たちを中心に楽しんでもらえたようで、公演後に直接「楽しかった」と言葉をかけられる場面も散見された。終演後、スタッフだけではなく演奏者も聴衆とのコミュニケーションをとるように

	<p>配慮したところ、双方から「貴重な経験だった」という意見を多く聞いた。演奏時間を45分と設定していたが、①公演目が40分強で終演してしまったことにホールや聴衆からクレームが入り、②公演目には楽器紹介やアンコールを入れることにより対応した。唯一の有料公演であったが、2ステージともほぼ満員となり、未就学児のための演奏会が必要とされていることを実感した。</p>
--	---

②公演名称	平成23年度 幼児芸術鑑賞教室 未就学児のためのコンサート「どうぶつたちのおんがくかい」
日時・期間	2011年11月2日（水）11:00-11:45
場所／主催	千葉県東総文化会館／財団法人千葉県文化振興財団・千葉県東総文化会館
来場者数	257名（園児）
報告・成果	<p>他の公演と違い、幼稚園児のみを対象とした公演。他の公演以上に動物の絵を描いたパネルの動きや園児への語りかけを心がけた結果、園児たちからは想定より大きなアクションがあった。懸念されていた公演中のマナーも幼稚園教員に助けられ全く問題がなかった。親子連れの公演よりも幼稚園児のみの公演のほうが統制がとれ、舞台上からの語りかけもしやすいという結果は新たな発見であった。ただ、反応をしてくれるからこそ、もっと内容の濃い台本に出来たのではないかと、という反省もあった。幼稚園児対象だから削った台詞や内容も、「何を伝えよう導きたいか」を明確にし実行すれば理解してもらえた可能性が高い。ホールからの要望で、公演最後に演奏者の伴奏で幼稚園児と「森のくまさん」を共演した。幼稚園側の事前指導もしっかりされており、聴くだけでは到達できない一体感を感じることができた。</p>

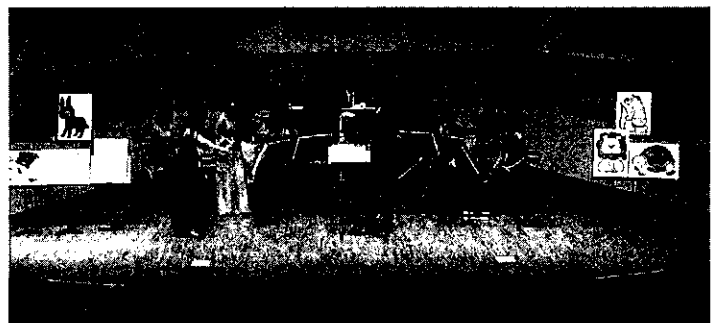
③公演名称	文化発見フェスタ in ちば (体験エリア) 東京音楽大学クラシック演奏会「どうぶつたちのおんがくかい」
日時・期間	2011年11月6日（日）12:15-12:55
場所／主催	千葉県文化会館／財団法人千葉県文化振興財団・千葉県文化会館
来場者数	約150名
報告・成果	<p>「どうぶつたちのおんがくかい」シリーズ、第3公演目。2公演目との間隔が3日間であったにもかかわらず、幼稚園児対象から親子連れ対象への台本、演出へと急きょ変更を行った。制作スタッフ間ではこの短期間での変更は認識されており、事前準備もしていたが、演奏者にとってこの急激な変化は戸惑いを生む結果となってしまった。一度公演を経験していたおかげで事なきを得たが、スタッフ間だけの事前準備に止まらず、演奏者へ伝え理解してもらうコミュニケーションが必要であることを痛感した。制作スタッフと演奏者との間の相互理解、信頼関係は、そのまま演奏レベル、公演の雰囲気にも影響する。本公演では2ステージ共に客席は満員となり聴衆の皆様にも好印象であったが、演奏者、制作側双方がコミュニケーションをより密にし、一体となって公演に臨むことができればより良い本番を迎えることができたであろうことが、今後の改善課題として残った。</p>

	今回は本企画唯一の有料公演であったが、非常にたくさんのお客様に足をお運び頂き、未就学児のための演奏会が必要とされていることを改めて実感した。
--	--

④公演名称	家族の週間 ファミリーコンサート「どうぶつたちのおんがくかい」
日時・期間	2011年11月21日(月) 11:00-11:45
場所／主催	公益財団法人市川市文化振興財団・市川市市民会館
来場者数	約500名
報告・成果	<p>3公演目の反省点を生かすべく、制作、マネジメント共に大きな改革に取り組んだ。まず、事前打ち合わせでこれまでの公演で一番未就学児が多いという情報を得て台本を大幅に書き換えた。対象が幼すぎてリアクションがない場合やそばにいる保護者が理解しやすく子どもを誘導できるような工夫を加えた。またそれらの変更点を演奏者に丁寧に伝え相互理解できるように努めた。前回の一番の反省点であった部分である。制作スタッフから演奏者へ、ただ説明するだけでなく一歩踏み込んだ意見交換を行った結果、これまでにない信頼関係が構築できた。その後学生から「これまでは“説明”をしてきたけれど今回は初めて“コミュニケーション”がとれたように思う」という言葉を聞いた。これらのやりとりこそが、連携コンサートで得られた最大の収穫であった。想定以上の客数は嬉しい誤算であったが、保護者のマナーが問題となった。幼児の泣き声等は黙認できる部分だが、走り回る子供をいかに保護者が注意するように誘導できるか等、“保護者の教育、誘導”も今後の大きな課題である。</p>



浦安文化会館公演チラシ



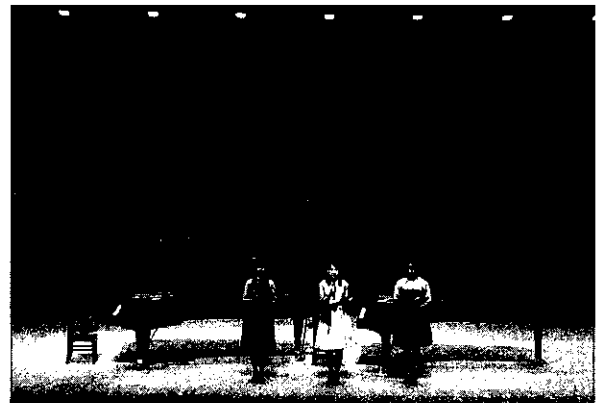
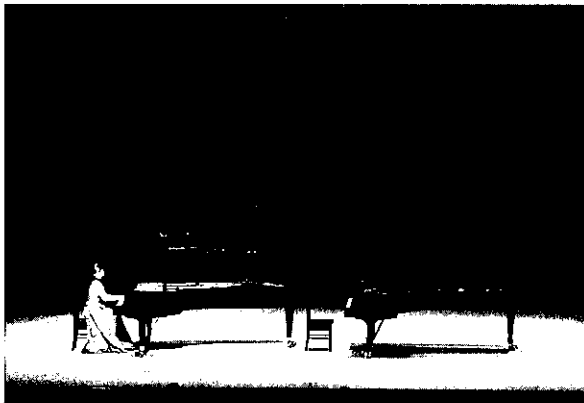
公演の様子

神戸女学院大学音楽学部（福岡県八女市）

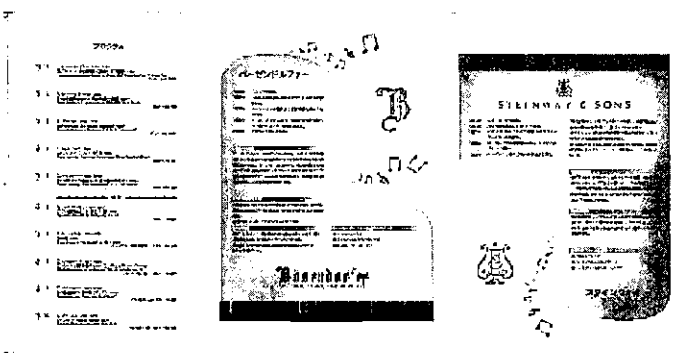
公演名称	おりなす八女開館記念事業 「聴いて楽しい、見て楽しい 神戸女学院生が語る、奏でる、 ピアノの名器たちの魅力～ベーゼンドルファーとスタインウェイ～」
日時・期間	2011 年 12 月 4 日（日）14:00-16:00
場 所	「おりなす八女」ハーモニーホール（福岡県八女市民会館）
参加学生	演奏：音楽研究科生（小泉乃林子、須山由梨、小林聡子、十川朋子、梶谷栄里子、樋口藍） 企画・制作：「ミュージック・コミュニケーション講座」履修生（安達咲月、久住早希、内藤菜穂子、繪谷瑠千文、古川莉紗、廣瀬紀衣、増田明日香、奥村真比呂、大槻法子、山田絵梨香、山本里紗、山竹千春、大谷梨恵、白井万椰、福塚まりえ、花岡麻里名、黒川彩香、高井葉摘）
主催／共催	おりなす八女開館記念事業実行委員会／神戸女学院大学音楽学部
公演の概要	<p>2010 年に八女市より公演の提案を受け、2011 年 7 月にリニューアル・オープンした八女市民会館のくおりなす八女開館記念事業の一環として開催。八女市ではクラシックの演奏に触れる機会がさほど多くはない。高齢化の進んだ地域で若者が少なく、市内に大学がないため、市民が大学生と交流する機会がなかなかないので、この公演がよい機会になればとの要望であった。</p> <p>公演制作にあたっては、ホールにベーゼンドルファーとスタインウェイのピアノがあることを活かし、それぞれの楽器の特徴や魅力をわかりやすく伝えることを目指した。演奏は本学の大学院生が担い、ピアノ・ソロに加え、声楽やフルートとのアンサンブル、連弾を披露。曲間ではピアノの構造や歴史、演奏作品や作曲家についての説明が学部生によってなされた。配布プログラムにも工夫をこらし、曲目と演奏者の他に、それぞれのピアノの歴史や特徴を掲載した。また、ロビーではパネル展示を行い、開演前や休憩時間にコーナーを訪れた人々に、学生たちが、各々のピアノや演奏曲、作曲家について説明を行った。ピアノ・アクションも展示し、実際に鍵盤の模型に触れ、その違いを体感してもらった。</p>
来場者数	400 名
報告・成果	<p>本公演は、2010 年の春より約半年強の準備を経て実施。5 月に学生らによる各々のピアノの勉強発表会を行い、6 月にはピアノ技術者を訪れて学外セミナーを 2 ヶ所で受講。以降、実務内容別にチームを編成し、それぞれチラシやプログラム、台本、展示パネルの作成を進めた。どの班もそれぞれのピアノの魅力をどのような切り口で呈示し伝えていくか苦心したが、当日は老若男女、様々な年齢層の来場者に恵まれ、温かい拍手の中、公演を無事成功裡に終えることができた。</p> <p>公演アンケートによると、来場者の 6 割強が 60 代以上と高齢者が大半を占めていたが、変化に富んだプログラムと、わかりやすい言葉でゆっくりと語られた司会進行は好評を博し、「2 つのピアノの特徴と音色の違いがわかり、大変興味深く聴けた」「若い人たちの演奏はとても新鮮で心に響く。また聴きたい」「よく勉強している。司会がゆっくりとした話し方で、観客にわかりやすい」などの感想を得た。パネル展示についても「普段見られないものを見ることができた」「2 台のピアノの構造がよく解った」などの意見が多かった。終演後の市民との交流会では、市内の中学校教諭より、勤務校の生徒たちに見せたいとパネル借用の申し入れもあり、学生たちが嬉し涙を流すシーンも見受けられた。</p>

一方、「展示を見る時間が充分でない。開場をはやくしたら良かった」「同じ演奏者が2台を弾き比べてくれたらもっとわかりやすい」「もう少し馴染みの曲があれば」などの意見もあり、よりよい公演にするための改善点も浮き彫りとなった。

学生からは「演奏会を作るのはとても大がかりで大変だと実感した」「自分が演奏活動をする上でも大切なことを学んだ」「お客様と一緒に音楽を共有できたと感じた」等の感想が出され、総じて、普段あまり携わることのない制作という立場で演奏会に関わることで、良い経験を得たことが分かる。



舞台の様子

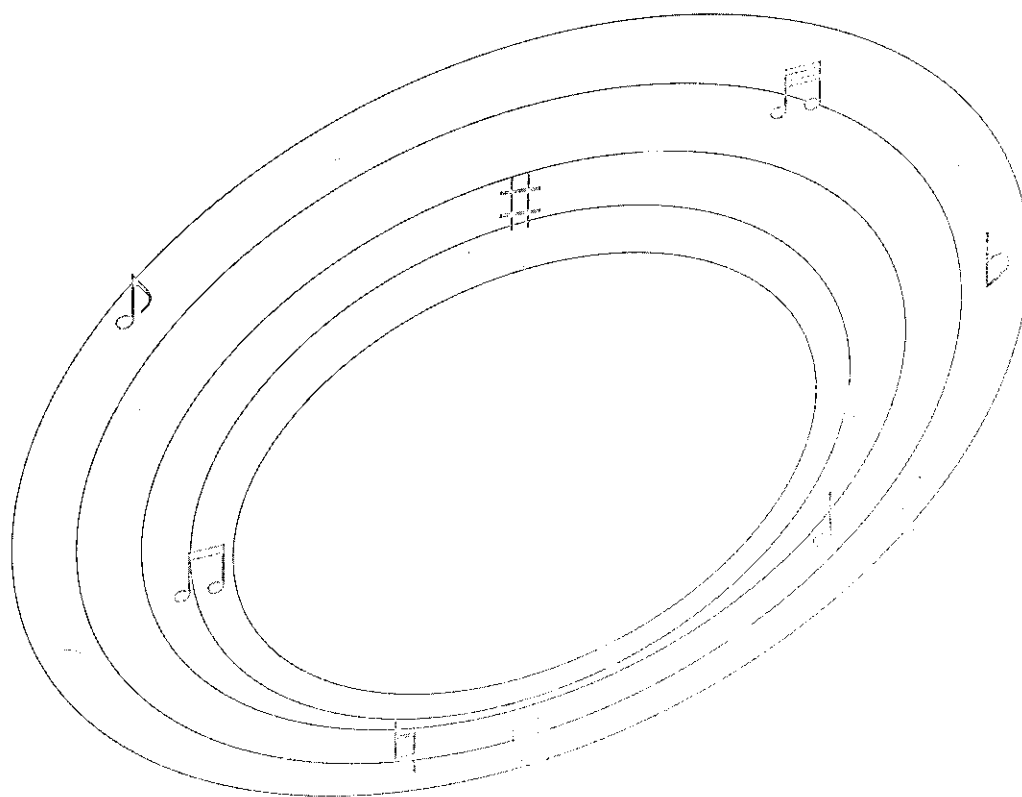


配布プログラム (カラー6ページ)



ロビー展示の様子

III. 研究活動報告



「平成23年度 日本の音楽系大学等における地域音楽活動に関する調査」報告

1. はじめに ～調査の目的と背景～

3大学連携プロジェクトでは、プロジェクト初年度の2009年度より、米国・英国をはじめとする諸外国の音楽系大学の先進的教育プログラムについて、調査研究を続けてきた。

「学生による地域音楽活動」¹を中核に据えた教育プログラムは、米国・英国の音楽系大学ではすでに1980年代から実施されており、近年ではキャリア教育の視点から新たな展開を見せている。また、ジュリアード音楽院、マンハッタン音楽院（以上ニューヨーク）及びニューイングランド音楽院（ボストン）の呼びかけで、「音楽大学と音楽院におけるアウトリーチ教育担当者会議 Consortium for Educational Outreach at Conservatories and Schools of Music」(以下、CEOCSM²)が2007年よりスタートし、毎年1月にニューヨークに担当者が集まって、意見や情報の交換を行っている³。

このCEOCSM参加校に対し、2009年末にアンケート調査「音楽大学及び音楽院における教育並びにコミュニティアウトリーチプログラムに関する調査」が実施された。本プロジェクト研究会では調査結果を分析し、米国におけるアウトリーチプログラムが、地域の様々なニーズに応じて実施されている状況を理解するとともに、アウトリーチ担当部署が「組織」として学内に位置づけられていること、一部の大学の取り組みは公立小学校の教育課程に組み込まれていることなどの特徴を把握することができた⁴。

アウトリーチなどに代表される地域での音楽活動は、キャリア教育や社会貢献活動などの視点から、日本の大学においても近年活発になっている。しかし、指導内容や学生の参加の形態等、カリキュラムのあり方は大学ご

とに異なり、未だ十分に定着しているとは言えない。

このような日本の状況を踏まえ、日本の音楽系大学等における地域音楽活動の現状を把握するため、「平成23年度 日本の音楽系大学等における地域音楽活動に関する調査」を実施した。本稿は、その結果を報告し、今後の方向性の検討に資することを目的とするものである。

大学教育における地域音楽活動についての研究は、これまでに林睦（2008）による研究が行われているほか、音楽系大学の立場から地域社会と大学の連携のあり方について述べた論考（武濤京子2005）、あるいは諸外国の大学の先進的な事例についての研究（津上智実2006）、キャリア教育との関わりについての研究（赤木舞2010）などが挙げられる。これらの研究に加え、3大学連携プロジェクトにおける教育活動と研究を含め、本調査の先行研究として位置づけることができる。

1 ここでは、いわゆるアウトリーチ活動に代表される、地域に密着した音楽活動を指すこととする。

2 2011年3月より Collegiate Music Outreach Network (C'MON) に名称変更した。

3 本プロジェクトでは2010～2012年にかけて担当者を派遣し、日本での取組紹介をおこなった（77頁～78頁の報告を参照）。

4 3大学連携プロジェクト『平成21年度研究報告書』33頁～38頁を参照のこと。

2. 調査の概要

本調査は3大学連携プロジェクトの2011年度の研究活動として、研究会にて検討を進め、昭和音楽大学連携ルームにおいて調査票の作成・発送・集計及び分析作業を行った。

調査票は2011年9月に全国94の音楽系大学及び音楽教育講座を有する一般大学教育学部等（以下、教育系大学）に発送し、29の大学から回答を得た（回収率30.9%）⁵。なお、回答は個々の回答者によるものであり、必ずしも各大学全体の状況を示しているわけではない。

調査結果は、回答大学の中から「学生による地域音楽活動」を「実施している」と答えた26の大学について回答の概要を表に示すとともに、その他のデータは別途グラフで示し、とりまとめを行った。以下、回答をまとめた表1及び表2（64頁～67頁）をもとに、その結果について述べることにしたい。

⁵ 回答があった大学は、以下の通りである。

（音楽系大学）大阪音楽大学、国立音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学、東京音楽大学、東京藝術大学、名古屋音楽大学、名古屋芸術大学、広島文化学園大学学芸学部、宮城学院女子大学学芸学部、武庫川女子大学音楽学部、武蔵野音楽大学

（教育系大学）茨城大学教育学部、岩手大学教育学部、愛媛大学教育学部、大分大学教育福祉科学部、香川大学教育学部、鹿児島大学教育学部、京都教育大学教育学部、岐阜聖徳学園大学教育学部、群馬大学教育学部、滋賀大学教育学部、千葉大学教育学部、北海道教育大学教育学部（旭川校）、宮城教育大学教育学部、宮崎大学教育文化学部、山形大学地域教育文化学部、琉球大学教育学部、和歌山大学教育学部（五十音順）

3. 調査結果の分析

3-1. 「学生による地域音楽活動」の位置づけ

まず、「学生による地域音楽活動」（以下、地域音楽活動）の位置づけを問う項目では、音楽系大学6校、教育系大学8校が授業科目として設定していると回答した（表1、表2）。この中で、地域音楽活動そのものを対象とした科目を設定している大学と、関連科目の中で地域音楽活動を取り入れている大学が見られ、後者は教育系大学に多い。そのため、地域音楽活動の企画・実践を中心に据えているもの、複数の科目が関連する活動として行われているもの、あるいは一定の成果を発表する機会として実施しているものなど、カリキュラムにおける位置づけは大学ごとに異なっている。

また、授業科目ではなく、課外活動や教員のボランティア活動として実施している大学でも、活発に地域音楽活動を展開しているところがある。このような大学では、大学全体として小・中学校における学習支援、地域ボランティア活動、地域イベントへの出演等、様々な地域音楽活動を行っている中で、一部の活動を単位として認定したり、自治体や教育委員会との連携の枠組みで実施している場合がある。

3-2. 地域音楽活動の運営体制

各大学の運営体制から、概ね4つの組織タイプを挙げることができる。すなわち、教員・職員の協働体制による「教職協働型」、教員が複数または単独で担当する「教員担当型」、事務部門の職員が運営する「職員運営型」、学生が実行委員会等により自主的に活動する「学生主体型」に分類される。

授業科目としている大学のうち、表1の音楽系大学では3大学連携校である東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学

が「教職協働型」、他の3校が「教員担当型」と見ることができる。また、表2の教育系大学では、5校で複数または単独で教員が担当しており、他の3校が教員に加えティーチング・アシスタントや学外の人材との協働、あるいは職員が担当する体制となっている。

一方、授業科目としていない大学のうち、音楽系大学では事務部門の演奏部や広報企画部等が担当しており「職員運営型」と見ることができる。このような体制は教育系大学では見られないことから、音楽系大学に特徴的な体制と言えよう。逆に、教育系大学で、教員のボランティアや学生の自主的な活動によって、規模の大きな公演を開催している場合もあり、音楽系大学では見られない体制となっている。

先に述べたように、3大学連携校は、科目として地域音楽活動を運営するための独自の組織を置き、常勤教員のみならず常勤・非常勤の職員及び関係教員が共同で担当する「教職協働型」の仕組みとなっている。このような体制は授業科目としている大学の中では他に見られないものであるが、地域における様々な活動先と丁寧に意思疎通し、かつ学年や専攻の多様な学生が参加するために、教員・職員間の密な連携が必要となると考えられ、そのために望ましい運営体制は今後も検討すべき課題であると言える。

3-3. 学生への教育的サポートについて

活動先としては、学校、福祉施設、病院、文化施設等が挙げられ、地域における教育・福祉・レクリエーションの場が主な活動先となっている。対象者もあらゆる年齢層にわたっており、幅広い対象者を考慮した活動内容が求められることから、演奏、指導、ワークショップ等複数の活動形態を挙げている大学が多い。

このような活動を行う際には、対象者の理解を深め、それに応じた活動形態やマネジメントを行う必要がある。音楽系大学では、演奏面での質の担保のため、オーディションや学内選考を実施している大学がある一方で、教育系大学では、教員養成の観点から児童・生徒の発達段階を踏まえた教育研究や、課外活動として学生の自主的なマネジメントが積極的に行われているなどの実態が見られる。学生が地域音楽活動を実践しつつ学びを深めていくためには、演奏・企画能力、プレゼンテーション能力、マネジメント能力等を総合的にサポートし、それらをカリキュラムに取り入れていくことが求められる。しかし、各大学の回答を見る限り、現状では、より総合的なカリキュラムや、あるいはこれを補完するプログラムは今後の課題であろう。

評価については、授業科目としている大学では、レポートのほか、参加態度を挙げる大学が多い。評価の視点としては、学生のチームワークや、活動先や対象者とのコミュニケーションが重要となるため、地域音楽活動の対象者の反応も含めた複合的な視点をどのように取り入れていくかが課題と考えられる。

3-4. 地域音楽活動の意義と課題

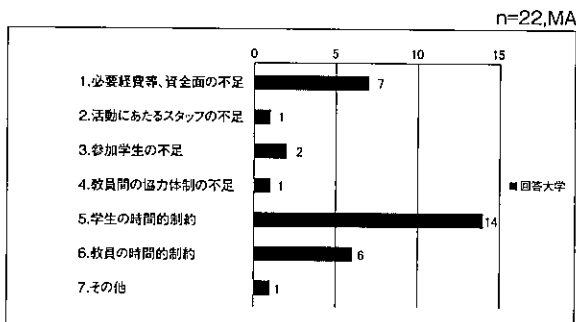
「活動の意義や効果」の項目を見ると、音楽系大学では「学生が大学で学んだことを自らの意思で実践する良い機会となっており、また地域貢献としても大きな意味を持っている」「学生にとっては、地域の音楽ニーズの把握、演奏技術の向上、コミュニケーション力やアートマネジメント能力の開発につながる活動である」「活動が学生の意欲につながっている」等の記述が見られる。

一方教育系大学では「大学及び講座の活動を地域に紹介し、成果を還元すること」「地

域の人々との音楽によるつながりを意識する機会」「教育現場と大学との連携」「教育実習に先行し小学生と関わることで、子どもとの接し方、わかりやすい話し方などを実践を通して習熟できる」等の記述が見られる。したがって、大学の地域貢献という点で共通の意義が認められているとともに、音楽系大学では学生が学んだことを実践で生かす機会や、新たな能力を身につけることができる活動と捉えているのに対し、教育系大学では教員としての資質向上の一助として捉えているという異なる視点があることも読み取ることができる。

活動にあたっての課題としては、学生の時間的制約を挙げた大学が最も多い14大学で、次いで必要経費等資金面の不足が7大学、教員の時間的制約が6大学となっている(図1)。

図1 当該活動にあたり、最も大きな課題は何でしょうか(複数回答あり)



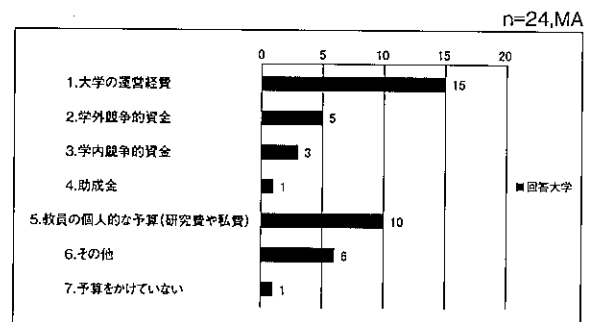
地域音楽活動は、音楽を通して人と人をつなぐ活動とも言え、そのために一定の時間をかけて参加することが求められる。参加する学生は、このような活動を大学卒業後にどのように生かしていくことができるのかが大きな関心となることから、今後は、卒業生が活躍していく場のひとつとなっていくよう、キャリア支援の取組としても充実させていくことが、学生にとっても活動の意義を理解することにつながると考えられる。

4. まとめ～調査を終えて～

調査票の回収率が30.9%という数字は少し残念な結果ではあったが、回答があった29大学のうち約90%にあたる26大学が「学生による地域音楽活動」を実施しており、すでに14校において授業科目に設定されていることがわかった。日本では2000年代に入り授業科目としている大学が次第に増えてきており、地域音楽活動の内容も広がりを見せている。

アウトリーチ担当部署が「組織」の中で位置づけられている米国の音楽大学等に対して、日本では「教職協働型」3校、「教員担当型」11校、「職員運営型」6校、「学生主体型」5校となっている。活動経費との関わりを見ると、教員の個人研究費や私的な予算でやりくりしたり、プロジェクトごとに学内予算を組んでいる例もあり(図2)、活動の継続性、資金確保の面からも、活動を大学の組織に組み込んでいくことが必要ではないだろうか。

図2 当該活動を実施するにあたり、必要となる経費はどのように予算化されていますか(複数回答あり)



カリキュラム化して間もない大学も多いことから、今後活動場所や数が増加するにつれて、学生の意識向上や活動の質を確保するための指導方法、あるいは学生派遣の手順・運営などについて、情報交換やネットワークが必要となると考えられる。本調査の結果を活かして、取組大学間での交流が生まれ、活動の拡大、質の向上につながることが望む。

謝辞

本調査の実施にあたり、ご協力いただいた
関係各大学の皆様に感謝申し上げます。

(武濤 京子、佐藤 良子)

引用文献

赤木舞「音楽大学におけるキャリア教育～
米国の地域コミュニティ活動を中心とし
て～」昭和音楽大学音楽芸術運営研究
所『音楽芸術運営研究』第4号、2011年、
pp.55-65。

武濤京子「日本における大学と地域社会との
関係のあり方についての一考察—アメリカ
の音楽大学の実践例から—」昭和音楽大学
音楽芸術運営研究所『音楽芸術運営研究所
紀要』第4号、2005年、pp.10-24。

津上智実「ギルドホール音楽院のアウトリー
チ教育」神戸女学院大学研究所『神戸女
学院大学論集』第53巻第1号、2006年、
pp.51-62。

林睦（研究代表者）『平成18～19年度日本学
術振興会科学研究費補助金若手研究（ス
タートアップ）大学教育における音楽の地
域貢献活動に関する研究（研究課題番号
18830032）研究成果報告書』、2008年。

平成 23 年度 日本の音楽系大学等における地域音楽活動に関する調査まとめ

表 1 音楽系大学

No.	大学・学部名／担当部署名	位置づけ	科目名、単位数、必修・選択、科目の開始年度	活動の概要	担当組織・担当者
1	神戸女学院大学音楽学部／アウトリーチ・センター	①授業科目に設定	M300「音楽によるアウトリーチ（講義）」、M400「音楽によるアウトリーチ（実習）」、各2単位、選択。 M300は2001年度後期、M400は2002年度前期開始。	神戸女学院大学音楽学部では2001年度より「音楽によるアウトリーチ」という教育プログラムに取り組んでいる。「アウトリーチ outreach」とは「より遠くに達すること、通常の活動範囲から踏み出すこと」を意味し、「音楽によるアウトリーチ」は音楽学部の教育を大学内およびホールやホール外の舞台という従来の枠組みから解放し、社会の様々な分野に開くことによって、学生の主体的な学びを促そうとするものである。 地域の小中学校や病院、子どものためのコンサート等で演奏する際には、聞き手の関心に沿ったプログラム構成が求められる。このような場を学生に与えることで、他者理解を踏まえた自己プロデュース能力、コミュニケーション能力、マネジメント能力を向上させるのが本取組の目的である。専門性の高い地域内インターンシップとして、学生のキャリア意識醸成の場であり、地域への還元として、建学の精神「愛神愛隣」の実践の場でもある。	担当組織：アウトリーチ・センター スタッフ：常勤教員、非常勤職員
2	昭和音楽大学／コミュニケーションセンター	①授業科目に設定	「音楽活動研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」、各1単位、選択。 2008年度開始。	昭和音楽大学が2007年4月に新百合ヶ丘（神奈川県川崎市麻生区）へ全面移転したのを機にスタートした「アーツ・イン・コミュニティ」プログラムを、2008年に科目化したものである。 地域への芸術文化交流活動を通して社会性を持った人材の育成を行う取組で、近隣の小中学校や福祉施設を訪問し、コミュニケーションを軸とした演奏活動を実施している。また、自治体や地元NPO法人等と協働で、まちづくり関連の音楽イベントにも演奏・マネジメントの両面で積極的に参加しており、学生自身の成長と地域貢献を目指している。	担当組織：昭和音楽大学コミュニケーションセンター スタッフ：常勤教員、非常勤職員、関係教員
3	東京音楽大学／アクト・プロジェクト	①授業科目に設定	「音楽キャリア実習Ⅰ」、「音楽キャリア実習Ⅱ」、各2単位、選択。 2008年度開始。	参加学生を多学年・多専攻の小グループに編成し、異なる分野の複数の教職員の指導の下に種々の音楽業務に取り組む機会を提供する。演奏者以外の立場で音楽業務を体験することによって、社会における音楽の位置づけや大学で学ぶ意義、キャリア・デザインへの認識を高める。	担当組織：アクト・プロジェクト スタッフ：常勤教員、非常勤職員、非常勤助手
4	東京藝術大学音楽学部／音楽教育	①授業科目に設定	「音楽アウトリーチ」、通年4単位、選択。 2010年度開始。	授業時間としては水曜3時限を固定し、原則講義を実施している。学生個々はアウトリーチの対象が決まり次第、企画・準備に移り、実施後成果等を報告することになっている。できる限り、準備段階から実施、事後の評価等まで教員も直接かかわるようにしている。 アウトリーチ活動の対象は、主に、学校（幼稚園、小中高、専門学校）、病院等々である。弦管打の専攻学生が多いため、通常3～6名程度のアンサンブル活動が主で、理論系の受講生が記録等で各グループに1～2名付く形で実施している。	音楽教育教員
5	広島文化学園大学学芸学部音楽学科	①授業科目に設定	「音楽によるアウトリーチ活動Ⅰ・Ⅱ（必修）」「演奏活動Ⅰ～Ⅳ（選択）」、各1単位。 2010年度開始。	「音楽によるアウトリーチ活動Ⅰ」では、主に小中学校や幼稚園などの学外での活動をメインに、プログラム構成、アプローチ方法などを学び、「Ⅱ」では、Ⅰの内容をさらに充実させるとともに、校内施設などを利用した「子どものための音楽会」を開催する。 「演奏活動Ⅰ～Ⅳ」では、コンサート、学校や施設での演奏会、地域のイベントでの演奏会など、様々な音楽に対するニーズを紹介するとともに、音楽が持つ働きが、地域社会にどのように受け入れられ求められているかについて学ぶ。	学芸学部音楽学科教員
6	宮城学院女子大学学芸学部音楽科	①授業科目に設定 ②課外活動として実施 ③教員がボランティア活動として実施	「演奏実践研修」、最大2単位、選択。 2011年度開始。	・地域での演奏活動に対し、ポイントを与え、一定数集めた場合に単位を認定する。 ・地域の文化施設、老人ホーム・障害者施設、市民センター等からの演奏依頼を学科が継ぎコンサートを開催。依頼演奏の種類によっては授業の延長の活動をして、位置づける。 ・学生たち自身による音楽ボランティア活動。 ・地域の小学生対象コンサート。	音楽科教員
7	大阪音楽大学音楽学部／学務事務部門及び連携支援センター	②課外活動として実施 ④その他（授業とは別に「特別実習」科目を設けている）		・「特別実習科目」は学生の主体的な取組み（社会活動においては学外の音楽指導・音楽ボランティア活動等）のうち、本学が「特別実習」に該当すると判断した活動で、なおかつ、定められた「実習記録」と「レポート」を大学に提出できる活動。 ・「課外活動」は豊中市教育委員会と連携し、小・中学校に対し、授業支援、出張演奏会、クラブ活動支援を行う。	「特別実習科目」は学務事務部門（主担当：教務担当）、「課外活動」は連携支援センター（スタッフ：教員、職員）
8	国立音楽大学音楽学部／学務部学生支援課、演奏事務室演奏課	②課外活動として実施 ③教員がボランティア活動として実施 ④その他（学習支援ボランティア（音楽）を学生支援課が窓口となり、実施している。学生への演奏依頼を演奏課経由で行っている。）		・公認団体による地域ボランティアにて音楽遊びや音楽療法を提供している。 ・合唱指導（小・中・高校）等を学習支援ボランティアとして行っている。 ・地元自治会や地元企業から演奏依頼を受け、学生が演奏アルバイトを行っている。	担当部署：学務部学生支援課、演奏事務室演奏課 スタッフ：職員、教員
9	名古屋音楽大学音楽学部／演奏部	④その他（「出張コンサート」として、交通費と若干の奨学金を提供している。）		めいおん出張コンサートと題して、小学校・中学校等の学校や病院・福祉施設、各種団体のイベント等からの依頼に応じ地域活性化への協力事業などに取り組んでいます。主に本学の学生や研究員が中心となり、時には教員が参加し音楽を求めるところへ赴き、音楽による心の癒しをもたらす、音楽の楽しさや喜びを伝えています。	担当部署：演奏部 スタッフ：演奏部職員
10	名古屋芸術大学音楽学部／広報企画部	③教員がボランティア活動として実施 ④その他（自治体と連携協定を結び委託事業としても実施）		・「ナゴヤまちかどアンサンブル」、小・中学校での芸術鑑賞会 ・市民対象の芸術鑑賞事業、市庁舎市民開放日での演奏 ・JRタワーでの演奏 ・名古屋市東「オアシス21」での演奏（名古屋市文化振興事業団とタイアップ） ・飛騨電話会館オリジナルミュージカルの制作、指導、出演 ・その他、吹奏楽指導等も実施	担当部署：広報企画部 スタッフ：職員、必要に応じて教員が関わる
11	武庫川女子大学音楽学部	④その他（音楽学部の広報活動として実施）		音楽学部の学生・教員を中心に親しみやすいプログラムによる演奏会を年3回開催し、地域とのつながりを深める	音楽学部教員
12	武蔵野音楽大学／演奏部・学生部・音楽教育学科	②課外活動として実施		1. 活動種目：オーケストラ、吹奏楽、室内楽、ソロ等 2. 活動内容：コンサート、クリニック、交流会、ワークショップ等 3. 活動場所：文化施設、学校（小・中・高）、養護施設、野外広場、公共施設のロビー等	担当部署：演奏部・学生部・音楽教育学科（常勤職員が担当しているが、それぞれの活動内容によって職員分担して、その任に当たっている。）

※表中の回答は個々の回答者によるものであり、必ずしも各大学全体の状況を示しているわけではない。 禁無断転載

活動先／対象者	活動形態	地域における協働組織・プロジェクト等	参加学生に対する評価	活動の意義や効果	キャリア支援教育の観点からの意義や効果、今後の見通し
小学校、幼稚園、病院、「子どものためのコンサート・シリーズ」／小学生、幼稚園児と保護者、入院患者	演奏、その他（子どものためのコンサート・シリーズ）	協働組織：雲雀ヶ丘学園小学校、国立療養所刀根山病院 プロジェクト名：雲雀ヶ丘学園小学校アウトリーチ、刀根山病院アウトリーチ	評価方法：授業中課題（レポート等）40%、参加度40%、授業中発表20% 評価の視点：自主性、独自性、積極性、協調性、自覚度	大学の枠内に留まっていたは気付くことの少ない音楽家の社会的責任と可能性について身をもって学ぶことができる点。	アウトリーチを履修した学生の中には、卒業後、その実績を足掛かりとして地域の公共ホール等での舞台に就いた者、また地域での演奏活動を継続している者があり、今後もそのような方向で卒業生が活躍することに期待したい。
近隣の小学校・中学校、福祉施設等／小中学生、施設利用者、近隣住民	演奏、指導、マネジメント	協働組織：麻生区 プロジェクト名：小学校・昭和音楽大学交流コンサート	評価方法：派遣先、視察教員、自己による評価およびレポート	・芸術文化交流を通して、「地域と共に育つ」音楽人を育成する ・音楽や芸術の持つさまざまな力を総合的に学び、自己表現力、コミュニケーション能力を養い、今後の自己キャリアに大きな効果をもたらす。	社会で必要とされる音楽家となるよう、現代社会のニーズに沿ったプログラム作りに努めたい。
介護施設、保育園、地域センター等／高齢者、乳幼児、地域住民	演奏（参加型コンサートを含む）、今年度のみ3大学連携による地方公共ホール連携コンサート	豊島区、としま未来文化財団、としまNPO推進協議会	評価方法：複数の教職員で評価する。学生の相互評価もさせる。学外相手先からも評価をもらう（アンケート形式）。 評価の視点：リーダーシップ、個々の仕事処理能力、チームワーク、欠点の改善の度合いに注目している。	音楽大学独自のキャリア教育であり、社会人基礎力の養成を目指した結果、参加学生にはコミュニケーション能力、社会性、PCスキル、およびキャリア・デザインの点で著しい成長が見られる。	最初からキャリア教育として開始した。
学校（幼稚園、小中高、専門学校）、病院等々	演奏、指導、ワークショップ（演奏・指導・ワークショップが結んだものもある）		評価方法：通常授業と同様の5段階評価 評価の視点：実施内容、レポート、授業等への取り組み状況	現在開講しているアウトリーチの授業は、演奏や作曲等を専攻する学生たちが、演奏を含む様々な視点を経験するため、社会と音楽とのかかわりを実際の活動を通して経験するために設定されたものである。彼らが将来演奏家や作曲家として育っていく過程で何らかの影響を及ぼすものと期待しているが、その効果は、すぐに測れるほど単純ではないと考える。この授業に関しては、あくまで音楽家育成のための一授業と位置付けている。	左欄で述べたこと以外はまだまだあまり考えていない。将来的には、わざわざ「アウトリーチ」という枠組みや用語を用いなくても、それが特別な活動ではなく、通常の音楽活動の一環と学生や社会に認識されるようになればよいと思う。
近隣の中学校および小学校、保育所、幼稚園、老人ホーム、病院など／中学生および小学生、園児、入所者	演奏、ワークショップ（その他）		評価方法：レポート、実習、授業参加態度	学生にとっては、地域の音楽ニーズの把握、演奏技術の向上、コミュニケーション力やアートマネジメント能力の開発につながる活動であり、地域貢献にもなる。	演奏家をめざす学生はもちろん、教員や音楽療法士、一般企業への就職に必要なコミュニケーション力や相手を理解する力などを身につける事ができる活動である。キャリアアップの為に必要な力をアウトリーチで伸ばし、就職につなげていきたい。
自治体の文化施設、市民センター、老人ホーム、障害者施設（本学科ホールに招待する場合もある）／一般市民、学生・生徒（小学生以上）	演奏	協働組織：行政 プロジェクト名：共催コンサート	特に行ってない	・様々な場所、機会に学生にステージ経験をさせることは、演奏力の向上に大きく寄与し、また学習意欲を高める。また、社会性も身につく。 ・地域の人々にクラシック音楽に親しみ、楽しむ機会を提供することはクラシック音楽文化を普及、浸透させる方途として有効。また、地域の行政の文化企画、実践力を高める助けともなってきた。	音楽家として活動してゆくひとつの道は、小規模ながら地域社会に音楽享受の機会を様々な提供することであり、こうした活動を通して、学生の企画力、マネジメント能力、コミュニケーション能力を高めることができる。学生に準備させる際に、教員側は、これら能力の向上の視点から指導を深めたい。
（以降は連携支援センターにおける「課外活動」について）小・中学校／児童・生徒	演奏、指導	協働組織：豊中市教育委員会 プロジェクト名：サウンドスクール	評価を行っていない	授業においては、本物の楽器や、その生の音に触れることができ、合唱の指導では、CD等の音源ではなく、生の声を聴き、目の前で実際に専門的な発声法を体験できる。また、クラブ活動においては、吹奏楽で個々の楽器の専門的な正しい奏法を学ぶことができ、また、合唱の指導を支援することにより、表現力・合奏力の向上を図ることができる。	「地域」や「音楽」といった思考を限定しがちなキーワードはさておき、社会人としての生活とは己の持つスキル・知識・アイデア等々を用いて社会に貢献することと同義であると考え、音楽を押し付けるのではなく、音楽を届けて幸せに受け止めていただくために必要なことを学ぶのが音楽大学のキャリア支援教育ではないかと考える。
・公認団体によるボランティア：保育所、子ども家庭支援センター、福祉施設／幼児、高齢者、障がい者 ・学習支援ボランティア：近郊の小中学校、中学校、高校／児童・生徒 ・演奏アルバイト：地元の企業、福祉施設、病院など／児童、生徒（小・中）、一般、高齢者	演奏、その他（幼児向け音楽遊び、音楽療法）	協働組織：立川市社会福祉協議会 プロジェクト名：たちかわふれあいミュージックフェスティバル	なし	・学生が大学で学んだことを自らの意志で実践する良い機会となっており、また地域貢献としても大きな意味を持っている。 ・大学の存在を地域においてアピールしたり、地元とのつながりを持つことができる。	学習支援ボランティア（音楽）では、児童・生徒の音楽学習向上に寄与していると考える。
小・中学校、病院・福祉施設、各種団体のイベント	演奏・その他		評価方法：職員が同行し確認 評価の視点：主催者の反応及び観客の感想		演奏力のアップや、演奏マナーの修得がキャリア支援につながる
連携自治体：周辺各市／小・中学校、市民	演奏、指導、ワークショップ	協働組織：周辺各市あるいは名古屋市文化振興事業団	評価方法：実施場所での鑑賞者の評価	活動が学生の意欲につながっている。	学校教育現場での芸術教育削減を補う意味で、クラブ活動指導、楽器レッスンなどの要望が増加すると考えている。
大学キャンパス内／近隣の一般の方	演奏			プロのオーケストラとの共演は、学生にとって貴重な経験となる。地元の大学に対する評価が高まる。音楽学部の活性化につながる。地元と深いつながりができる。	
文化施設、学校（小・中・高）、養護施設、地域の組織等／一般人、小・中・高校生、養護施設入居者		オーケストラ等の地方公演は同窓会がサポートしている。	評価方法：アンケート等による。 評価の視点：演奏等の質・観客や参加者の反応	いろいろな職種、いろいろな年代の方々との交流は、将来の音楽活動にとどまらず、人間形成に大いに役立っている。	いろいろな社会に接することが大きな意義で、この体験から、将来の自分の進むべき道を考えさせることに効果がある。

表2 教育系大学

No.	大学・学部名／担当部署名	位置づけ	科目名、単位数、必修・選択、科目の開始年度	活動の概要	担当組織・担当者
13	鹿児島大学教育学部 学校教育教員養成課程音楽専修	①授業科目に設定 ②課外活動として実施 ③教員がボランティア活動として実施 ④その他（学生が団体として（グループ含む）、学生主体として行っている。）	「合唱」、1単位、選択必修。	ベートーベン「第9」、ヘンデル「メサイア」、フォーレ「レクイエム」、モーツァルト「レクイエム」、ブラームス「ドイツレクイエム」等を半期ごとに取り上げ、学生による運営も行わせながら実施。最後は、対外的発表活動まで行っている。本年度前期は、地域のジュニアオーケストラと共演した。	教育学部音楽専修常勤教員、ティーチングアシスタント
14	群馬大学教育学部 音楽専攻	①授業科目に設定 ②課外活動として実施	「教職実践インターンシップ」、1単位、選択。	地域学校でのチーム・ティーチング、部活動の指導等	担当：教務係担当職員
15	滋賀大学教育学部 音楽教育講座	④その他（アウトリーチだけを扱った授業はないが、複数の授業の一部の時間をアウトリーチの企画や練習、実施にあてている）		授業科目に設定していないので上記の問いには答えていないが、関連する授業科目と活動内容については、添付の報告書を参照。	教育学部音楽教育講座専任教員 全員
16	北海道教育大学教育学部（旭川校） 芸術・保健体育教育専攻	①授業科目に設定	「総合的音楽活動の実践」、2単位、必修。 2006年度開始。	授業の中で小・中学校向けの演奏会を計画させ実施させる。アイヌの民謡をもとにしたオペレッタの公演計画を立案させ実施する。（オペレッタは本学独自の創作作品を扱っている）	担当：芸術・保健体育教育専攻 音楽分野常勤教員
17	宮崎大学教育文化学部 学校教育課程	①授業科目に設定	「音楽科教育演習Ⅰ」、2単位、選択。 2010年度開始。	附属小学校にて音楽教室を実施している。具体的には、テーマを決めて、音楽についてのミニ講義と演奏、児童との合同演奏などを行っている。	主担当：授業担当者
18	山形大学地域教育文化学部 文化創造学科音楽芸術コース	①授業科目に設定 ②課外活動として実施	「作曲研究Ⅱ」、「作曲ⅡB」、その他大学院科目。 各2単位、選択科目。 (2012年度よりアウトリーチⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳが加わる)	山形県小中高等学校児童・生徒作曲コンクールの入選曲を、山形県音楽教育連盟と連携し、編曲・演奏・CDにして県内各校に配布している。また、これら入選曲の編曲は、県教育センターホームページ教科のまど・音楽教育で聴くことができる。以上は作曲、理論系を中心としたものであり、演奏についても数多く行っている。	常勤教員、山形県音楽教育連盟
19	琉球大学教育学部 学校教育教員養成課程音楽教育専修	①授業科目に設定（総合音楽演習「琉大ミュージカル」） ②課外活動として実施 ③教員がボランティア活動として実施	（学部）「総合演習（2単位）」、（大学院）「課題研究」、選択、その他。 2005年度開始。	1. 教育学研究科・音楽教育専修の修論課題のテーマが、地域の音楽文化に関する内容、及び音楽療法に関する場合、一定期間フィールド研究の一環としてアウトリーチを行う（授業科目として実施するケース）。 2. 附属学校を中心として、市町村教育委員会や学校教員研究組織等から依頼があった際に、オーケストラ、室内楽、独唱・独奏の出張演奏を行うことがある（課外活動あるいは教員がボランティア活動として実施するケース）。 3. 総合音楽演習は、全学部を対象とし、年に1回ミュージカル公演を行う。	教育学部音楽科常勤・非常勤教員
20	和歌山大学教育学部 学校教育教員養成課程	①授業科目に設定 ③教員がボランティア活動として実施 ④その他（学部の地域との共同事業の一環として）	「音楽のアウトリーチ活動論」、2単位、選択。 2009年度開始。	県下の幼小中学校から担当者へアウトリーチの依頼がある都度、音楽科担当教諭と連絡をとりながら日程および内容を定める。上記科目の履修者が中心となって活動するが、ゼミの院生が指導を行うこともある。	担当：専任教員
21	茨城大学教育学部 学校教育教員養成課程音楽選修	④その他（学生個人が部活動、サークルを含めた様々な団体において、主体的に実施している。）		小中学校への合唱、管楽器等の指導のボランティア活動、県の芸術祭への参加、老人ホームでの慰問演奏、市民楽団（吹奏楽、オーケストラ）への参加、第九合唱への参加、プライダルでの演奏	
22	岩手大学教育学部 音楽教育科	③教員がボランティア活動として実施		岩手大学公開講座で「ガムラン体験講座」を年2回学生と共に実施	担当組織：地域連携推進センター
23	愛媛大学教育学部	②課外活動として実施 ③教員がボランティア活動として実施		①楽友会コンサート（音楽専攻学生の自治組織である。楽友会がコンサートを主催する。学部は後援。） ②近隣の小・中・高校からの演奏要請、部活指導要請に応えるかたちで。	担当組織：楽友会（主担当：楽友会会長、スタッフ：会長、副会長（ともに4年）、演奏会係）
24	大分大学教育福祉科学部 学校教育課程	②課外活動として実施		フレンドシップ活動に運動したボランティア活動。1日目に小学校で合唱指導を行い、2日目に地域の一般の人々を対象に音楽会を開催する。音楽会には学生とともに小学生も参加する。	担当：音楽選修
25	香川大学教育学部 学校教育教員養成課程 教科教育 コース音楽領域	③教員がボランティア活動として実施		【主旨】一般の音楽会に参加することが難しい児童と保護者サポートの必要な方等も対象とした音楽鑑賞会を運営し、音楽鑑賞の機会を提供する。それによって市民の「共生」の場とすることを目的とする。（運営の特徴）大学内の学部を超えた連携を行う。サークルのメンバー、卒修了生、教職員や地域の方々の協力も得ながら運営する。地域社会と大学の人的な交流の場としての性格を併せ持つ。 【現在までの実施状況】年1回（計4回）、今年度が5回目。これまでに多くの来場者に恵まれ、市民から好評を博した。予算不足の中、さらに改善し継続的な実施を目指している。 【活動内容】毎回テーマを持つコンサート。	担当組織：コンサート実行委員会・教育学部 スタッフ：学生による実行委員会20名、アドバイザー常勤教員
26	宮城教育大学教育学部 音楽教育講座	②課外活動として実施 ③教員がボランティア活動として実施 ④その他（学校教育支援ボランティアに関しては大学のキャリアサポートセンターが窓口となり実施している。）		市内の小中学校等との連携による「ふれあいオーケストラ」を仙台市内のコンサートホールで実施（客席数800×2回）。年1回。仙台市天文台との連携による「天文台ロビー・コンサート」を年3回程度実施。その他、学生の主体的な活動として病院や老人ホーム等で慰問のミニコンサートを実施している。また、小中学校への学習支援は学生たちが自主的に活発に行っている。	担当：音楽教育講座常勤教員

※表中の回答は個々の回答者によるものであり、必ずしも各大学全体の状況を示しているわけではない。 禁無断転載

活動先／対象者	活動形態	地域における協働組織・プロジェクト等	参加学生に対する評価	活動の意義や効果	キャリア支援教育の観点からの意義や効果、今後の見通し
2011年度：MBC ユースオーケストラ／小学生から25歳までの男女。演奏会聴衆は広く一般。	演奏、指導、その他（土曜等利用した特別練習）	協働組織：MBC ユースオーケストラ、白いうた青いうた実行委員会 プロジェクト名：MBC ユースオーケストラ定期演奏会、白いうた青いうたフェスティバル in Kagoshima	評価方法：レポート 評価の視点：活動全体を通して、合唱・歌唱技術のみでなくアウトリーチ活動のあり方をどこまで感じ考えたか。	合唱ジャンルにおける名曲という作品に取り組み、発表まで体験させられること。今年度は、特にオーケストラとの共演、社会人との合同活動の実現で、学びの質を深めることができている。	社会人との合同活動、また社会人を交えた場での練習運営等は生涯学習指導者としての意識・育成に資すると思われる。
群馬大学附属中学校、他／生徒	指導		評価方法：レポート提出 評価の視点：活動先での意欲・関心・態度等		
近隣の小・中学校、保育園、幼稚園／生徒・児童・園児	演奏、指導、ワークショップ	しが次世代文化芸術センター（NPO）	評価方法：学生の様子を見て評価している。 評価の視点：教育学部なので、プログラムへの参加度、熱意、子どもとの関わり方	教員・学生の音楽的・社会的視野の広がり。地域への浸透力のイメージアップに。学生にとって実習とはまた違った教育現場との関わり。授業と運動することによる授業の活性化。	教育学部なので、現在教員採用率が好調なこともあり、ほとんどの人が小・中高の教員になれる。そのためキャリア支援という位置づけでは考えていない。教員になった時に経験が役立てばと考えている。
近郊小学校／小学生、地域の住民	演奏・その他	なし	評価方法：出席 評価の視点：演奏能力、企画・実行能力、態度	教育現場と大学との連携。学生達が子ども達と音楽を通じ触れ合う機会の提供。学生達の教員資質向上。	教育大学学生にとって、教育現場での実践や子ども達との触れ合いは貴重であり、また、学生が音楽の持つ力を再確認する機会となる。
附属小学校／小学生	演奏	特になし	評価方法：レポート・その他 評価の視点：企画への貢献	・教育実習に先行し小学生と関わることで、子どもとの接し方、わかりやすい話し方などを実践を通して習熟できる。 ・企画を通して発想力や論理的思考力を養うことができる。 ・音楽全般についての知識を増やすことができる。	教育実習の準備的活動として位置づけており、今後キャリア支援に直接つなげていくことは考えていない。
編曲した作品を、市民会館小ホール、トミオカホール等で演奏録音、CD化する。大風印刷(株)のボランティアで録音・CD化がなされている。	編曲・録音・CD化	協働組織：山形県音楽教育連盟、大風印刷(株) プロジェクト名：山形県小・中・高児童・生徒作曲コンクール	評価方法：演奏、編曲、指揮、アンサンブル等々。 評価の視点：編曲作品の評価、またその演奏の評価。	各学校に入選入賞曲を配布することにより、音楽として鑑賞することができる。県教育センターのホームページで公開され、保護者も聴く事ができる。	
市民会館、文化センター、小学校、特別支援学校／一般市民、児童・生徒	演奏、ワークショップ(大学院生)	協働組織：南城市観光文化課(南城市文化センター)＝大学院課題研究1 プロジェクト名：南城市市民ミュージカル	評価方法：(学部)参加度、(大学院)課題研究で、修論の反映内容によって評価。 評価の視点：実演よりも教育行動としての視点を重視。	・教員養成学部なので、教育活動への視野を広げることができるとなる。 ・演奏能力の自己評価。	将来的には、学校現場、福祉施設現場との双方向で継続的なワークショップ形式の中で、音楽能力、企画能力、コミュニケーション能力、地域文化への問題意識等を醸成させたいという希望があるにも拘わらず、教員養成課程のタイトな履修モデルがそれを許さない現状、つまりキャリア教育が現場での教職実践学習に集中する事情がある。
近郊の小学校・幼稚園、附属小学校、大阪府の保育園、中学校／3歳児～中学生	演奏・ワークショップ(演奏に一部ワークショップ(楽器体験)を含む)	なし	授業科目としてはレポートと平常の授業参加度を総合的に評価する。	地域の小中学校との連携が深まり、学生の授業参観の機会が増える。学生が教員として学校現場に入った時につながりのある学校や教員からの支援が期待できる。	アウトリーチに先立って学生は教員と学校現場を訪問し、授業参観なども行って、アウトリーチの内容を授業内容と関連づけて構成するようにしているが、このような経験こそが教育学部におけるキャリア支援につながっている。
	演奏、指導				小中学校での訪問演奏で生の演奏を耳にすることで音楽への苦手意識を緩和し、より音楽を身近に感じることが可能にする。
若手大学／小学生以上の一般	ワークショップ		評価方法：演奏実技と指導法レポート		教員養成のための一つのパラダイムと位置づけている。
①市内のホール(有料)を借り、②近隣学校／①チケット購入者、②学生・生徒	演奏、訪問、指導(当該教員が補助的に指導する)	特になし	演奏会での評価はない(授業枠内での評価)	運営を学生が行うので、コンサート事業への学びとなる。地域の人々との音楽によるつながりを意識する機会となる。	現時点で就職に結びつけることは考えていない。教員養成学部であるので、コンサートの運営方法などを学んでもらいたい。
県内の市町村／小学生・一般	演奏、指導			右欄と同じ	小規模校の子どもたちに合唱指導したり、音楽会を主体的に企画・運営・実施することで教員に必要とされる資質の向上に役立っている。
市内コンサートホール／一般市民の方	演奏、ワークショップを同時開催する場合がある。	協働組織：サンポートホール高松 プロジェクト名：開館5周年記念事業、開催会場のホール(市立)の開館記念行事となったことがある。			
仙台市青年文化センター、仙台市天文台、市内の病院等／小中学生、一般市民		協働組織：仙台市教育委員会、仙台市天文台	評価には反映させない。	大学および開座の活動を地域に紹介し、成果を還元すること。学生の演奏・教育体験の場の確保。一般市民への音楽の普及。	演奏・教育体験が得られることで、経験豊かで視野の広い教員の養成を目指している。

ギルドホール音楽演劇学校 Guildhall School of Music and Drama

1. 大学概要

ギルドホール音楽演劇学校（以下、ギルドホール）は、1880年に創設された芸術大学で、ロンドンの中心バービカンに位置する。英国初の公立音楽大学としてスタートした同校は、1935年には演劇専攻が加えられ音楽演劇学校となった。ロンドン市主導のもと、音楽専攻（クラシック、オペラ、ジャズ、室内楽、古楽、作曲、音楽療法、電子音楽、リーダーシップ）で4年制学士、修士、博士、演劇専攻で4年制学士及び修士、舞台技術専攻で3年制学士の学位を提供するほか、音楽・演劇の両分野でギルドホール・ジュニア（Guildhall Junior）¹と呼ばれるコースを運営している。840名を超えるフルタイム学生のうち、約700名が音楽専攻、約140名が舞台技術を含む演劇専攻に所属しており、全体の40%にあたる約300名が40カ国からの留学生である。イギリスで最高の教育機関に贈られるQueen's Anniversary Prize²を受賞するなど、そのプログラムへの評価は高く、サー・ジェームス・ゴールウェイ、アンネ・ゾフィー・フォン・オッター、デイブ・ホルンドら卒業生が各界で活躍している。

多くの音楽家を輩出しているギルドホールだが、ソリスト育成のみに焦点をあてた教育をしてきたわけではなく、80年代より地域コミュニティ活動を展開し、音楽家の社会的役割というものを常に模索してきた。早い時点でプロフェッショナル・デヴェロップメント（以下PD）という考えを取り入れ、現在ではヨーロッパ最大の芸術機関、バービカンセンター（Barbican Centre）と提携するなど、社会のニーズに沿った音楽家育成を行っている。

2. プロフェッショナル・デヴェロップメント学科

PD学科は、ピーター・レンショー（Peter Renshaw）³が1984年にスタートした「Performance and Communication skills」というコースがもとになっており、音楽家の社会における役割とそのあり方についての意識を高め、それらを実践する機会を与えることを目的としている。プロフェッショナルな音楽家として成功するために大学で勉強している中で、そこで学ぶものと社会との接点はどこにあり、どのような関係にあるべきなのかを考えることで、卒業後のキャリアパスを明確にさせる狙いがある。専攻として学位取得が可能なのは修士課程のみで、学部レベルでは2つの必修授業と1つの選択授業を提供している。座学と実践をバランスよく取り組むことで、今日の社会に生きる音楽家として必要な起業家精神、声楽／器楽教授方法、自身との向き合い方、対社会スキルなどを育成するものとなっている。

1 ギルドホール・ジュニアは、音楽は8～18歳（声楽のみ15歳程度から）、演劇は13～18歳を対象としたプログラムである。毎週土曜日に全日プログラムとして行われ、オーディション選抜がある。

2 Queen's Anniversary Prizeは2年に1度、英国の高等教育機関対して行われるもので、機関としての取り組みが評価の対象となる。ギルドホールは、2005年にコネクトプロジェクトにおける音楽クリエイティビティを通じた子どもたちへの教育活動に対して、2007年に20年にわたるオペラ教育に対して、この賞を受賞している。

3 ピーター・レンショー 英国ユーディ・メニューイン音楽学校校長、ギルドホール音楽演劇学校リサーチ&デヴェロップメント部長を歴任し、現在クリエイティブ・ラーニング・コンサルタントとして活躍中。著書に*Engaged Passions: Searches for Quality in Community Contexts* (2010)がある。

2009年よりギルドホール&バービカンセンター・クリエイティブ・ラーニング部との協同学科として運営体制、プログラム内容が一新されたことにより、学校や地域グループ、病院、刑務所での演奏や楽器指導、ワークショップ実施などの一般的な地域コミュニティ活動に加えて、よりジャンル横断的なプロジェクトが行われるようになった。

2-1. 学部プログラム

学部では1年次よりキャリア形成を見据え、音楽家としての社会との関係性を学ぶ授業が展開されている。クラシック及びジャズ専攻の学生全員の必修科目となっており、授業はPD及び各専攻学科によって運営されている。1年次では通年講座「Performance Matter」が設置されており、その内容は身体の使い方、心理学、即興、コラボレーション、コミュニケーションスキルなどゲスト講師による講義を交えながら、音楽家としてのあり方を考えるものとなっている。3-4年次には「Professional Studies」において、教授方法、公演を行うためのマネジメント、ポートフォリオ作りなど一人の音楽家として自立するためのスキルと考え方を学ぶ。そして卒業前にはPD学科長、各専攻学科長、メンター⁴たちが学生1人1人と、今までどんなことを行ってきたか、社会とどのように関わってきて、これからどうしていきたいのかなど、個々が作成したポートフォリオをもとに面接を行う。PD学科長ショーン・グレゴリー（Sean Gregory）氏によれば、「卒業時にはそれぞれがポートフォリオと意識をしっかりとった状態にすることで、すぐにでも仕事をスタートできるように準備させる」⁵のだという。このほかにもPD学科が行う様々なプロジェクトには、「Collaborative Skills/ Workshop skills」という選択授業として履修すること

が可能となっている。

2-2. 大学院修士課程 リーダーシップ・プログラム

音楽大学として珍しいリーダーシップの修士課程では、コラボレーションを通して、アーティストとして必要となる「自身は何をできるかを聴きとり、読み取る力」、「その場での対応力」、「コミュニケーション能力」等の育成を行っている。まず1年次には必要となるスキルを習得し、メンターと一緒にプロジェクトに関わっていく。同プログラムはプロジェクトベースとなっていることから、基本スキルを学んだあとは、プロジェクトごとに必要なスキル（教育方法、作曲法など）を訓練していくという。ただし、その中でも即興スキルは継続的にスキルアップが必要なものになっており、常に授業としてフォローアップが行われる。2年次はそれぞれがプロジェクトを企画し、実施することが主となる。ただし、リサーチの側面があること、実践ベースであることが求められ、実施前には企画書と面談が必要となっている。また国内外でワークショッププロジェクトを行う機会もあり、今までにシンガポール、バリ、マレーシア、ガンビア、アルゼンチンなどで活動を行ってきた。

グレゴリー学科長、シグルン・グリフィス（Sigrun Griffith）・リーダーシッププログラム・リーダーの両氏によれば、同プログラムでは、必ずしもワークショップリーダーを養成しているわけではないという。音楽家として重要な要素というものが、コラボレーティ

⁴ メンターは卒業生をはじめとしたプロフェッショナルたちで、学生たちに定期的にアドバイス等を行う。

⁵ ショーン・グレゴリー（ギルドホール音楽演劇学校プロフェッショナル・デヴェロップメント学科長）インタビュー、2011年3月7日

ブ・プロジェクトを行うことで、より実践的に身につけることができるため、それらのスキルを培い、次世代の音楽リーダーを養成するのが目的とのことだ。周りの音や意見を聴く、何かイレギュラーなことが起こったときにその場で対応を変える、他の人とコミュニケーションをとる、様々な人の意見をまとめる等、通常の演奏を行うにあたっても重要なことを身につけ、より深く社会と音楽との関係を考え、実践できる人材の育成を目指しているとのことである。

3. ギルドホールにみる人材育成のあり方

ギルドホールでは前述のようにPDを学科として立ち上げ、学部1年次より必修授業として導入することで、自分が音楽家としてのどうあるべきか、ありたいのかというのを4年間かけて学び、考え、実践することができるシステムが構築されている。専攻学科と密な連携のもとに行われることにより、大学全体のバックアップを受け、包括的なカリキュラムの提供が可能となっている。なによりも卒業生の全員がポートフォリオを持ちキャリアをスタートできるのは強みだろう。そして大学院では、その在籍期間中を通してワークショップという手法を使うことで、単なる音楽家ではない、リーダーを養成し、そのキャリアを軌道にのせるサポートをしている。このように同校では継続的かつ段階的にカリキュラムを提示することで、学生たちの意識レベルが下がることない環境を作っているといえる。今後日本の音楽大学でも、単年での授業構成よりも、学部4年間もしくは大学院2年間という長いスパンでとらえることのできるカリキュラム構築というのが必要になるとともに、学内での連携強化が重要になると考えられる。

(小島 レイリ)

参考文献

Gregory, Sean. Interview transcribed by the author, Interview conducted on March 7 and 11, 2011.

Saevardottir-Griffiths, Sigrun. Interview transcribed by the author, Interview conducted on March 7, 2011.

Griffiths, Paul. Interview transcribed by the author, Interview conducted on March 8, 2011.

Guildhall School website <http://www.gsmd.ac.uk>

Guildhall School, Guildhall School Guide for Prospective Students

_____, "Performance Matters" syllabus, 2011.

_____, "Professional Studies" syllabus, 2011.

_____, "Collaborative Skills/ Workshop Skills" syllabus, 2011.

バービカンセンターとニューヨーク・フィルハーモニックによる合同プロジェクト

英国ロンドンにあるバービカンセンターと米国のトップクラスのオーケストラであるニューヨーク・フィルハーモニック（以下、NYフィル）が、2012年2月11日～19日にかけて初めての合同プロジェクトを実施した。本稿は、視察記録と関係者へのインタビューをまとめたものである。

1. 合同プロジェクトの概要

今回の合同プロジェクトは、バービカンのBarbican International Associatesという提携事業¹の一環であるThe New York Philharmonic residency at the Barbican²において実施された。本プロジェクトは9日間の中で子どもためのワークショップ、マスタークラス、イベント、コンサート等が実施された。NYフィルが主体でおこなったものは、Very Young Composers（以下、VYC）、Kidzone Live!、Young People's Concert（以下、YPC）、マスタークラス（ヴァイオリン、クラリネット等の6回）で、そのうちVYCとKidzone Live!はバービカンセンターおよびギルドホール音楽院³との協働体制でおこなわれた⁴。また、バービカンセンターのクリエイティブ・ラーニング部門では、Future

Bandというプロジェクトを同時期に実施したが、これにはNYフィルのティーチング・アーティスト3名が参加した⁵。互いのプロジェクトに参加し合うことにより、双方の取組みについて学び、今後どのように連携していけるかについて考えるきっかけとなったようだ。以下に、それぞれのプロジェクトについて述べる。

1 Barbican International Associatesは、NYフィルの他にLeipzig Gewandhaus Orchestra、Royal Concertgebouw Orchestra of Amsterdam、Los Angeles Philharmonic、Jazz at Lincoln Center Orchestraと提携を結んでいる。それぞれの楽団はレジデンシーとして通常のコンサート、ファミリー向けコンサート、教育コンサート、アウトリーチ活動などを行う。

2 助成および後援はSHM財団、シティ・ブリッジ・トラスト、アメリカ大使館である。

3 バービカンセンターとギルドホール音楽院については小島レイリ氏の報告を参照（68頁～70頁）。

4 VYCはCredit Suisseより助成を受けており、Kidzone Live!とマスタークラスは在英のアメリカ大使館が後援をしている

5 ティーチング・アーティストとは、小学校等の教育機関やコミュニティにおいて、教育者の補完的スキルや感性をもったプロの芸術家で、芸術を通して幅広い人々の学びの場に携わる（Eric Booth:The History of Teaching Artistryより、筆者訳）

表1 VYCの実施概要

実施スケジュール	2月12日 午前10時から午後4時 2月13日 午後3時半から午後5時半 2月14日 午後3時半から午後5時半 2月16日 午前10時から午後4時 2月17日 午前10時から午後4時 2月18日 作品発表	創作活動 創作活動 創作活動 子どもたちと演奏者との打ち合わせ 最終打ち合わせ、通し演奏、楽譜チェック 於：バービカンセンターロビー (Kidzone Live!の一環として)
参加者	10～15歳の子ども7名。うち3名はFuture Bandにも参加。過去にバービカンセンターでのプロジェクトに参加した子どものリストから希望者を募った。	
ファシリテーター	NYフィルより3名（ジョン・ディーク、デービット・ワレス、リチャード・キャリックの各氏）補助的な役割としてギルドホール音楽院のリーダーシップ修士課程の院生が参加。	
演奏者	ギルドホール音楽院を卒業した若手演奏家など。ヴァイオリン2名、ヴィオラ1名、チェロ1名、コントラバス1名（NYフィルのディーク氏が参加）、トランペット1名、パーカッション1名、フルート1名。	

2. Very Young Composers (VYC) における取組み

VYCはNYフィルがおこなっている教育プログラムの1つである⁶。作曲スキルを全く持っていない10歳～15歳の子どもたちに曲を創作してもらい、実際にプロの演奏家が演奏するというものである。これまで本拠地のニューヨークではもちろんのこと、全米、スペイン、フィンランド、アジア（韓国、日本）、ベネズエラ等で実施した実績がある。今回、バービカンセンターでの実施にあたっては、表1の要領でおこなわれた。

ファシリテーターは、VYCの立ち上げメンバーでディレクターのジョン・ディーク（Jon Deak）、シニア・ティーチング・アーティストであるデービット・ワレス（David Wallace）、作曲家でVYCのティーチング・アーティストのリチャード・キャリック（Richard Carrick）の3名が担当した。また、彼らの補助的な役割として、ギルドホール音楽院のリーダーシップ修士課程に在籍する学生が参加した。子どもたちの曲の演奏はギルドホール音楽院の卒業生を中心とした若手演奏家とディーク氏が担当した。



子どもと演奏者とのやりとりの様子。演奏者に指示を出しながら自分の曲に対するイメージを顕在化させていく。

筆者は2月16日、17日のセッション、18日の本番を視察した。今回参加した7名の子どもたちは、楽譜の書き方や、ソルフェージュ、和声学といった訓練は全く経験がなく、演奏能力に関しても、Future Bandや過去のワークショップ等で何らかの楽器を演奏できる程度である。したがって、メロディーは歌って伝え、リズムはボディ・パーカッションで表現し、言葉で表現しにくいイメージは絵にするなど、様々な手段を使って、子どもたちのアイデアを出来るだけ忠実に音にして、それらをティーチング・アーティスト達が楽譜に起こしていった。使用楽器は用意されたもの（演奏者）の中から自由に選ぶことができるが、ほとんどの子どもが、今回集まった演奏者を全員起用した管弦アンサンブルの作品を創った。ある程度アイデアが固まった段階で、楽譜に記されたものを演奏者が演奏し、作曲した子どもがそれを聴いた上でさらに、アレンジしていく。作品を仕上げていくにあたり、ティーチング・アーティスト達がいろいろな演奏オプション（例えばピチカートやフラジオレット等の奏法）を与えることにより、さらに子どもの創造性を引き出していた。演奏の仕方（テンポ、強弱、バランスなど）についても子どもたちから注文させていた。一連のやりとりで、子どもたちは自分の考えを相手に伝えることの難しさや、作品をまとめ上げる難しさを実感しているようだった。

全体のプロジェクトの進行はNYフィルのティーチング・アーティスト達が担当し、ギルドホール音楽院の院生たちも手伝いにかかわったことで、7名の子どもたち全員が常に音楽家とやりとりができる状態をつくることができた。演奏の指揮はキャリック氏が担当

⁶ 代表的なものに、Young People's Concertなどがある。詳しくは<http://nyphil.org/education/>を参照。

したが、年齢が上の子どもは自分で指揮をした。子どもの自主性や可能性を最大限に引き出していたと言える。作品を発表するまでの期間は短かったが、ティーチング・アーティストや演奏者との入念な打ち合わせを経た結果、どの作品も個性にあふれ、クラシックでもポップスでもなく、子どもが頭の中にもつイメージがそのまま音として表れたものだった。まさに自己の発想力や表現力が養成されるプロジェクトであると感じた。

3. Future Bandにおける取組み

Future Bandはバービカンセンターにおけるクリエイティブ・ラーニング・プロジェクト（Creative Learning Project）の1つとして3年ほど前からスタートした。本プロジェクトは年齢が8歳～14歳程度の子どもたちによる創作アンサンブル活動で、リーダーはギルドホール音楽院リーダーシップ修士課程を修了したデッタ・ダンフォード（Detta Danford）氏とナターシャ・ジエラジンスキ（Natasha Zielazinski）氏が務めている⁷。

Future Bandは年4回のプロジェクトを実

施しており、夏休みやハーフタームと呼ばれる10日間ほどの中休みを使って、作品を発表している。子どもたちの参加期間はそれぞれ異なるが、平均して約2年は継続して参加していることが多いという。楽器をもともと習っている子どもが多いが、楽器経験がなくとも誰でも参加可能である。ただし、プロジェクトの性質上、人数制限があり、常に25～30名程度の人数を保っている。今回のプロジェクトのメンバーは24名の子どもで構成されていた。子どもたちはロンドン市内から通っており、ホームスクールの子どもいるそうだ。また今回は、ギルドホール音楽院のリーダーシップ・プログラムを専攻している院生5名とNYフィルのティーチング・アーティスト3名も加わった。Future Bandは、11月にダンス、美術等との合同作品を発表するため新しい作品づくりを始めたばかりで、視察時はフレーズ単位で曲を創作している段階であった。NYフィルとの合同プロジェクトの最終日に発表をおこなったが、断片的なものをつなげて発表する形となった。実施概要は表2のとおりである。

表2 Future Bandの実施概要

実施スケジュール	2月13日 午前10時から午後3時 2月14日 午前10時から午後3時半 2月15日 午前10時から午後4時 2月18日 作品発表	創作活動 創作活動 創作活動 リハーサルと本番
参加者	ギター3、ドラム2、キーボード2、ヴァイオリン5、チェロ3、フルート3、クラリネット1、トランペット3、ホルン2	
ファシリテーター	デッタ・ダンフォード氏とナターシャ・ジエラジンスキ氏 補助的な役割としてギルドホール音楽院のリーダーシップ修士課程の院生が参加。	
演奏者	子どもたちとファシリテーター達の合同アンサンブル	

毎回、始めの20分ほどは輪になってウォームアップをした。内容はボディ・パーカッションやコール＆レスポンスなどで、グループの一体感が生まれ、体と心をほぐす効果がある。ギルドホール音楽院の学生にファシリテーター役をさせる場面もあった。

ウォームアップ後、ダンフォード氏または

ジエラジンスキ氏から出される即興モチーフに子どもたちがアイデアを出し、断片的ではあるかいくつかの作品を創っていった。その中の1つには「Dreaming」というテーマに

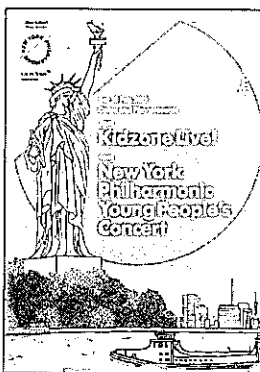
⁷ ダンフォード氏とジエラジンスキ氏は2011年8月の3大学合同夏期セミナーの講師を担当した。

よる歌づくりもあり、歌詞を自分達で考えメロディーも自分たちで考えた。どの作品も独創性があり、その場で即興的に演奏できることが特徴である。

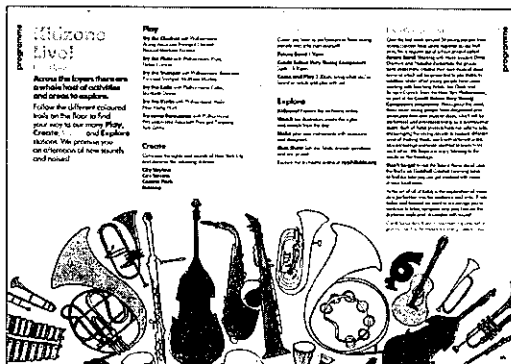
今回の視察で強く感じたことは、子どもたちが活発に発言したと同時に、他人の意見もしっかりと聞いていたことである。1つの作品を創っていく上で、1人1人が責任をもってディスカッションや練習に参加しており、作品発表までのプロセスがきちんと構築されていた。ダンフォード氏は、「演奏発表よりもディスカッションなどのプロセスが重要で、そこで自発性や協調性が養われる」と語っていた。Future Bandに参加することにより、音楽的な知識や演奏能力も向上することは言うまでもないが、それ以上に人間性が養われ、子どもの自己形成に大きな影響を与えていると感じた。

4. Kidzone Live! および Young People's Concert

2月18日の午後は、13時～16時にバー



ビカンセンターのロビーを全面的に使ってKidzone Live! を催し、16時からコンサートホールにてYoung People's Concertを鑑賞するという盛りだくさんものであっ



た。

Kidzone Live! は、「Play」「Create」「Explore」「Listen」の4つのカテゴリーに分けて、子どもたちにあらゆる音楽体験をしてもらおうという無料のイベントである。もともとはNYフィルが毎回Young People's Concertを開演する1時間前に会場ロビーでおこなっているものであるが、今回は合同プロジェクトとして拡大版という形でバービカンセンターのロビーで実施した。入口に看板に4つのカテゴリーが色分けされ、その色のテープが体験場所まで張られており、どこへ行けば何が体験できるかが子どもたちにも分かりやすい案内方式であった。

「Play」では楽器体験（ヴァイオリン、チェロ、フルート、クラリネット、トランペット、打楽器）ができ、子どもたちは実際に音を出したり、自由に打楽器を演奏したりするなどしていた。メインの指導はすべてNYフィルの団員が担当し、ギルドホール音楽院の学生が手伝いをしていた。

「Create」では、NYフィルのティーチング・アーティストであるデービット・ワレス氏が「セントラル・パーク」「地下鉄」といったキーワードを設定し、子どもたちと共に情景や物語を作りながら、それを音で表現していくという独自の試みをおこなっていた。例えば、「セントラル・パーク」ではセントラル・



Create での様子

パークに雪が降った時の様子を表現するというアイデアで、吹雪いている様子、積もった雪の上を歩く様子、そりすべりなどをストーリーにし、音で表すという創作をおこなった。最終的には子どもたちも打楽器で情景の表現に参加し、短時間での創作ワークショップのような形がつけられた。こちらにもアシスタントとして、ギルドホール音楽院のリーダーシップ修士の院生が入り、新しい手法を学びながらサポートをしていた。

「Explore」では、子どもたちが楽器作りに挑戦し、太鼓やギターに似たものなどを作っていた。素材は紙や筒、ヒモやゴムなど様々なものが自由に使えるよう、大量に用意されていた。スペースをかなり広くとっており、子どもたちはのびのびと楽しそうに参加していた。また、会場で体験した音や楽器を絵に描いて飾るコーナーや、コンピューターを使ってオーケストラについて知るコーナーなどもあった。

「Listen」では、Future Band の演奏とVYCの発表、最後に「Explore」で作った楽器を持って合奏するという3つのイベントをおこなった。ロビーの広いスペースにステージを組み、照明と音響も入った本格的なセッティングであった。はじめに演奏したFuture Bandは、ダンフォード氏とジェラジンスキ氏のリードにより、プロジェクト期間中に出来上がった素材を披露した。途中で観客を巻き込んだ即興演奏を取り入れるなど、Future Bandならではの発表であった。次にVYCでは7人の子どもたちが作曲したものが演奏されたが、演奏前に作曲した子どもが自分の言葉で曲のイメージや思いをプレゼンテーションした。また、VYCの司会のディーク氏とキャリック氏が、それぞれの子どもたちが工夫した部分や曲の聴きどころなどをうまく引き出しながら解説し、1人1人の才能

を大いに評価していたのが印象的だった。このような催しでは、司会者（ファシリテーター）によって聴衆の受け取り方が大きく変わることを強く実感した。

このようにKidzone Live!はさまざまな音楽体験が一度にできる大規模なイベントであったが、これはバービカンセンターのような大型施設であるからこそ実現するものであろう。また、NYフィルの団員やティーチング・アシスタントと、バービカンセンターのスタッフ達やギルドホール音楽院の院生が協力して創りあげているからこそ、これだけの充実した内容の企画が実現したと考えられる。

Kidzone Live!につづき、NYフィルのYoung People's Concertがおこなわれた。有料で、休憩無しの1時間程度のコンサートであった。ロンドンでのコンサートということもあったのか、テーマを「バーンスタインのニューヨーク」と設定し、バーンスタインやコーブランドの作品を紹介しながらクラシック、ジャズ、ブルースなどバラエティに富んだ音楽をプログラムに取り入れ、NYフィルの本拠地であるニューヨーク市についての話なども盛り込まれた。指揮は同楽団の音楽監督であるアラン・ギルバート、司会はバーンスタインの娘であるジェイミー・バーンスタインが担当した。また、バーンスタインの《交響曲第2番『不安の時代』》より「仮面舞踏会」が演奏された際のピアノ独奏には、イギリスの19歳の新星ピアニストを起用し、大いに盛り上がった。

子どもたちを含め大人たちにも馴染みのない曲が多かったが、司会者のトークやスクリーンにニューヨークやバーンスタインの画像を出すなどして、聴衆を飽きさせないような工夫がされていた。

5. 両プロジェクトの共通点と相違点

本稿で取り上げたFuture Band とVYCという2つの活動を通して、バービカンセンターのクリエイティブ・ラーニング部門（およびギルドホール音楽院）とNYフィルのティーチング・アシスタントのそれぞれの手法について、以下の共通点と相違点がみられた。

共通点としては、どちらの活動も子どもたちが主体となった創作活動であり、子どもたちにownership（自分／自分達の作品であるという認識）を感じさせることに主眼を置いていることが挙げられる。Future Bandでは、活動や作品自体はグループ全体としておこなうが、アイデアはすべて子どもたちからの発想であり、全員での十分なディスカッションによって創りあげられた。一方、VYCは個々による作曲であるため、ownershipは必然的にうまれているものの、音のイメージや演奏方法に至るまで作曲者の意図が反映されており、最後の発表まで作品とのかかわりが深いことが単なる作曲とは異なっていた。手法やアプローチの仕方はそれぞれ違うものの、子どもの自発性を引き出し、それを上手くまとめていくという点ではFuture Band とVYCとは同じ目的であるといえる。

相違点としては、作品発表する際に、Future Bandは即興的要素が強く、VYCは演奏をすべて楽譜どおりに演奏することが挙げられる。Future Bandは自分達で創った音楽を全て記憶（暗譜）して演奏し、一切楽譜に残さない。また、演奏の際には断片的なアイデアを積み上げ、その場でアレンジすることにより1つの作品としていくため、同じ演奏は2度とされることはない。一方、VYCは子どもが演奏を発表するのではないため（演奏に一部参加する場合もあるが）、必然的に演奏のために楽譜を準備する必要がでてく

る。また、できあがった作品はかなり個人的なものとなるのがFuture Bandと大きく異なる。どちらの取組も子どもの可能性を引き出すことに卓越しているが、子どもの即興性や協調性を伸ばすという点においてFuture Bandの方が大きく貢献しており、VYCでは創造性においてより子どもの能力を伸ばしているように感じた。

6. おわりに

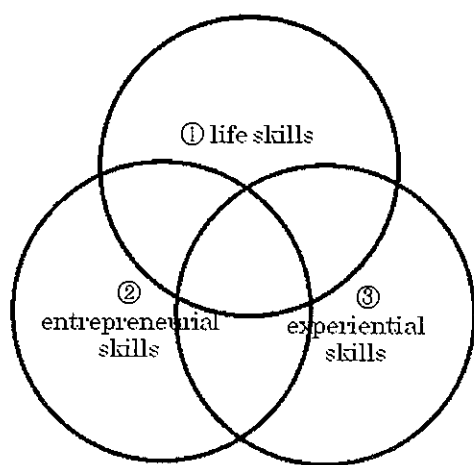
関係者の話によると、バービカンセンター／ギルドホール音楽院とNYフィル／ティーチング・アシスタントは、共同プロジェクトの継続に対して積極的に考えているようだ。今回は双方の活動をそれぞれ実施し、考え方や手法を知ることが主目的であったが、互いに認め合いながら、今後は共同で何らかの新しいプロジェクトが生まれることが期待される。

（赤木 舞）

音楽キャリア開発担当者ネットワーク NETMCDO 第17回総会 大学音楽アウトリーチ・ネットワーク会議 C'MON 参加報告

本年度の音楽キャリア開発担当者ネットワーク会議は、2012年1月11日と12日にマンハッタン音楽院で「芸術とお金 一敵か『敵味方』か」をテーマとして開催された。

冒頭で、これから音楽大学のキャリア教育の柱となるのは ①生きる力、②アントレプレナーシップ力、③経験力、であり、理想はこの三つの全部を含む教育プログラムであるという昨年の本会議でのマニフェストが再確認された。



キャリア教育の現状は各大学によって異なっており、たとえばニューイングランド音楽院の場合、①と③はアウトリーチで、②は学部必修科目で補っていることになる。アントレプレナーシップがもてはやされてさまざまな科目が立てられた結果、学内でコンセプトが整理されず混乱する状況が生じた例も報告されているため、学内での統一基準を確立するためにも、この三つの要素を示した図式を使うのが便利であると強調された。

音楽でお金を生み出す装置

この会議の特徴は、小グループでの討論の機会をふんだんに設け、参加者が積極的に発言し親しくなる雰囲気になっていることである。今回は、4～5人のグループで用意された小物（CD、箱、リボン、紙等）を使って「音楽でお金を生み出す装置」を作成・発表する時間があった。10分という限られた時間で各自が意見を出し、自然にリーダー役が生じてグループの考えを導きながら、最終的な案を決定する。各グループの代表が皆の前で個性的なプレゼンテーションを行った結果、「ひとつとして同じものは無い。音楽で仕事をしていく実際の人生でもそれは同じ！」という結論が導き出された。



音大卒業後についての調査研究

アメリカの大学で音楽を専攻した卒業生が、卒業後にどのような仕事をしているか、また大学で学んだことにどのくらい意義を感じているかといった広範なアンケート調査の結果の一部が、Future of Music Coalition; Strategic National Arts Alumni Project (SNAAP)のメンバーによって発表された。「卒業後の仕事は何かしらの形で教育と関係していることが多い」「音楽大学での教育に大多数が満足しているが、財務とビジネスの要素が足りない」といった調査結果が明らかになった。

起業での成功例と演奏での成功例

どちらも、実例となる3人のゲストを迎えて、彼らが音楽大学で受けた教育がその後のキャリア展開にどう生かされたかについて語った後、質疑応答があった。このセッションにはマンハッタン音楽院の学生も10名ほど参加して積極的に発言し、「コンクールで優勝しカーネギーホールで演奏するのが成功」という型にはまった考え方を大学案内等で繰り返し強調している音楽大学の側こそ考え方を変えるべきだ、という厳しい意見も出た。

本年度の大学音楽アウトリーチ・ネットワーク会議は、2012年1月13日にジュリアード音楽院で開催された。今年の参加者は13名で、そのうち会場校のジュリアードから4名、ニューイングランド音楽院から2名、その他は7校（マンハッタン音楽院、ボストン音楽院、ボストン大学、カーティス音楽院、ノースカロライナ大学、コルバーン音楽院、東京音楽大学）で、多くは東海岸地域の学校であった。

午前中に各大学の現況を報告し、東京音大から3大学連携の1年間の歩みを報告したのち、「未来のティーチング・アーティストを訓練する」というテーマで、アウトリーチに出る学生の教育について小グループに分かれ、各大学の現状を伝えながら討論した。

多くの大学では、アウトリーチ部門のスタッフが、アウトリーチに出る前のドレスリハーサルをチェックし、MC台本の内容にも目を通して問題を指摘するという個別対応をとっており、アウトリーチに送るための準備教育が体系化されているわけではない。ダンスや演劇の専攻がある大学では領域横断的なアウトリーチの試みも始めている。討論の結果、今後以下の点を目標とすることで合意した。

- ・アウトリーチのための教育に用いる教材の共有を目指す。(Booth、Wallaceの著書の他、子ども遊びに関する本や絵本、各大学作成のハンドブック等、良質なコンサートの実例をyoutubeで共有する、C'MONのHPを作る)
- ・public speaking（人前での話し方）やgroup dynamics（チームワーク）の指導を含める
- ・卒業生がメンターになれるシステムを構築する
- ・実際にアウトリーチを体験した学生からのフィードバックを講座内容に生かす
- ・キャリア開発部門との協働を積極的に図る

また今後の課題として以下の点が挙げられた。

- ・危険な地域へのアウトリーチ(アウトリーチ先で発砲事件があった)
- ・外国人学生（英語力）の問題（MCや子どもとの交流がうまくいかない）
- ・アウトリーチを有料にするかどうか
- ・アウトリーチ現場に学内関係者および相手先責任者が出席することの重要性

在学中のアウトリーチ参加が、卒業後のキャリアについての意識を高めるきっかけともなることから、アウトリーチ部門とキャリア教育部門との連携が重視されるようになったことは注目に値する。大学の壁を超えた研修の場となる二つの会議では、討論の進め方やネットワーキングの方法の点で学ぶ点が多くあった。

（武石 みどり）

外部講師招聘研究会

日時：2011年7月11日（月）18:00-20:00

場所：青山学院大学 青山キャンパス

8号館3階W30Aファカルティルーム

講師：荻宿 俊文（青山学院大学 教授）

7月11日、第1回MC講座で講師として招聘した荻宿俊文青山学院大学教授を研究会講師とし、同氏が青山学院大学で行っているワークショップデザイナー育成プログラム（以下、WSD）等についての話を伺った。

WSDは、2008年度より文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム事業の委託を受け、青山学院大学、大阪大学、鳥取大学の共同事業としてスタートした、ワークショップ（参加体験型活動プログラム）の企画・運営専門家養成プログラムである。委託終了後の現在も独立採算制をとり、プログラムの開講を継続している。社会人中心のプログラムということで、すでに文部科学省と提携し履修証明書発行を行っているが、今後は厚生労働省の給付金が取れるようにしていきたいとのことだ。

120時間にわたるカリキュラムでは、学習科学、芸術学、社会学をベースとした基礎理論科目をe-learning形式で行い、それ以外の見学を中心とした研修、自分たちでプログラム企画・実施を行う演習や実習は対面形式で行うようになっている。ワークショップは①演劇系、②町おこしなどの社会系、③ハンズオン活動が中心の博物館系、④教育系など、さまざまな分野にわかれるが、WSDはこれらを概括するとともに、多様な学びのスタイルを何度も体験するスパイラル型学習を行うことで、場づくりの専門家として、ヒューマンネットワークのキーパーソンとして、総合的なスキル獲得を可能としている。最近では

理論と実践がどうかかわるのかを明確にしたという受講生が多くでてきていることから、今後カリキュラム内容をブラッシュアップしていく予定だという。

あくまで大学で提供するプログラムであることから、質の確保を重要視するとともに、大学のミッションの1つである社会還元に結び付ける必要があるとの理解の上に同プログラムは成り立っている。そのため単に人材育成を行うのみならず、その後どうしていくかということも見据えたインフラ整備にも力を入れており、NPO法人ワークショップデザイナー推進機構の運営や一般社団法人としてのワークショップ大学コンソーシアムの立ち上げを行っている。前者のNPOはすでにWSD修了生が中心に運営を行っており、後者のコンソーシアムはまだ構想段階とのことだが、質の担保をネットワーク化することを重点に、WSDがすでに構築済みのe-learningカリキュラム授業の提供や講師派遣をプログラムとして考えているとのことだ。

青山学院大学では3つの層に分けてワークショップ研究に関わっている。一番下の層として基礎研究、真ん中の層に大学院で行う学習科学や組織学習といった学際研究、そして一番上にWSDが存在する。基礎研究ではワークショップの調査・評価方法の確立を目指し、特に音楽家としては、仲道郁代、田村緑、中川賢一等アーティストと共同研究を行っているが、同時にiPad用ワークショップ分析ソフトウェア開発などを行っている。この基礎研究の結果は直接学際研究及びWSDに還元されることから、3つの階層を持ち、自由に行き来することができることは、同校の強みとなっている。

これからの社会変化にともない、働くこと

が変わっていく時代において、どの仕事でも重要とされる「人と人を結び、場づくりができる」すなわちワークショップを実施できる人材はより必要とされる。自身の仕事とワークショップデザイナー、2足のわらじで仕事ができるようになることが望まれていくようになるだろうと荻宿氏は語った。その流れの中で、今後、本プロジェクトは自分たちの持つ「音楽」というツールに対する再解釈を行いながら、それを活用したワークショップや教育プログラムに関する理論構築をすることが重要ではないかとのアドバイスをいただいた。ネットワークを共有しながら、音楽の力や音楽そのもののあり方をもう一度考察し、定義づけをしていくことが必要との理解にいたる会となった。

(小島 レイリ)

国内アート・ワークショップ調査報告 ―音楽ワークショップ展開への出発点―

1. 音楽ワークショップの現況

音楽コミュニケーション・リーダーの活躍する場として、音楽をともなう種々のワークショップは大きな可能性を秘めている。実際に、文部科学省では、国際社会を生き抜く異文化コミュニケーション能力、世代間コミュニケーションの問題を克服する能力、そして、楽しい学校生活を送るための人間関係を形成していく能力等の多様なコミュニケーション能力を子どもたちが身に着けるための施策として、平成22年度より芸術を通じたコミュニケーション教育を推進し、その一環として学校へ芸術家を派遣する事業を開始した。これは、特にコミュニケーション能力の育成を目的として、芸術家等による表現手法を用いた計画的・継続的なワークショップ等の指導を実施するものである。しかし、平成23年度の実施内容を見てみると、「次代を担う芸術表現体験事業」として採択された学校申請分83件のうち、音楽はわずか5件であり、大部分が演劇ワークショップとなっている。

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/commu/1289958.htm)この背景には、演劇の分野ではすでに20世紀前半からワークショップが展開され、日本でも1970年代以降に様々な演劇ワークショップが行われてきたという状況がある。対して音楽の分野においては、未だに演奏家と聴衆が分かれた位置で向き合う「コンサート」が主流であり、音楽ワークショップの内容や手法については、個々にワークショップに関わり始めたアーティストが手探りで模索している状態でしかない。したがって音楽コミュニケーション・リーダーの育成には、まず音楽をともなうワークショップとは何か、どのような種類や特徴が

あり、またそこで何が求められているのかについて、実態に基づき基本的な知識を整理して出発点とする必要がある。

2. ワークショップの特性と音楽活動の分類

2.1 ワークショップの特性

上記コミュニケーション教育の推進に関わる青山学院大学教授刈宿俊文は、学習科学の立場からワークショップの定義＜特性＞として、**協働性**（協働する場面がある）、**即興性**（即興的な場面がある）、**身体性**（身体を動かす場面がある）、および**自己原因性**（一人で語ったり、自分の考えで決めたりする場面がある）の4点を挙げている（2011年5月18日 3大学共通科目ミュージック・コミュニケーション講座第1回）。ワークショップと名づけられているものは多々あるが、実際にこの4つの視点に注目して分類してみると、実はいろいろな内容のものが混在していることが明らかとなる。

2.2 音楽活動の分類

筆者は今年度、表1に挙げた各種ワークショップやイベントを見学し、上記の4視点、および指導者と参加者との関係性に注目して、音楽に関わる活動を表2のようにA～Gの7種類に分類した。

音楽大学で教授されているクラシック音楽のコンサートは、伝統的なコンサート（A）として分類される。舞台と客席がはっきり区別され、客席の照明が落とされて演奏が始まる際には紹介や解説が入らず、音楽のみが演奏される。また拍手のタイミングや静粛に聴く態度、演奏者と聴衆の服装に関しても暗黙の了解がある。聴衆は音楽作品や演奏の価

値を理解・評価できる能力を有することが期待されているが、それについての説明はプログラムに書かれた情報のみであるため、このタイプのコンサートに慣れていない人にとっては堅苦しく難しい印象が大きい。最近ではクラシック音楽にもっと親しんでもらうために、解説つきコンサート（B: いわゆる「鑑賞教室」）や、参加者が双方向的なやりとりや積極的な関わりをするインタラクティブ・コンサート（C）が工夫されるようになった。舞台上の演奏家と客席の聴衆との位置関係はAと同様であるが、作品や演奏の特徴についての説明を加え、特にインタラクティブ・コンサートにおいては作品に特徴的なリズムを手で打ち旋律を歌ってみる**身体性**が加わることによって、聴衆が能動的に音楽と関わる機会を与える。この方法はニューヨークフィルのティーチングアーティストとして教育を受けた演奏者たちによって展開されており、ニューヨーク周辺の小学校を中心に、欠落した音楽教科に代わる音楽教育の方法として実践されている。しかし、究極的には演奏家の演奏を聴き作品を理解することを目的としている点では、インタラクティブ・コンサートも伝統的コンサート（A）と類似している。

これに対して、学習型ワークショップ（D）では参加者が音楽的能力を身に着けることを目指すという点で目標設定が異なり、より能動的な参加が可能となる。参加者が指導者の指示に従ってメンバーとともに練習を重ねるという**協働性・身体性**を伴う音楽活動が、日常的なしつけや人間関係を構築する場としても機能する。

リトミック（E）は、体の動きと音楽との深い関連性に注目する音楽教育の方法であり、より高い音楽性を目指す学習者や子どもの指導に用いられている。音楽を感じながら自由に体を使って表現するという点で、**身体**

性のみならず**即興性**や**自己原因性**を具えた活動であり、グループで創作する場合には**協働性**の要素も加わる。

前述のコミュニケーション教育で導入を図っているワークショップは、体験型ワークショップ（F）として分類した。ここでは音楽はコミュニケーションのためのツールとして位置づけられ、ファシリテーターが参加者の心を開き、アイデアや感受性を引き出すことによって自由な創作や演奏へと導く役割を果たす。つまり高い芸術性の追求よりも、先ずはコミュニケーションを生み出し広げていくことの方が優先されているのである。その活動内容には**協働性・即興性・身体性・自己原因性**の4要素が含まれている。こうしたワークショップは、子どものみならず、障がい者や病人をも対象にしている点で、音楽療法（G）と重なる部分がある。

この分類に従って今年度見学したイベントを概観すると、ワークショップと名づけられているものの中にもインタラクティブ・コンサート（C）、学習型ワークショップ（D）、体験型ワークショップ（F）が混在していることがわかった。

3. 音楽アーティストに求められるものの変化

表3は、表2で挙げた音楽活動を、そこで重視される特性、場所や人間関係等と関連づけて図示したものである。表の上から下に行くに従って「作品中心」から「コミュニケーション中心」となり、**協働性・即興性・身体性・自己原因性**の要素が増大する。

これまで音楽大学における教育は伝統的コンサート（A）のできる人材養成を目指し、そのために何よりも優れた演奏能力を追求してきた。そのような演奏家を目指す者にとっての想定守備範囲はA～Cまでであり、学習型ワークショップ（D）やリトミック（E）

の指導は音楽教員や音楽指導者がやる仕事、音楽療法（G）は音楽療法士がやる仕事という固定観念があった。また、従来の考え方では、「コンサートホールで演奏される音楽は芸術性が高い」「学校で教えるのは教育用の音楽」「福祉施設や医療現場で用いられる音楽に芸術性を求めるのは無理」という具合に、コンサートホールから離れば離れるほど芸術的レベルが低下するという固定観念があった。

しかし、社会のあり方が変化している中で、社会が音楽に求める内容として体験型ワークショップ（F）の比重が急速に増している。また、体験型ワークショップだからといって一概に芸術性が低いという考え方も通用しない。特に福祉の現場では、障がい者の表現能力を引き出すこと、障がい者と健常者がともにアートを楽しむことが演劇・舞踊・美術分野を先頭に展開されており、障がい者の感性にアーティストの側が新鮮な感銘を受けるという事例も報告されている。また前述の「学校へ芸術家を派遣する事業」で目指していることは、「先生と生徒」という固定的な人間関係の下に知的能力を主たる尺度として日常生活が行われている学校という場に、アートという異なる尺度を持ち込み、人間を測る尺度は多様であり、一人ひとりそれぞれのよさがあり、一人ひとりが違っていることに意味があることを子どもたちが悟る機会を提供することである。すなわち社会の変化とともに、演奏家がコンサートホールのみではなく、学校や福祉の現場でも活動することが大きく期待されているのである。しかしその際、コンサートホールでの演奏のみを念頭に置いて教育を受けてきたアーティストは、それ以外の場で求められている役割や自分が登場する意味がコンサートホールとは違っていることをよく認識しなければならない。演劇・舞踊・

美術分野ではすでにワークショップがかなり普及し、多くのワークショップ・リーダーが多様な試みを行っているのに対して、音楽分野では、まずワークショップとは何かを明確に認識し、そこに求められている人材の資質と知識・技量を明示していくことが不可欠であると考ええる。

4. 体験型ワークショップを導くために

表3に示したとおり、体験型ワークショップは学校や文化施設、福祉施設等で行われるものであり、それぞれの場に日常的な人間関係や決まり事、習慣がある。アーティストの訪問を依頼する側がワークショップに何を求めているのか、相手のニーズを的確に捉え、対象者の特徴を理解しておくためにも、事前の入念な打ち合わせや下見が必要である。まずその段階から、コーディネーターにもアーティストにも高いコミュニケーション能力が必要とされる。

また、体験型ワークショップにおいては、「アーティストが舞台の上で演じるのを聴衆が黙って聴く」という関係ではなく、「アーティストが参加者と同じ目線で活動し、場合によっては参加者を補助する」ファシリテーター役となる。その関係は、アーティスト本人の意識の持ち方はもちろんのこと、ワークショップ時の場所の設定方法（椅子や楽器の並べ方）や開始の挨拶の仕方等にも大きく左右される。今年度見学した体験型ワークショップでは、フラットな空間に楽器を円形、または半円形に並べ、子どもたちが入ってきたら好きな楽器を思うままに演奏してよいという設定で子どもの自己原因性・即興性を開いていく開始方法が多く見られた。

体験型ワークショップは、音楽で言うならばダルクローズやオルフ等、20世紀初頭に現れた教育方法と関連づけて実践されてきてい

ることも注目に値する。ダルクローズとオルフに加えて、同時代のモンテッソーリ、パウハウス、シュタイナー等もそれぞれ独自の教育思想と方法を謳っているが、どれも子どもの自発性や感性を損なうことなく、知識のみならず五感を通して総合的な成長を図るという点では共通している。その考え方に立てば、単に教科として音楽の知識や技術を教えるというのではなく、言葉や体の動き、色や形と関連づけながら多様な表現方法のひとつとして音楽も用いていくという姿勢、すなわち音楽だけに特化せず総合的な人の営みと多様なアートに関心をもつという幅広い視野と包容力がワークショップ・リーダーに求められる。たとえば、音のイメージを言葉の表現や体の表現に結び付けていく際に、「詩や舞踊は門外漢でわからないから、自分のワークショップでは取り入れない」と消極的になるのではなく、自分なりに研究・工夫をしたり専門外のアーティストとコラボレーションをしたりするような積極性と柔軟性が、人の心を開き新しい側面を見出すきっかけとなるのである。今年度見学したイベントの中にも、音楽とダンス、アートと料理、音楽と造形等、自由な発想による企画が見られた。

体験型ワークショップの実例のいくつかは、「子どもが好きな楽器を思うままに演奏する」という設定で開始するため、一時的には音響のカオスとなり騒音が続いているだけという状態に見える。その中でアーティストは一人ひとりの子どもと向き合い、楽器での応答を試みながら個々の特徴をつかんでいく。子どもたちがオープンな状態となったところで、リズム模倣や自由な応答からアーティストとのやり取りを開始し、特定のリズム・パターンを覚えたり、旋律を作ったりする作業に移行する。その作業内容とスピードは、子どもの状態に応じ、またその時その場

の状況に合わせて調節することとなる。あくまでも子どもの心を開き、楽しく積極的に取り組めるようにするための配慮を優先するため、ワークショップを数回行っても必ずしも作品としての形が出来上がるわけではない。ワークショップのまとめとしての発表は、既存の楽曲の演奏という形ではなく、子どものアイデアを取り入れながら何種類かの旋律／リズム・パターンを組み合わせ、即興的要素を多分に含んだ創作／演奏となることが多い。子どもの多彩なアイデアを生かしながらひとつの大きな流れへとまとめていくために、ワークショップ・リーダーには多様な音楽要素を受け入れることのできる幅広い音楽的素養と、さまざまな要素を組み合わせ曲へと構成していく能力が必要となる。実際、体験型ワークショップを効果的に導いているアーティストの多くは、複数の楽器を操り、また必ずしもクラシック音楽の要素ではなく、むしろ民族音楽的な要素を中心においてワークショップを展開している。こうした多元的な音楽的素養と構成力は、これまで音楽大学で「ピアノ専攻」「ヴァイオリン専攻」と専攻を細分化して行ってきた専門教育では、ひとつの科目として指導されることはなかった。しかし今後有能な音楽コミュニケーション・リーダーを育成していくためには、このような新しい視点の導入が必要である。またこうした視点をもつことにより、これまで演奏専攻の学生には無関係なものとして捉えられてきた作曲、民族音楽、リトミック、音楽療法、音楽教育の授業科目や介護体験等が、新たな意味とつながりを有するものとなるであろう。

(武石 みどり)

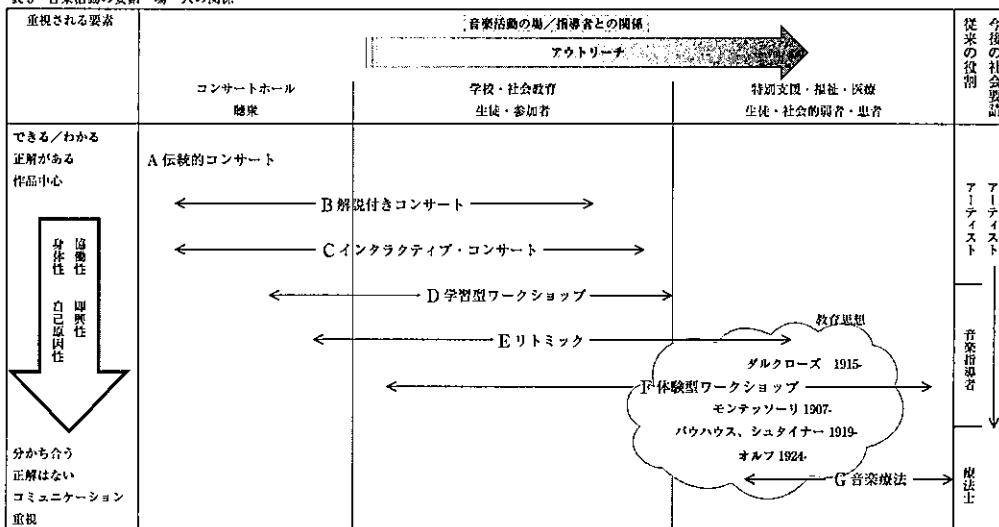
表1 2011年度に見学したワークショップ／イベント

月日	イベント（指導者）	対象	場所	活動種別
1 11/7/6 水	書道ワークショップ（群馬大学 茂木一司研究室）	特別支援学級（高校）	群馬大学教育学部	F
2 11/7/30 土	ダンス・ダイナミクス（ヴォルフガング・シュタンゲ）	障がい者と健常者	北とびあ	F
3 11/8/5 金	「カーネギー・キッズ」(NY フィル・ティーチングアーティスト)	3歳以上の子どもと保護者	サントリーホール	C
4 11/8/7 日	県民参加型音楽祭「グランシップ音楽の広場」	一般市民	グランシップ（静岡）	B/D
5 11/8/12 金	ダルクローズ・リトミック国際セミナー（日本ジャック＝ダルクローズ協会）	音楽関係者	東京音楽大学	E
6 11/8/14 日	サインマイム・ワークショップ（井崎哲也）	障がい者と健常者	北とびあ	F
7 11/8/19 金	音楽教育夏期セミナー「音と動きを遊ぶ」（日本オルフ音楽教育研究会）	音楽教育関係者	鶴見大学短期大学部5号館	F
8 11/8/27 土	前橋市美術館「アートスクール開校Ⅱ：ものづくりワークショップから学ぶ」（茂木一司）	一般市民、親子	前橋元氣プラザ21	F
9 11/9/4 日	親子で楽しむプチライブ（即興楽団ウジャ）	一般市民、親子	にしすがも創造舎	F
10 11/9/17 土	ミュージック&リズムズ TOKYO KIDS 2011 楽器を作ろう（鬼太鼓座、越智ブラザーズ）	小・中学生	台場区民センター	D
11 11/10/16 日	ミュージック&リズムズ TOKYO KIDS 2011 合奏しよう（鬼太鼓座、越智ブラザーズ、おおたか静流、他）	小・中学生	都庁前都民広場	D
12 11/10/22 土	ミュージック&リズムズ TOKYO KIDS 2011 リハーサル（鬼太鼓座、越智ブラザーズ、おおたか静流、他）	小・中学生	都庁前都民広場	D
13 11/11/7 月	学校訪問コンサート（休道郁代）	中学生吹奏楽・合唱部員	所沢市立狭山ヶ丘中学校	C?
14 11/11/19 土	ワークショップ「モーツァルト大解剖 ねんどでアナリーゼ」（田村緑）	小学校3～6年生とその保護者	成城ホール	C
15 12/1/20 金	学校訪問ワークショップ（港太尋）	特別支援学級	日野市立平山小学校	F
16 12/2/6 月	学校訪問ワークショップ（鈴木潤） 計3回（2/20, 2/27）	特別支援学級	武蔵村山市立雷塚小学校	F
17 12/2/15 水	事業企画ワークショップ こんにくく体操とオペラ入門	ホール関係者	国立オリンピック青少年センター	D
18 12/2/17 金	学校訪問ワークショップ（片岡祐介・北村成美）	盲特別支援学級（小～高）	横浜国立大学特別支援学校	F
19 12/2/21 火	学校訪問ワークショップ（木村ヒロ）	小学校6年生	豊島区立高校小学校	D
20 12/2/29 水	学校訪問ワークショップ（大石将紀）	小学校5年生	世田谷区立給田小学校	C?

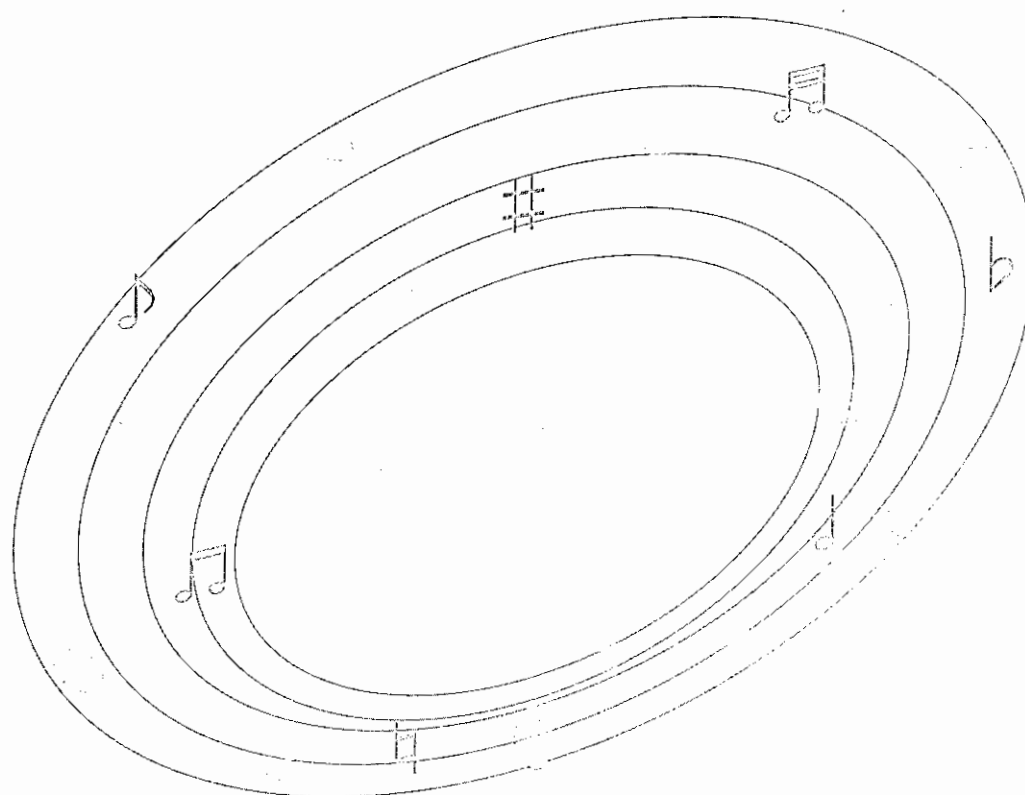
表2 音楽活動の種類と特徴

音楽活動の種類と特徴	目標・ねらい
A. 伝統的なコンサート 参加者：着席 舞台上の奏者が主役 解説はプログラムで読む 拍手のタイミング等暗黙の了解事項あり	音楽作品の高度な理解・芸術的感動
B. 解説付きコンサート 参加者：着席 舞台上の奏者が主役 寸劇・クイズ・映像等を伴う ショー、エンターテインメント的要素を含む 親しみのある曲を入れ、プログラムにストーリー性を持たせる等して、司会がうまくリードする 作品への理解を深める手段としてさまざまな情報・知識（≠体感）を提供	音楽作品に親しみをもつ 理解・感動への導入
C. インタラクティブ・コンサート 参加者：着席 時に応じて体を動かすことあり 作品の美的特徴をエンタリーポイントとして、音楽以外の要素をも含めたアクティビティを通して 作品を体感させ理解を深める 解釈や関心の多様性を認めるが、最終的にはプロの演奏を聴かせることを目的とする	音楽作品に親しみをもつ 理解・感動への導入
D. 学習型ワークショップ 参加者＝生徒 プラスバンドやジュニアオーケストラ 合唱や楽器の指導を通して、最終的にはコンサートでの演奏やオペラ上演を目指す エル・システムの場合は、日常的なしつけと人間関係構築（コミュニケーション）に重点を置く	演奏能力と音楽性の向上 皆で作り上げる喜びを体験
E. リトミック 参加者：生徒／より高い音楽性を求める者 音楽の諸要素を体で感ずることにより、音楽的な感受性と表現力を高める。	五感を通して音楽作品を体感し、よりよく理解する
F. 体験型ワークショップ 参加者：自ら体を動かして参加 指導者：ファシリテーター 参加者のアイデアや感受性を最大限に受け止め、自由な創作・演奏を行う 出来上がった作品の芸術性よりも、活動をとらえて得られる創作の喜び、新しい人間関係と人間理解に重点を置く	コミュニケーション・ツールとしての音楽 アーティストが「芸術性を見せる」のではなく、双方向的なコミュニケーションから参加者の心を開き、新しい側面を見出すことが重視される。ファシリテーターには、多様なものから芸術を感じ取る能力と音楽だけにとらわれない柔軟な多様性が求められる
G. 音楽療法 参加者：患者 指導者：音楽療法士 ストレス発散、症状の改善を目的として、精神・病理疾患の治療の一側面として音楽活動を行う 高齢者福祉施設、特別支援教育の場でも応用される	患者の症状の改善と新しい意欲の芽生えを目指す

表3 音楽活動の要素・場・人の関係



IV. 3大学連携事業学外評価員会議報告



3 大学連携事業学外評価員会議報告

学外の評価員によるプログラム全体の点検・評価を行い、その具体的改善を図るため、昨年度に引き続き年2回の3大学連携事業学外評価員会議を実施した。メンバー及び開催日程は以下の通り。

学外評価員（敬称略）：

久保田 慶一	国立音楽大学 教授
澤 恵理子	社団法人日本演奏連盟 事務局長
田村 孝子	静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」館長
原 武	サントリーホール 総支配人
善積 俊夫	社団法人日本クラシック音楽事業協会 常務理事

開催日程：

第3回 2011年10月7日（金）14:00-16:00

第4回 2012年2月26日（日）12:00-14:00

第3回は会場である東京音楽大学と、神戸女学院大学及び昭和音楽大学をインターネット・ビデオ会議システムでつなぎ、当日会場に行くことができない運営委員会メンバーも、3大学連携事業学外評価員会議に参加した。第4回は昭和音楽大学において、本プロジェクトのこれまでの取組成果を共有する場として開催したシンポジウム「音楽コミュニケーションの未来を語る」と併せて行い、評価員の方々にはシンポジウムにも参加頂いた。

【第3回 3大学連携事業学外評価員会議】

2011年10月7日（金）に実施された第3回3大学連携事業学外評価員会議においては、本年度の連携事業概要の説明の後、1.実際に公共ホール連携事業、講座やセミナーを参観して（または報告書等を見て）受けた印象、

意見、アドバイス、2.3大学連携事業についての評価やアドバイスについて、意見をうかがった。主なコメントは以下の通りである。

・ミュージック・コミュニケーション講座の内容が、公共ホール連携コンサートにどう実際に生かされるのかが見えづらいところがある。その点がもう少し明瞭に示されると、実際学生たちがどんな力をつけてきているのかが見えてくるのではないかと。

・ワークショップによって、コミュニケーション力、表現力、創造力を養うといっても、演劇は演劇、美術は美術、音楽は音楽といったように、それぞれが他分野であるという認識が今の日本の現実である。そのような意味では、音楽の方だけではなく、その他分野で先進的な試みをしている方に講座を担当していただくというのも1つの可能性として考えられる。

・東日本大震災の後、「音楽はいったい何の役に立つのか」と疑問に思われた方も随分いたようで、すごく心の葛藤があったという話をうかがっている。今回の震災は悲劇であるが、このことからやっぱり人と人とのきずなというのが一番大事だということを再認識し、そのひとつの手段として音楽を位置づけられるようなことを感じてもらえたらよい。夏期セミナー参加の小学生たちを見ていても、子ども同士意思の疎通が早く、ものすごく和気あいあいとやっている印象を受けたのと同時に、言葉がなくても、手拍子ひとつでも仲よくなったりすることができていたようだ。だから、この度の震災をひとつのきっかけにして、音楽をコミュニケーションをとる

ための何かの手段にかえていってもらえるとよいのではないか。

・芸術の専門家であること、教育の専門家であること、心理学の専門家であること、そして哲学を持っていること。これがワークショップのファシリテーターとしては最低限必要なことである。日本はまだ専門のきちんとした教育を受けている人が少ないのが一番の問題であり、いわゆる芸術が教育に果たす役割を理解し、そのためにシステム化された教育の枠組みの中で学ぶ必要がある。同時に科学的理論的な裏づけも必要である。

・今後は、新しい職業分野を作るといった方向に持っていけないといけない。多くの音楽大学がありたくさんの卒業生を輩出しているが、その後の行き場所がないという現状がある。一方で、世の中ではそれらの人たちの求めているジャンルができそうな兆しもある。そういうニーズに応えるべく、心理学や哲学の方、教育の方と連携して、総合的なカリキュラムを構築できるような形に持っていけるとよい。

・音楽は学校教育の中に入っているが、その必要性——単に音楽を教えるため、ベートーヴェンとはこういうものだとか知識として教えるためではない——が充分認識されていないのが一番問題である。全部の子どもが専門家になるわけではない。音楽を通じて何を教えるのかということをよく理解することが大切。3大学で始めたことは、きっかけとしてとてもすばらしいが、理想としては、音大生がただひたすら知識と技術を磨くだけでなく、音楽大学の中にこういうことが当たり前の授業のひとつ、または教養課程としてあるようになってもらいたい。

・一般大学の場合は、入学してから4年間で自分がこれから学校を出てからどういうふう生きていくかを模索すると思うが、音大生の場合は、入学した時点で既に自分は音楽を通じて生きていくと考えているケースが多い。しかし音楽大学を卒業しても演奏家になるのはごく一部である。なまじ演奏にこだわらず、もっと広い、音楽を使って生きていく道がいっぱいあるということを示してあげていくことが、特に昨今の就職難の中では、若い人たちにとっては大事なことではないか。

・夏期セミナーのワークショップは、小学生90人と大学生60人という人数で、全員で一緒に何かをやるとなると、ワークショップの適正人数という点では多すぎたと思うので、次の機会には配慮が必要だと思う。



【第4回 3大学連携事業学外評価員会議】

2012年2月26日(日)に実施された第4回3大学連携事業学外評価員会議においては、評価員メンバーに同日開催された取組成果報告シンポジウムにも参加いただき、2年間を通じたプロジェクトの全体的な活動成果についての評価と今後へのアドバイスを受けた。

・ミュージック・コミュニケーション講座で行われたワークショップ授業を見学した。授業開始時は、学生たちが動きのある活動をす

ることに抵抗があるようにみえたが、徐々にオープンになり、できるようになっていたのはすごくよかったと思う。このような経験を実践に生かすことが必要となってくるので、周辺地域のみならず、現在このような活動が必要とされている被災地4県への活動などを実施していくことも考えるべきではないか。

・このような試みは広がらないともったいないので、国内大学調査で明らかになった本プロジェクトと似たような試みをしている14大学と連携が取れるよう、工夫をしてもらいたい。そしてその輪を広げていってもらいたい。

・音楽という共通項を持つとはいえ、考え方が違い組織の形態も異なる3つの音楽大学が、外に見えている形でこうしたプロジェクトを行ったということはとても大きな意義があると思う。この2年半で得た経験や課題を踏まえ、これで終わりではなく今からがスタートという意識で、社会、地域、組織との連携を広げ、発展することでより大きな意味を持っていくだろう。

・国内連携を広げるためには、学校教育の中にアウトリーチやワークショップの活動、もしくは人材が必要ということを伝えていかななくてはいけない。子どもたちのみならず、できるだけ多くの先生方に参加してもらうことが重要。演劇に比べて音楽は年齢層が低くてもOKなジャンルであるからこそ、学校教育のなかにしっかりと位置づけをしてもらいたい。そうすることで文部科学省からの支援を受けて実施した活動が、次につながっていくのではないかな。

・教育効果測定調査結果などをみても、学生たちが着実に学んできていることは確か。だ

からこそ、アウトリーチやワークショップを行うことの意味を学生自身にもきちんと考えてもらいたい。子どもたちの生きる力を育むための活動であると同時に、自分たちがなぜ音楽家になったのかということをもう一度振り返る場であるということを理解することが必要である。

・アウトリーチやワークショップ活動を行うこと＝「仕事」という意識にならないようにしてもらいたい。海外のアーティストなどは、子どもに対してではなく、一人の人間、一人のアーティストとして真摯に向かい合っている。ひとつの音でインパクトを与えるような芸術性を活動の中で提供していくことが重要であり、アウトリーチやワークショップというものがそうあるべきだということを分かっている人材がこれらの活動を行うべきだろう。最終的には真剣に音楽を提供してきたかどうか問われるが、それと同時に音楽を通してのコミュニケーションというものが本当はどういうもので、何が大切なのかを理解していることが重要になってくる。

・演奏の質に対する世間の評価軸は年々厳しくなる傾向であるため、どんな活動をするにせよ、音楽のレベルは徹底的に上げていってほしい。

・コミュニケーションということでいえば、本来音楽が一番力を持っているはず。しかし演劇や舞踊に比べると、社会に対する働きかけが戦略的に非常に遅れているので、関係機関の協力のもと音楽大学が先導して、社会の動きをつくっていければよいのでは。

・広い視野のもとにやろうとしているのに、関わらず、結果的にフォーカスが小さく狭

まってくるような方向に流れるということは避けるべきである。そのためにも、日本国内のみならず世界を視野に置いて考えることが望まれる。世界各国の機関とうまく連携していくことが必要になるのではないかな。

・できるだけ他の芸術分野に触れさせる機会を作る必要があるのではないかな。演劇や舞踊など他ジャンルのワークショップのみならず、他の芸術そのものを知り、体験することが重要になっていると感じる。特に最近では音大生ですら演奏会に行くことも少なく、器楽専攻にいたってはオペラを見たことがないという学生も多いという。最終的には自分の音楽に返ってくるものになるので、意図的にそのような機会を作り、経験させることが望ましい。また、他芸術分野の学生との交流も必要となるだろう。

・特にマネジメントを勉強していきたいという人のためには、コミュニケーション力のひとつとしてネゴシエーション(交渉力)をしっかり勉強してもらいたい。海外の音楽事務所等との出演料交渉になると、相手のいいなりになる傾向がある。情報収集しながら、条件の折り合いをつけるのはマネジメントとして重要なことだが、教育機関ではまだ手つかずの部分なので、このようなスキル育成も導入していったほしい。

・今後は学生たちが、なぜ自分たちが学生の時代から外に出て演奏しなければいけないのか、ということ自分たちの中でしっかり理解し、消化することが重要になってくるだろう。まず社会をよく知ることで、その中で欠乏している部分を探し出し、そこに対して自分は何ができるのか、何をすべきなのかを考える、そのようなプロセスがあるといい

のではないかな。学生たちに使命感(ミッション)がないと、授業の枠から広がらないままになってしまう懸念が残る。

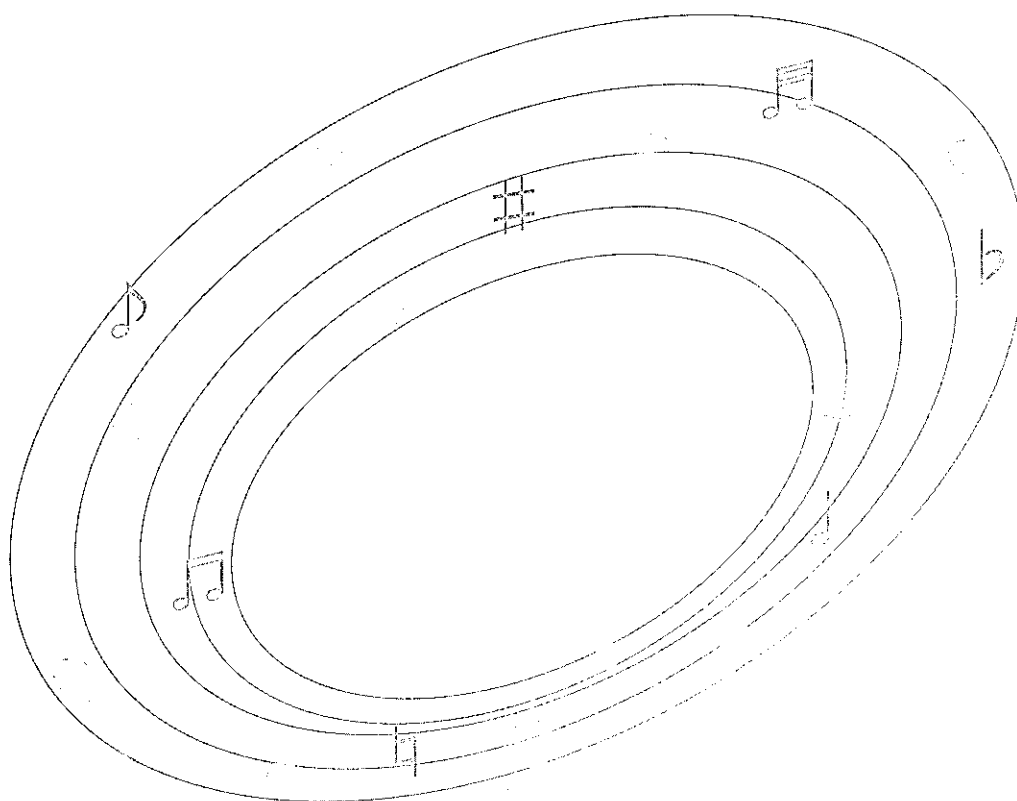


これらの意見を踏まえ、来年度以降は各大学内で本プロジェクトの位置づけをさらに明確にし、3大学連携をより確固たるものとすると同時に、他大学との連携を図っていきたいと考えている。ミュージック・コミュニケーション講座及び3大学合同夏期セミナーの継続的な実施に加えて、他芸術分野との交流も積極的に行い、研究活動や情報発信に努めてまいりたい。

以 上

V. 3大学連携シンポジウム

「音楽コミュニケーションの未来を語る」報告



「音楽コミュニケーションの未来を語る」実施報告

日 時：2012 年 2 月 26 日（日）14:00 - 17:00
 会 場：昭和音楽大学 C511 階段教室
 主 催：東京音楽大学・神戸女学院大学・昭和音楽大学
 後 援：社団法人 日本クラシック音楽事業協会
 社団法人 日本演奏連盟
 社団法人 日本オーケストラ連盟
 川崎市麻生区

プログラム

■ごあいさつ

- ・昭和音楽大学 学長
二見 修次
- ・文部科学省高等教育局大学振興課 大学改革推進室長
樋口 聡

■取組報告

- ・3大学連携事業の概要（布目 藍人：昭和音楽大学 特別研究員）
- ・教育効果測定について（佐藤 良子：昭和音楽大学 研究員）
- ・海外における先進的音楽教育・音楽活動に関する調査研究について（赤木 舞：昭和音楽大学 専任講師）
- ・日本の音楽系大学等における地域音楽活動に関する調査について（佐藤 良子：昭和音楽大学 研究員）
- ・公共ホールとの連携企画コンサート参加学生による報告（3大学学生）

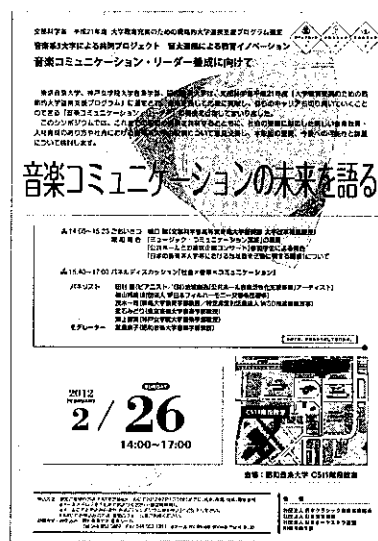
■ロビーでの「学生によるポスターセッション」

■パネルディスカッション「社会×音楽×コミュニケーション」

ゲスト 田村 緑 〔ピアニスト／（財）地域創造「公共ホール音楽活性化支援事業」アーティスト〕
 横山 邦雄 〔（財）新日本フィルハーモニー交響楽団 理事〕
 茂木 一司 〔群馬大学教育学部 教授／特定非営利活動法人 WSD 推進機構 理事〕
 パネリスト 武石 みどり 〔東京音楽大学音楽学部 教授〕
 津上 智実 〔神戸女学院大学音楽学部 教授〕
 総合司会 武濤 京子 〔昭和音楽大学音楽学部 教授〕

■来場者数

105 名
 （内訳）
 一般 52 名
 来賓、パネリスト 10 名
 3大学学生 18 名
 3大学関係者 25 名



チラシ

■ごあいさつ

【昭和音楽大学学長 二見修次】

ただ今ご紹介にあずかりました、昭和音楽大学学長の二見修次と申します。3大学共同プロジェクトのシンポジウムの開催にあたりまして、会場校の昭和音楽大学を代表してごあいさつ申し上げます。

本日の「音楽コミュニケーションの未来を語る」の開催に際しましては、ご多忙にもかかわらず、文部科学省高等教育局大学推進課 大学改革推進室長の樋口様にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。また、本日ご登壇下さるパネリストの皆様、ご助言賜りました評価委員の先生方、さらには当連携事業の推進にご努力下さった3大学の先生方に改めて御礼申し上げます。

本日は「音楽コミュニケーションの未来を語る」と題されておりますが、これから未来の社会を担っていく学生たち、とりわけ音楽大学の学生にとって「コミュニケーション能力」というのは大きな課題となっております。この連携プロジェクトでは、音楽大学の学生たちの「専門力」はもちろんのこと、「社会性」や「コミュニケーション能力」を備えた音楽コミュニケーション・リーダーを養成するために、様々な研究をしてまいりました。

本日のシンポジウムが実りあるものとなりますよう祈念いたしまして、ごあいさつとさせていただきます。

【文部科学省高等教育局大学推進課 大学改革推進室長 樋口聰】

ただ今ご紹介にあずかりました、文部科学省高等教育局大学推進課 大学改革推進室長の樋口と申します。私はこのプロジェクトの支援事業であります「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」の担当をしております。

本日はその関係からごあいさつさせていただきます。

現在、世の中は「物の豊かさ」から「心の豊かさ」にシフトしてきています。「より良いものを作る技術」というよりも、「全く新しいアイデア」「知恵」「イノベーション」が、今後の経済国際競争を勝ち抜いていくためにも一層重要となってまいります。この3大学連携のプロ

ジェクトにも「教育イノベーション」という言葉が入っておりますが、この「イノベーション」が機能するためには、日々の様々な情報の中から価値あるものを発見する力と、そして何よりも「感性」が非常に重要な役割を果たします。

本日のシンポジウムが、実りあるものとなり、そしてさらなる種をまかれていきますことをお祈りいたしまして、あいさつとさせていただきます。

■取組報告

3大学連携事業の取組内容について、昭和音楽大学所属研究員3名と、実践活動に参加した各大学の学生より報告があった。パワーポイントやビデオ映像を使い2年半の取組を振り返った。

・3大学連携事業の概要

【昭和音楽大学特別研究員 布目藍人】

この取組は、文部科学省の「平成21年度大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」の選定を受け、2009年の10月より始動いたしました。

人と人とのつながりが希薄化し、とりわけ若年層の「生きる力」と「社会性」の低下が指摘される現代社会にあって、従来の音楽系大学の教育は、選ばれた人々が専門技術を磨く場、つまり「レッスン室などの閉じた場にこもり、社会の動きとは連動しにくい傾向」にありました。もともと、各大学は文科省のGPの選定を受けた取組を開始しておりました。いずれも地域社会に根差した、社会性ある音楽人の育成に主眼を置いていた点で共通するものが多く、様々な場で情報を交換し合う中で、2008年11月に3大学が合同で「音楽の新しい学びフォーラム」を実施いたしました。それをとおして、「社会に開かれた学び」の必要性和教育効果を認識すると同時に、音楽業界や音楽教育に携わる関係者からは、「幅広い視野」を持った音楽人の養成に対する強い期待を感じました。

そういった背景を踏まえ、志を同じくする大学が連携し、3つの大学がそれぞれの特性を活かして・教職員の意識改革・学生の交流・産学連携教育を推進すべく、「3大学連携運営委員会」が組織され、共同の事業を立ち上げるに至りました。

3大学連携は、「芸術至上主義」の縛りを乗り越え、人と人を結ぶコミュニケーションとしての音楽の根源的な力の回復に目を向け、その力を地域で生かすことのできる人材、「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成を目指しております。この「音楽コミュニケーション・リーダー」という聞きなれない言葉ですが、これは「演奏技術、マネジメント・プロデュース能力など」の「専門力」に加え、「音楽のキャリア、音楽の持つ社会性の認識など」の「社会性」、そして「人の話を理解する／自分の言葉で語る」といった「コミュニケーション力」を備えた人材を意味します。

本プロジェクトの事業内容は、＜教育＞＜実践＞＜研究＞3つの柱で構成されています。まず、＜教育＞からご説明いたします。

3大学連携では、先ほども申し上げました通り、音楽系大学の学生が「専門力」のみならず「社会性」「コミュニケーション力」を磨き、自らの力で「人と人とを結ぶコミュニケーションとしての音楽の根源的な力」を地域社会や教育の場で活かすことができる豊かな感性とリーダーシップを育むことを目的として、音楽大学間では初の共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」を開設いたしました。「ミュージック・コミュニケーション講座」は、6コマを各大学からインターネット・ビデオ（IV）会議システムによって配信し、9コマは東京音楽大学における「合同夏期セミナー」の受講という形で実施しております。

まず、2010年度からの本格始動に先駆け、2009年の11月より、3本のトライアル講座を実施いたしました。本格始動した2010年度は、公共ホールや音楽事務所、NPO団体など音楽に関連する幅広い分野で活躍する講師を招き、コンサートホールで演奏するだけではない、「音楽家」と「社会」の多様な関わり方についての講座を実施しました。続く2011年度は、「コミュニケーション」をキーワードに、青山学院大学荻宿教授による理論的な講座や、3大学をIV会議システムで結んでの合同ワークショップなど、コミュニケーション力やリーダーシップ、柔軟な発想力を磨く講座ラインナップとなりました。

＜教育＞のもうひとつの柱として、合同夏期セミナーがあります。こちらは、8月の末に3日間ほど、各大学の受講生が東京音大に集まり、海外から招聘した講師から集中的に講義を受けるといったものです。初年度はニューヨークより、NYフィルのティーチング・アーティストを迎え、インタラクティブ・コンサートの作り方を学びました。さらに、3日間のハイライトとして目白小学校の4年生児童を迎えて、講師が「インタラクティブ・コンサート」を実践してくれました。

今年度は、ギルドホール音楽院よりショーン・グレゴリー先生をお招きして、児童たちのクリエイティビティを開発する「クリエイティブ・ラーニング」について3日間学び、またそれを通して学生自身のクリエイティビティやコミュニケーション能力を押し広げる講座となりました。

次は＜実践＞です。まず、2010年度に、神戸女学院大学に3大学の学生が集い、3大学合同コンサートを行いました。それぞれの大学の文化の違いがあり、開催にあたってはいろいろな困難が伴いましたが、学生たちがよく協働し合い、ご来場のお客様にもご満足頂けるコンサートとなりました。

続いて、今年度は、3大学合同コンサートでの経験を活かし、各大学が地方の公共ホールとの連携事業を行いました。これにつきましては、このあと学生による報告やポスターセッションがございますので、詳細は割愛いたします。

最後に、＜研究＞です。3大学連携にとっての研究活動とは、社会に開かれた音楽教育と人材育成のプログラムに関する国内外の先進的事例の教材収集、事例研究であり、具体的には、「3大学共通科目『ミュージック・コミュニケーション講座』の効果測定」や「アメリカやイギリスの音楽大学など、海外の先進的な教育活動」を調査、研究いたしました。また、地域創造フェスのおんかつシンポジウムや、京都でのFDフォーラムなどで、これら教育や研究についてのアウトプットの機会を持って参りました。それでは続いて、佐藤から「教育効果測定」についてご報告申し上げます。

・教育効果測定について

【昭和音楽大学研究員 佐藤良子】

本項目については、「平成23年度『ミュージック・コミュニケーション講座』教育効果測定」(『平成23年度活動報告書』8頁～20頁)および、「新規開設科目『ミュージック・コミュニケーション講座』教育効果測定」(『平成22年度活動報告書』8～17頁)を参照。

・海外における先進的音楽教育・音楽活動に関する調査研究について

【昭和音楽大学専任講師 赤木舞】

3大学連携事業の取組期間である2009年10月から今年度末にかけて、海外の音楽大学や音楽関連組織の教育活動の視察・インタビューならびに調査研究をおこなってまいりました。

対象は、主にアメリカとイギリスの音楽大学のキャリア教育や、地域での音楽活動が中心となっており、アメリカでは、ジュリアード音楽院、イーストマン音楽学校、マンハッタン音楽院、ニューイングランド音楽院、カーチス音楽院、コルバーン音楽院、ユースオーケストラ・ロサンゼルス、イギリスはギルドホール音楽演劇学校、バービカンセンターを対象としました。

また、アメリカで開催されたネットワーク会議などにも積極的に参加し、私達の取組についての発表を毎年おこなうとともに、全米や海外から集まったアウトリーチ教育の担当者やキャリア教育担当者たちと情報交換をおこなってまいりました(『平成21年度研究報告書』11～17頁、および『平成22年度活動報告書』67～69頁を参照)。海外で得た情報は、月1回程度実施している3大学の研究会において共有し、我々の取組に活かしております。

今回は時間の都合上、調査報告としてアメリカの音楽大学2校と、イギリスの音楽大学1校について簡単にご紹介します。

まず、アメリカの音楽大学におけるキャリア教育の流れについて整理いたします。

1980年代から音楽大学の学生による地域での演奏活動が開始し、その後、90年代後半から、主要な(特にトップレベルの)音楽大学がいわゆるアウトリーチ活動やキャリア育成関連の講座のカリキュラム化に着手し始めました。その理由としては、「大学としての存在意義や社会責任への対応」、「学校教育における芸術教育補

完プログラムに対する需要の高まり」、「学生の就職に関する社会環境の変化」が挙げられます。つまり、音楽大学が地域コミュニティの一員として存在することによる社会的責任が強くなり、大学としてその地域の理解と協力を得るために地域との関わりを深め、寄付等のサポートに対して還元することが強く求められ、結果的に大学による組織的な対応へと発展したと、捉えられます。

ではここで、アメリカのジュリアード音楽院の例をご紹介します。ジュリアード音楽院は全米で最も早くアウトリーチプログラムを開始しました。選択科目として「Arts in Education」と「Insights into Learning」を開講しており、これらの科目は、ティーチング・アーティストになるためのテクニックや考え方、プレゼンテーションの手法に関する講義や小学校などの授業の運営方法を含んだ音楽の教授法、実践活動が含まれ、演奏活動と教育活動を組み合わせた活動ができる人材育成を目指しています。

また、ジュリアードではアウトリーチ関連のフェローシップ(スカラシップ制度)を設けています。代表的なものを挙げますと、一番有名なものが「Morse Fellowship」で、提携先のNY市立学校で週2回の授業を通年でおこない、カリキュラムはすべて学生が作成します。別のフェローシップである、「The Gluck Community Service Fellowship」は、単発のアウトリーチ活動を行うもので、病院、ホスピス、ホームレスシェルター等の施設で年間450回以上実施しています。

このように、ジュリアードでは実践的な教育活動が行われており、演奏能力の高い学生が選抜され、地域での音楽活動に深くかかわっています。

さて、次にイーストマン音楽学校についてご紹介します。この大学はキャリア教育のシステム化、組織化が進んでいることが特徴です。1985年からアウトリーチ活動を開始し、その後、「Music For All」という科目名で室内楽の授業と連動させ、必修科目としてカリキュラム化されました。1996年にはキャリア教育の総合的なプログラムであるArts Leadership Programがスタートしました。Arts Leadership Program

は、全学の中で毎年15名のみ選抜し、キャリア育成に関する様々な科目を2年間履修するプログラムで、アントレプレナーシップ、リーダーシップ、パフォーマンスなどを柱に置いています。このプログラムを修了した学生はCertificate（修了証）を取得することができ、卒業後のキャリアにおいて一定のステータスとなっているそうです。さらに2001年にキャリア教育の専門組織であるInstitute for Music Leadershipを設立しました。このような組織は全米でも初めてで、Arts Leadership Programの授業運営に加え、卒業生のサポート、オーディション情報、採用情報の提供をするなど、キャリア教育を幅広い側面からサポートする組織として多くのプロジェクトを展開しています。

このように2つの大学についてご紹介しましたが、アメリカにおける音楽大学のキャリア教育の特徴は次の2点と考えられます。1つ目には多岐にわたるキャリア育成科目が、複数年の段階的なカリキュラムとして組まれていること、次に理論的なものから実践的なレベルまでバランスよく多岐にわたっていること、キャリア関連科目の運営組織を構築し全学的な取り組みであること、キャリア教育のための単独の奨学金の給付システムがあり、学生の学習意欲の促進、学外へのアピール（大学への寄付獲得）にもつながっていること、最後に地域と連携した教育システムを構築していることです。

次に、イギリスのギルドホール音楽院についてご紹介いたします。ギルドホール音楽院は、1980年からコミュニティ活動を開始し、その後プロフェッショナル・ディベロプメント学科を立ち上げました。さらにヨーロッパ最大の芸術機関であるバービカンセンターと提携を結び、2009年に共同でCreative Learning部門を立ち上げたことで、従来のコミュニティ活動に加え、ジャンル横断的なプロジェクトを展開するようになりました。プロフェッショナル・ディベロプメント学科には、学部3つの科目が設置されており、修士課程では「リーダーシップ修士」の学位が取得できます。この学科の特徴として、学部1年生より自分が音楽家としてどうあるべきかを学び、考え、実践することができるシステムが構築されていること、卒業生の全員がポートフォリオを持ちキャリアをスター

トできること、大学院では在籍中を通してワークショップ等の手法を経験でき、単に一音楽家としての能力だけでなく、リーダーシップを養成していることが挙げられます（『平成23年度活動報告書』68頁～70頁）。

ざっと代表的な事例をご紹介しましたが、全体的にアメリカでもイギリスでも共通して「いわゆるソリスト（演奏家）養成の教育が大前提ではあるものの、それに加え、社会のニーズにあった、社会とつながりのある音楽活動ができる人材の育成へ広がりが見られる」ということがいえます。

最後に1点ご報告ですが、先日、イギリスのバービカンセンターとNYフィルが初めて合同でプロジェクトを実施するという機会があり、私も視察に行っていました。互いの手法の違いや共通点を見出しながら、協力して取り組む姿勢は大変印象的でした（『平成23年度活動報告書』71頁～76頁）。今後も協働プロジェクトを続けるそうなので、これからの動きに注目しながら、研究成果を日本の音楽大学の教育に活かしていきたいと考えております。

・日本の音楽系大学等における地域音楽活動に関する調査について

【昭和音楽大学研究員 佐藤良子】

本項目については、『平成23年度 日本の音楽系大学等における地域音楽活動に関する調査』報告（『平成23年度活動報告書』59頁～67頁）を参照。

・公共ホールとの提携企画コンサート参加学生による報告

各大学が公共ホールと提携して行った事業について、実際に企画・制作に携わった各校2名の代表学生が登壇して報告を行った。いずれも大学の特色が良く表れた報告で、来場者アンケートにも学生たちの健闘をたたえる声が多く見られた。

（公演概要等の詳細は、本報告書「公共ホール共同事業実施報告」の42頁～55頁参照）

【昭和音楽大学 石田美弓、中村百合絵】

2011年7月2日～3日にかけて行われた、富士山河口湖音楽祭2011プレイベントについてご報告します。富士山河口湖音楽祭は、指揮者佐渡裕氏監修のもと2002年8月より行われ、2011年で10回目の開催となりました。この音楽祭はアーティストや地元のボランティアなどによって実行委員会が組織されています。今回はそのプレイベントとして、4か所でコンサートを行いました。

当日の運営では、ボランティアスタッフの方と一緒にする作業が多かったのですが、もう少しうまく連携をとれていたなら、作業がもっとスムーズにいったのではないかというのが反省点です。また、大学を離れ違った環境で演奏会の制作・運営を行うことはとても新鮮でした。全体的にハードなスケジュールでしたが、出演者、スタッフ共に良い経験となったと思います。

続きまして、9月9日～10日にかけて行われました、新潟県魚沼市小出郷文化会館との共同企画、ショウワ・プラス・クインテット訪問コンサートについてご報告いたします。地域に密着した芸術活動を積極的に行っている小出郷文化会館が15周年を迎えるにあたって、昭和音楽大学との共同企画を実施しました。魚沼市の子どもたちに音楽の楽しさ、楽器の面白さを伝えることを目的とした、アウトリーチ企画を3か所にて行いました。出演者は昭和音楽大学の学生で結成された金管五重奏、ショウワ・プラス・クインテットです。9月9日は午前と午後に分けて2つの小学校へ訪問コンサートを行いました。各楽器にスポットを当てた楽曲をプログラムに入れて、紹介を交えながらコンサートを行いました。また、最後には子どもたちが好きな楽器の近くに移動してもらって演奏を聴いてもらいました。そして、最終日に行いました小出つくしクラブ（学童保育）訪問コンサートでは、対象年齢が小学校の低学年以下だったため、うるさくなってしまうかと思いましたが、出演者に積極的に質問する子どもがいたため、コンサートがとても盛り上がりました。楽器紹介では、小学校の時とは違った「マウスピース体験」を行いました。楽しそうに子どもたちと出演者が楽器を通してコミュニケーションをとっており、保育園に通っている児童たちも楽しんでいました。

地元新聞の取材も入り、合計4つの新聞に掲

載されましたが、相手の捉え方を考えてのプレゼンテーションはとても難しいと感じました。はじめてのアウトリーチの企画で新潟県魚沼市という自分にはなじみのない場所でのどんなことをしたら子どもたちが喜んでくれるのか考えるのがとても大変でした。コンサート中に子どもたちが自然に音楽を楽しむさまを見て、企画をしてよかったと感じました。



昭和音楽大学の学生による発表

【東京音楽大学 大沢めぐみ、金田萌子】

これから東京音楽大学の報告を行います。私たちの大学では2つのチームに分かれ、計8公演を行いました。一つはクラシック初心者、全年齢向けのオール・モーツァルト・プログラム、「となりに、天才モーツァルト」です。こちらはクラシック音楽にあまりなじみのない人たちを対象にしたコンサートで、ナビゲーターがモーツァルトをコミカルに演じ、音楽の天才モーツァルトの人間らしい一面に親しみを感じてもらえるように工夫いたしました。もう一つは、サン＝サーンスの《動物の謝肉祭》をメインプログラムとした未就学児向けの参加型コンサート、「どうぶつたちのおんがくかい」です。《動物の謝肉祭》にストーリーをつけ、MCが観客と会話を交えながら進行し、体を動かしたり声を出すといった、リトミックやクイズなどの要素を取り入れました。クラシック音楽は静かに座って聞く敷居が高いものというイメージを払しょくさせることが狙いです。

この2つのプログラムを作成・制作するにあたり、特に重視した点は、お客様とのコミュニケーションです。前述のコンセプトを持って台本作成、演出、プログラム作成を行いました。公演によって聴衆の反応に大きな違いがありました。

公演に際して起きた観客とのコミュニケーション上の問題を打開するために、公演ごとに、台本、演出などの変更を重ねて行いました。しかし、準備した数々の打開策がなかなか効果を表さず、何が問題なのかチームで話し合った結果、制作側と演奏者の共通理解に改善点があるという結論に至りました。はじめに企画を考えたのは制作側のスタッフでしたが、実際の公演でお客様とのコミュニケーションの多くを担うのは出演者だからです。出演者とより深く理解し合うために、これまでは簡潔にしか伝えられていなかった演出意図や変更点を口頭でしっかりと説明することに加え、練習の中で実演や意見交換を交えながら作っていくスタイルに変えました。更にお辞儀の仕方や演奏中の顔の向け方、立ち位置といった細かい点にも注意し、改善して言った結果、以前の公演よりも、お客様とのコミュニケーションを感じることができました。出演者への企画意図の丁寧な説明、時間を変えた意見交換や試行錯誤は、制作側と出演者の心の距離を縮め、さらにはステージと客席の物理的な距離をも縮めます。それこそが様々なホール、客層や反応に対して柔軟に対応するためのキーポイントではないでしょうか。今後の制作では、この点に関して入念に工夫し、より良い演奏会を作っていきたいと思っています。



東京音楽大学の学生による発表

【神戸女学院大学 増田明日香、山田絵梨香】

私たち神戸女学院大学は、福岡県八女市にある八女市民会館おりなす八女ハーモニーホールにて、「聴いて楽しい、見て楽しい。神戸女学院生が語る、奏でる ピアノの名器たちの魅力 ベーゼンドルファーとスタインウェイ」と題した公演を行いました。このホールは客席数

796席で、2011年7月にリニューアルオープンしました。その際に、NPO法人 八女ベーゼンドルファー音楽祭プロジェクトという市民団体からピアノが寄贈されて、スタインウェイとベーゼンドルファーというピアノの名器2台が揃いました。私たちは、この2台のピアノそれぞれの魅力と可能性を伝える公演を制作することになりました。

八女市はゆっくりと時間が流れる温かな場所です。ホールの方の話によると、地域には音楽ホールがあまりなく、クラシックの演奏を聴く機会も少ないそうです。高齢化が進んでいて、市内には大学もないので、この演奏会が市民と若者との交流の場になればということでした。主な客層は高齢者となることを予測し、プログラムの文字の大きさや休憩時間の長さなど、お客様全体を意識して制作を進めました。曲目には、ベーゼンドルファーのやわらかで深みのある音が生きるベートーヴェンの〈ピアノ・ソナタ〉やシューベルトの〈即興曲〉に、ブラームスの〈6つの小品〉、また、スタインウェイのダイナミックできらびやかな音色が生きるリストの〈メフィスト・ワルツ〉やスクリャービンの〈練習曲〉など、2台のピアノにゆかりがある作曲家の作品やそれぞれのピアノの音色が映える作品を選びました。

ステージにはピアノを2台並べて置き、ピアノ・ソロに加えて、フルートや声楽とのアンサンブル、ピアノ連弾も取り入れ、演奏は大学院生が担当しました。ピアノや曲の解説をするMCを曲間に入れ、全体で2時間のプログラムにしました。ピアノのことをよりよく知ってもらうために、ロビーではピアノの歴史や構造を示したパネルや模型の展示を行い、休憩時間にお客様に見て頂きました。

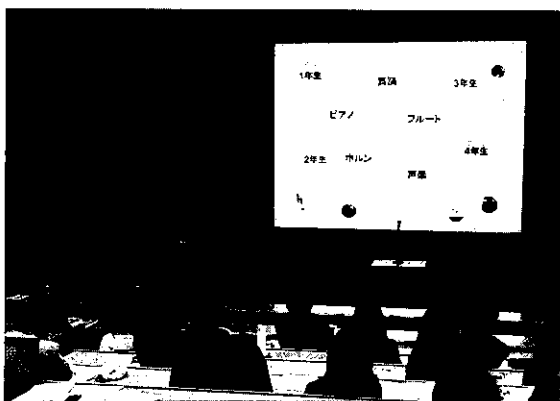
ここで学生たちの活動について振り返ります。私たちの活動は、2011年4月から始まりました。まず、自分たちでピアノについて調べ、発表し合う学内勉強会を開きました。続いて、ベーゼンドルファーとスタインウェイの技術士を訪ねて、専門的な話を伺いました。その後、班に分かれて活動を始め、MC・スクリプト班、マネジメント班、プログラム班、ロビー班の4つの班で準備を進めていきました。

活動した班は、1年生から4年生までの学部生で構成されており、専攻も器楽や声楽、舞踊と多岐にわたっていました。そこで、メーリン

グリストでアイデアを出し合い、活動状況を報告するなど工夫をしました。また、私たちが調べたことを、お客様に文章や展示物、演奏を通してどうすればうまく伝えられるのか、各班それぞれが最後まで考え、制作しました。その中で、限られた時間で作り上げていく難しさと、視野を広げて行動していくことの大切さを学びました。

当日の来場者は400名にのぼり、過半数の202名がアンケートに回答してくださいました。内60パーセント以上が60歳以上でした。「2台のピアノの違いが良く分かった」「若々しい演奏を聴くことができてよかった」などうれしいご意見を頂いた反面、「選曲が難しかった」というご意見も頂きました。

終演後に笑顔で帰られていくお客様の様子を見ると、成功した喜びと私たちの努力が報われた気持ちで胸がいっぱいになりました。普段、舞台上で演奏することを専門に学んでいる私たちですが、この公演では制作全般に関わったため、行程も良く分かり、コンサートを作る大変さを身を持って経験することができました。また、学年の垣根を越えた先輩・後輩と関わり合うことができて、ピアノ技術士の方々、八女市の職員や市民の皆様とも会うことができました。この企画で経験し得たものを、これから生かしていけるように更に学んでいきたいと思えます。



神戸女学院大学の学生による発表

■ポスターセッション

シンポジウム開始前、及び前半と後半の20分間の休憩の間に、各大学の学生による公共ホールとの連携企画についてのポスターセッションが行われた。各大学の個性が良く表れたお手製の掲示資料を眺めながら、担当学生との会話を

楽しむ来場客がロビーに溢れた。また、同時に2010年度、2011年度それぞれの合同夏期セミナーのダイジェスト映像の上映も行われ、こちらも参加学生に質問や感想を聞く来場客の姿が多く見られた。



東京音楽大学のブース



神戸女学院大学のブース



昭和音楽大学のブース



合同夏期セミナーのブース

■パネルディスカッション「社会×音楽×コミュニケーション」

20分間の休憩をはさみ、シンポジウム後半はパネルディスカッションが行われた。このパネルディスカッションは途中グループ・ワークシヨップ形式を取り入れたため、休憩の間に参加者は各々のネームタグにつけられた記号ごとに割り振られた座席に移動した。尚、1グルー

ブは3、4人のメンバーからなり、所属が重ならないように予めランダムに割り振っている。

【昭和音楽大学教授 武濤京子（以下、武濤）】

ただ今よりパネルディスカッションをはじめます。はじめに、パネリストの皆様をご紹介します。(以下、田村緑氏、横山邦雄氏、茂木一司氏、武石みどり氏、津上智実氏の紹介)。

後半は80分という時間の中で、「社会×音楽×コミュニケーション」というテーマで話合います。出来るだけいろいろな幅広い意見をお聞きしたいので、ちょっと仕掛けを用意しております。

まず本日ご登壇のゲストの皆様から、シンポジウム前半をお聞きになって、さらには学生たちのポスターセッションをご覧になっての感想をお聞きしたいと思います。まず田村さんからお願いしようと思っているのですが、田村さんは先ほどの報告にあったギルドホール音楽院の卒業生でいらっしゃるって、また、(財)地域創造で「公共ホール活性化事業」などでも活動されています。そういったことも含めて、アーティストとしての立場から、この我々の取り組みをご覧になっての感想をお聞かせください。

【田村緑（以下、田村）】

前半の取組の報告を聞かせて頂いて、まさにこれは「イノベーション」だなと思いました。私の場合はイギリスのギルドホール音楽院で4年間大学生活を送ったのですが、その間に地域社会に出ていく機会をたくさん得ました。その機会を通して、「自分にとって音楽ってどういうものなのだろう」と考えるきっかけを与えてもらったと思います。

そして今、学生さんたちによる(公共ホールとの提携企画の)発表を聞かせて頂いて、こういった活動が学生時代からできることは本当に素晴らしいし、幸せなことだなと思いました。私は地域創造の「公共ホール活性化事業」に10年以上前から携わっておりますが、記念すべき1年目に行ったのが、学生さんたちが今回行かれた河口湖円形ホールでした。そして、来年度はみなさんが行かれた魚沼市小出郷文化会館に初めて行かせていただきます。まさに今、私が演奏活動させていただいている同じ現場で、学生さんたちが活動しているということに驚きを覚えました。

演奏家や企画に携わる人たちにとって一番大事なのは、現場に出て人前に立つことだと思います。実際に人の前に立って演奏するということは、今まで学生として先生方から教わってインプットしている立場から、一人のアーティストとして、表現者としてアウトプットする立場にならざるを得ないわけです。聴きにきてくれる人たちにとっては、そこは一期一会の場所で、その人にとっては、その1回のアウトリーチが最初で最後の本当の生の音楽体験になるかもしれない。どんなに短いコンサートでも演奏家はその責任を負っていると思います。それをどれだけ自覚して、それを今度はいかにして自分の演奏技術やコミュニケーション力を磨く糧にするか。今日の報告の中で学生さんが「相手を考えてのプログラム作りはとても大変だった」という感想を述べていましたが、この気づきは、その後の学生さんが音楽と向き合う上で、自分を変えていくことのできる、かけがえのない財産に成り得るものだと思います。



田村緑氏

【武濤】

それでは続いて横山さんにお話を伺います。横山さんは現在はオーケストラの理事というお立場でいらっしゃいますが、キンビールでメセナや広報活動等に携わっていらっしゃいました。そういったバックグラウンドから、今日ここまでご覧になって、どのように感じられたかお聞かせいただけますか。

【財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団理事 横山邦雄（以下、横山）】

改めてプログラムの全体像をつかみながら前半のお話を伺っていたのですが、大変よくできたプログラムだと思います。「教育」「実践」「研究」という柱を立てているとのことでしたが、例えば「教育」という柱の中でも、講座の受講

から合同夏期セミナーという流れがあり、さらにそれぞれ異なったカルチャーを背負っている人たちがコラボレーションできる環境があるという、非常によく考え抜かれたプログラムであると感心致しました。特に、(前半最後の)学生さんの刺激的な発表や展示を見て、それを強く実感しました。

私は先ほどもご紹介いただきました通り、現在新日本フィルで仕事をしております。また、それ以前は長い間企業で20数年にわたってメセナ等の芸術文化支援活動に携わってまいりました。

この事業は音楽家が社会性を身につけるということが主要なテーマになっているわけですが、そういったことがこれだけ真剣に語られる、そして実践されるようになったということは、非常に隔世の感があるなという風に感じます。20数年前、メセナという言葉が日本で使われるようになったころは、私たちは「お金を出す人」、もらう人は「ただ使う人」というだけの関係で、それ以上の深まりはなかった。しかし日本におけるメセナもだんだんと進化してきて、現在では企業と芸術家のコミュニケーションの深まりによって、または地域社会との関わりの中で何か新しいものが生み出されるような流れに変わってきている。そういった状況の中では、芸術家が社会性やコミュニケーション力を身につけるということは非常に重要になってきています。

私自身を振り返っても、うまく行った仕事、いかなかった仕事はいっぱいあるわけですが、企業の側に芸術に理解を持った人間がいて、なおかつ、また芸術家側も企業の考え方に理解を示してくれて、真剣な議論を交わすことが出来たときに仕事がうまくいくわけですね。こういったことが、企業の立場から考える、芸術と社会のコミュニケーションということになるかと思っています。

それから、オーケストラを例に取りますと、新日本フィルは今年で創立40年になりますが、すみだトリフォニーホールと日本で始めての本格的なフランチャイズ契約を結んで今年で15年になります。当然、フランチャイズ・オーケストラということは、地域に根ざした活動をするということを前提としているわけです。新日本フィルはフランチャイズ契約締結よりもさらに5年ほど前から、アウトリーチ活動を行ってま

いりました。現在では、墨田区内26ヶ所の小学校の3、4年生を対象に音楽の授業をしております。これは、楽員たちが自分たちでプログラムを作って、実践を行なっております。

こういった、自分のバックグラウンドから、今日は皆さんとお話が出来ればと思います。

【武濤】

ありがとうございました。それでは、引き続きまして、茂木先生にお願い致します。茂木先生は美術教育がご専門でいらっしゃるって、ワークショップ関連のNPO法人にも関わられています。また、3大学連携の合同夏期セミナーもご覧下さっておりますので、そういったご経験からコメントを頂ければと思います。

【群馬大学教育学部教授 茂木一司氏】

私は本来は美術教育が専門ですが、現在は、青山学院大学と大阪大学、鳥取大学の3つの大学で「ワークショップデザイナー」という社会人教育に関わる事業に関わっており、また、それを支援するNPOのワークショップデザイナー推進機構の理事をしております。

たまたま、(財)地域創造の研修会が一昨年の夏にありまして、一緒にプロジェクトを行っている荻宿先生と講師で呼ばれたときに、こちらの武石先生ら3人の先生方とお会いしました。それから、武石先生が私のやっているコミュニケーションを主体とするワークショップに何度も足を運んでくださって、非常に熱心に研究をされていました。

私も10年くらいワークショップというものを研究しています。参加体験型学習と呼ばれることもあります。その特色は「答えは一つではない」「自分が納得したものが答えであって、それは既に自分の中にあるものである」「即興的で、身体的で、協働的」といった点かと思っています。

今回、ショーン・グレゴリーさんの目白小学校児童を対象とした音楽ワークショップをはじめ拝見しまして、「音楽の専門性が生きていたな」という強い印象を受けました。ワークショップは学習方法というとならえ方が一般的ですが、コンテンツ研究も大切だと思っています。出来れば、学生さんが事前に子どもと触れ合う機会を持っておくと、さらに違う展開になっていたかなとも思いますが、全体的には素晴らしい

いワークショップだったかと思います。



茂木一司氏

【武石】

茂木先生、ありがとうございました。普通のパネルディスカッションですと、このままパネリストの方とおはなしを進めていくことになるんですけど、先程から「ワークショップ」ですとか「コミュニケーション」といったキーワードが出ておりますので、ここからはご来場の皆様同士でお話ししていただきまして、そこに我々も仲間に入ったりしながらワークショップ形式のディスカッションの時間を持ちたいと思います。ここに茂木先生というエキスパートがいらっしゃるしますので、マイクをお渡しいたしまして、皆さんと一緒に考えるセッションを開始したいと思います。茂木先生、よろしくお願いいたします。

【茂木】

ハイ。それでは、やり方ですけれども、皆さん既にネームタグに付けられたマークごとに座っていらっしゃるかと思います。もし話し合いしづらい席の場合は、空いているところに移動して下さい。そして、本日の配布資料の中に「グループディスカッションテーマ」が書かれた紙があるかと思いますので、それをワークシートにして、グループの中の誰かが司会者と書記になって、話された内容を簡単にメモして下さい。それを最後に少し発表してもらおうかと思っています。初対面の方ばかりかと思っていますので、最初にウォームアップとしてグループの中で自己紹介をして、「なぜ自分はここに来たのか」について話し合った後、与えられたお題についてディスカッションして頂ければと思います。それでは武石先生、趣旨説明をお願い致します。〔ここで、グループディスカッションのテーマ「音楽家・音楽大学は、社会の中で／社

会に対して、何ができるか、または何をすべきかと思いますか？ 3大学の取組も参考に、具体的な意見・提案をお願いします〕をスクリーンに投影]

【武石】

ここに「音楽家・音楽大学は、社会の中で／社会に対して、何ができるか、または何をすべきかと思いますか？ 3大学の取組も参考に、具体的な意見・提案をお願いします」と書かれていますけど、要するに、今まで私たちの取組の報告を聞いていただいて、「音楽大学は今こうしているんだ」ということを知っていたいただいわけですけど、その内容について思ったこと、自分のお立場でお考えになったことを、そのグループの中でお話ししていただければと思います。

【茂木】

お分かりいただけましたでしょうか。今日は群馬大学教育学部美術教育講座の郡司明子准教授と、私の教え子で兵庫教育大学博士課程の手塚千尋さんに助っ人にお越しいただきました。よろしくお願い致します。この2人と武石先生の計3名にファシリテーターをしていただこうと思います。それから、皆さんの意見をリアルタイムで吸い上げるためにファシリテーターが簡単にメモを取って、それをこのスクリーンに次々と映しだしていきますのでよろしくお願い致します。田村さんと横山さんにもグループに混ざっていただいて、一緒に話をしていただこうかなと思っています。それではこれから15分間お話をしてもらって、最後に何組かに代表して発表してもらいます。よろしいでしょうか。それでは皆さん、早速始めてください。

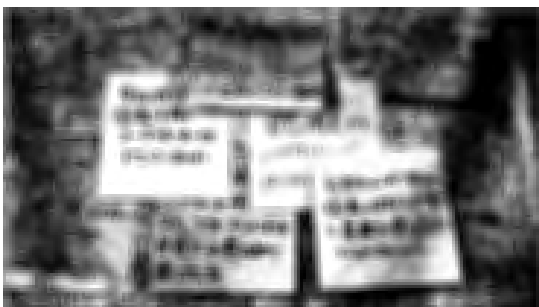
〔ここから約15分間、3、4人のグループに分かれて、グループディスカッションを行った。ファシリテーターがグループを順に回り、話されている内容をメモ。それを書写台に載せてスクリーンに投影し、会場全体でも共有した。突然のグループワークに最初は戸惑っている様子も見受けられたが、終了間際にはいずれのグループでもディスカッションが白熱し、場内からは「時間が足りない」という声も多く聞かれた。〕



グループディスカッションの様子



グループディスカッションの様子



グループディスカッションのコメントの数々

【茂木】

(15分が経過し) ようやく温まったところで大変申し訳ありませんが、それではこの辺で終了したいと思います。それでは、これからいくつかのグループに、1分半位で簡潔にまとめてコメントを頂ければと思います。〔以下、全18グループ中、6つの代表グループによるコメント〕

【グループA】

我々のグループは4人で話し合いをさせてもらいました。私自身はマネジメントの世界にいた人間で一昨年まで経営コンサルタントとして仕事をしていました。今は音楽大学に籍を置いているんですけど、音大生の社会的適応力を高めるにはどうしたら良いかというのが、私のミッションかと思っております。マネジメントの世界にいた人間から皆さんにお話させて頂いたのは、やはり発想が違うということ。音楽家

というのは自分の持っているものをどう他人に伝えるかという発想なんですけど、マネジメントというのはお客さんが何を求めているかというところから発想していく。その違いというものを基本的にきっちり認識しないと、なかなか社会的な需要性というのは高まっていけないのではないかと思います。

【グループB】

私はこの地域(川崎市麻生区)に住むものですが、この地域にとってこの音楽大学というのは大変重要なものでありまして、この大学が良い活動をするかどうかということが、私たちの生活のレベルがどうなっていくかということに関わってきます。学生のコミュニケーションを大事にするという活動自体は大変素晴らしいものではあるが、目線が少し違ってないかということを感じました。「いいものを行っているのだから、皆さんちゃんと聞きなさいよ」という感を受けます。

【グループC】

こちらのグループでは、大学の運営に携わられている方が多くて、この3大学の取り組みは非常に素晴らしいという意見でまとまったんですけど、それでは「その後」をどうするかというところを考えました。大学を卒業した後、どういう形で学生さんたちが経験したことを活かしていけるかということを考えたときに、音楽というのは少し特殊で、皆さん演奏家になるのが目的かも知れないんですけど、この経験を活かして新しい働き方というものを見出していただけたら良いのではという意見になりました。

【グループD】

芸団協のある調査によりますと、芸術関係者の約6割の年収は300万円に満たないワーキングプアという現状があるとのこと。これは社会的に大きな問題であって、音楽大学を卒業した後の「モデル」、いわゆる演奏家にならない人たちのキャリアの枠組みを作ってあげることが必要かと思っています。

また、シンポジウムの冒頭に「教職員の意識改革が必要です」とおっしゃっていたのが、非常にインパクトがありました。なぜ、このような6割ものワーキングプアという現状があるの

かという、音大で音楽を教えている先生方というのは社会的に言うと「技術者」になりますが、その方々に社会のニーズにマッチした教育をなさいと言っても難しいわけです。経済学部など、一般の大学の学生と何か一緒にできるようにすることも重要かと思いました。

【グループE】

私たちのグループの中にも音楽大学の運営に携わっていらっしゃる方がいましたが、先程のお話にもあったように、先生の中にはキャリア教育に懐疑的な方が多く、なかなか取組が進まないという現状があって、そういった中にあるだけでも少しずつ改革を進めていらっしゃるのとことでした。私自身は公共の文化財団に身を置いて、地域創造ではコーディネーターとしてアウトリーチに携わっているのですが、そちらの立場から申し上げますと、こういった取組を通して（学生が）地域に出ていくということは、学生自身の演奏にとっても非常に役に立つことなんです。先ほど「相手を考えてのプログラム作りはとても大変だった」という学生さんの話がありましたけど、それは当然のことなのに、殆どの場合それが出来ていないわけです。アウトリーチに行って、飽きたらすぐに騒いでしまう子どもたちの前に立って、どうしたら伝えられるだろうか、音楽だけではなくて、別のアプローチはないだろうかといったことを考えることが絶対ご自身の演奏活動に生きていくんだということを、特に音楽大学の先生方には強く意識をしてプログラムを進めていただきたいと思います。私は世田谷の財団ですが、世田谷は小学校がたくさんございますので、是非学生の方たちと一緒にプログラムを組みたいと思います。

【グループF】

まず、こういった活動が、ただ子供たちに音楽を聞かせたりということだけではなくて、本当に音楽を通してのコミュニケーションを可能にしているという共通理解になりました。それでは、この取組をもう少し広げるために、企業もこういったものをサポートできないかと考えたのですが、例えば企業がこういったことをやりたいといったときにどこに話を持っていったら良いか分からないので、そういった要望に対してコーディネーター出来る人材が必要なのではないかと思いました。また、こういった活動に

対して、公共ホールがもっと門戸を広げてくれることも必要ではないかという話になりました。

【茂木】

ありがとうございました。それでは皆さんに拍手をお願いします。それでは、司会を武濤先生にお戻しします。

【武濤】

ようやく温まったところで名残惜しいのですが、「我々からの一方通行ではなくて、今日ご来場の皆様のいろいろな考えを表に出していただく」という思いで、こういった試みを実施いたしました。今は限られた方だけに発表していただいたんですけど、ディスカッション中にお書きになったメモは、是非最後にアンケートと一緒にお渡しください。我々もそれを拝見して、今後の取組に活用させていただきたいと思います。

いよいよ終わりの時間に近づいてまいりましたが、今日ご登壇のパネリストの皆様もただ今のグループ・ワークショップでいろいろなグループを回られてお話されたかと思いますので、そういったことも踏まえて最後に一言ずつ頂戴出来ればと思います。

【田村】

いろんな意見を聞かせていただいて、私も凄く先が楽しみになりました。ある学生さんは（公共ホールとの提携企画について）1回で終わらせたくないとおっしゃっていました。私たちも公共ホール活性化事業でいろんなところに行かせていただいて、そこでホールの職員の方々と関係が出来るのですが、その間担当されていた市の職員の方が別の部署に配属になり、それまでに行った事業や培ってきたノウハウの継続・継承が出来なくなる状況も中にはあります。学生さんたちが何か得るものがあつたら、それを今度は継続的に育てていける枠組みが、大学にも、また社会にも必要だと感じました。また、これから様々なホールとの連携が進んでいけば、音楽大学の学生たちが自ら自分の可能性を見出す機会が増えるのではないかと思います。

【横山】

今日は私自身もいろいろ刺激を受けるお話を

たくさん聞かせていただきまして、本当にありがとうございました。冒頭でも申し上げましたとおり、アウトリーチ活動を継続しておこなってまいりましたが、一方でこれからどう発展していったら良いのだろうかと悩んでいる現状もあります。はじめはアウトリーチをやるのが目的でしたが、20年も経つと、これからどう展開していくかというレベルになってくるわけです。いい音楽を演奏する、また、音楽ファンを一人でも増やすという基本姿勢をもう一回確認しながら、更にどうやってコミュニケーションしていくかというところが重要なのかなと、いろいろなお話をうかがっていて思いました。また、産学連携のような、この大学連携の取組が社会につながっていくような仕組みを作ることが、次のステップとしては大事なのかなと感じました。



横山邦雄氏

【茂木】

皆様、ご協力ありがとうございました。あまり時間がなくて申し訳なかったのですが、でもすごくいろいろな意見が出て、皆さんともシェアすることができたのではないかと思います。こうやって皆さんの違う考え方を披露しあって、さらに認め合う、そういうことが大事だなと常々思ってワークショップをやっております。自分が今やっている研究や仕事を通して、芸術家が社会化していき、アートを身近なものにしていく必要を感じます。ただ自分の表現を追求させるだけではなく、地域や社会の様々なニーズに答えていくことが今後の大学にも必要なことなのではないでしょうか。音楽も美術もいろいろな役割を担っていく必要が生じてきていますし、また、そのことを学生さんも先生方も考えていく必要があるんじゃないかなと思います。さらに、今後は「コーディネーター的な

考え」を誰もが持っていなくてはいけない時代になっていくんじゃないかなということを強く実感しています。学生さんたちも自分が表現者として立っていくということは、自分で自分をマネジメントしていくということなので、自分のしていることがどれだけ社会に還元できるのか、自分がどれだけ社会に役に立つ人間なのかをしっかりと考えていく必要があると思います。美術が造形の世界だけ、音楽が音の世界だけを追究するのではなく、アートがこの世界の中でどんなことができるのかをみんなで考えていかざるを得ない時代になっていることは確かだと思います。

【神戸女学院大学教授 津上智実】

今日はいろいろとありがとうございます。さきほど、ディスカッションの中で「目線が違うのでは」というご指摘がありましたが、私たちは「いいものを行っているのだから聴きなさい」というつもりでやっているわけではありません。今までの音大の教育はこれでよかったのか、私たちのやってきた教育は本当に若い人たちが社会に発っていけるものだったのか、もっとやっていけることが本当は他にもあるのではないかと我々も悩んでいます。今までと違うことをやらなくてはいけないのだけど、一体どうやっていったらよいかわからないという欠如態があって、そういったことから3大学の連携がスタートしました。

音大同士はライバルであってつながるのが難しいという話もありますが、でも教育として何が今の時代求められていて、我々はこれから何をすべきなのかというベーシックな問題に下りていけば、お互いに意見交換をしたり、力を合わせたりすることができるのだということを、この2年半の間に学びました。

これは私たち3人の仲良しグループだけ、3大学だけにとどめるつもりは全くありません。先ほどの国内音大の調査で、少なくとも14大学はもう既に実績があるわけですね。であれば、お互いに知恵を出し合って、お互い強くなりましょうよ、お互い手をつなぎましょう、という出発の日に今日がなればいいと思います。

【武石】

皆様、ご協力ありがとうございました。我々は、ホールの関係者であるとか演奏家であると

か、今まであるような職業のカテゴリーで表せないようなものを「音楽コミュニケーション・リーダー」と呼んでいます。それを一言で言いかえると、「つなぐ人」なんだろうと思います。そのつなぐ形が、例えば企業と学生の間をつなぐとか、大学と地域の小学校をつなぐとか、いろんなところにあると思うのです。そういうところに自分なりの仕事、ビジネスを見出していけるようなそういう新しい発想でものを見ていける——つまり、今まである価値観や職業像に自分を入れていくのではなく、こういうところだったらこういう形で自分は役立てるんじゃないかというような考え方のできる人を育てたいと思っています。それがどういう職業なのかは分からないのですが、そういう人を総称して、我々は「音楽コミュニケーション・リーダー」と呼んでいます。ですから、これに刺激を受けて、ここから出る卒業生たちがいろいろな立場で活躍してくれたらなと思っています。

今日のパネルディスカッションでは、ご来場の皆さんも他人事のように座って聞いていられなくて大変だったかと思いますが、やはりこうやっていろいろなことを話す中から新しいアイデアが生まれ、そして人との出会いが生まれ、そこから新しいものが出てくると思うんですね。やはり、コミュニケーションは「力」を生むと思います。今後ともいろいろな面で皆様にはお世話になるかと思いますが、みんなでいろんな情報を共有しながら、音楽がさらに発展するために、また、音楽のみならず舞台芸術あるいは美術などいろいろな分野が連携・連携し合っていけたらよいなと思っています。

3大学連携事業は今年度で文部科学省の財政的支援は終わりますが、民間の財団からの助成金などにも申請しておりまして、来年度以降も継続して、今後はさらに横に縦に広げていきたいと思っていますので、今後とも皆さんからたくさんアドバイスを頂ければと思っています。

【武蔵】

本日は長時間にわたりありがとうございました。〔17:00終了〕

この後、連携代表校である東京音楽大学の原山事務局長のあいさつがあり、さらに17時15分からは、会場を昭和音楽大学併設カフェテリアに移して交流会が行われた。会場はシンポジウ

ムに引き続き、グループディスカッションさながらの熱気に包まれ、神戸女学院大学の澤内崇音楽学部長のあいさつのあと、一般来場者と学生、大学教職員の間で盛んな交流が行われた。

～来場者アンケートから～

・グループディスカッションは良かったと思います。その分、もっと時間があれば！と思いました。また、このような機会があればと思います。

・断片的にしか知らなかったこのプロジェクトの全体像を初めて何うことができて大変有意義でした。

・音楽系3大学による共同プロジェクトで、このような内容に取り組んでいることに大変驚きました。社会性やコミュニケーション力を高めるというテーマは、今後も継続していただきたいと思います。

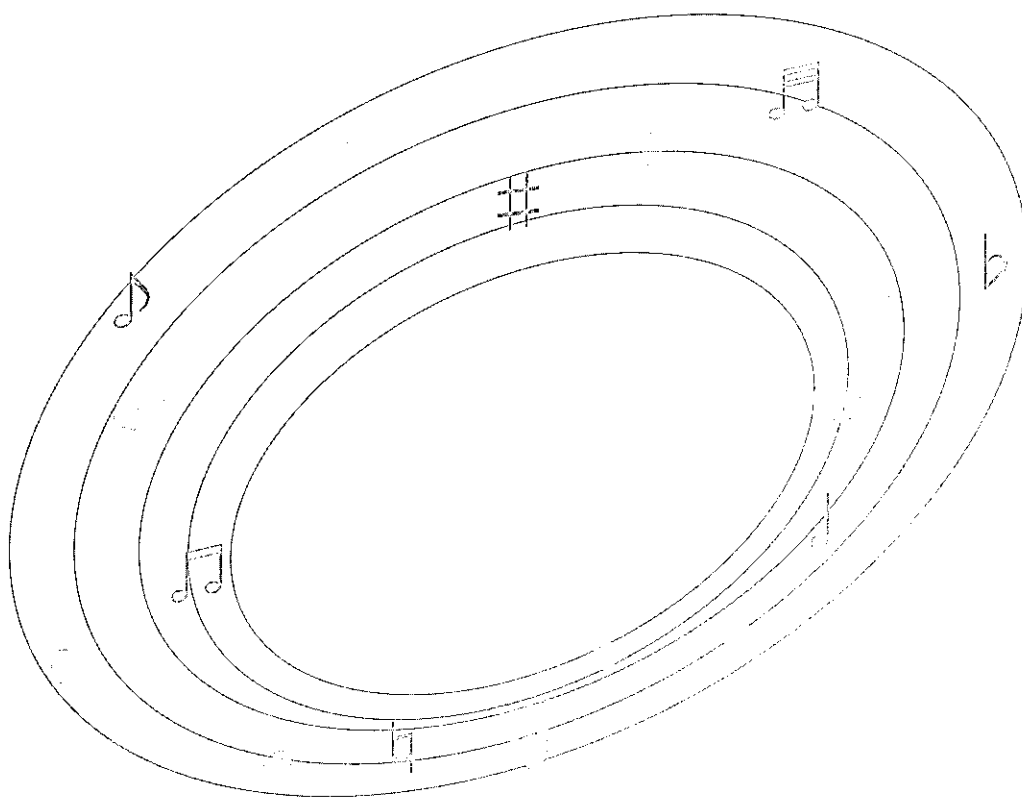
・グループディスカッションを通じて、お互いの立場を理解しながら、いろいろな新しい発見が出来ました。

・日本の中でもこのような大学の枠組みを超えた連携の動きがあるということを知ることができて、大変うれしく思いました。

・学生さんたちの生き生きとした表情・発表から、“コミュニケーション”を学んでこられたことが良く分かりました。

・各大学の学生による音楽を通しての地域コミュニケーション活動の様子が、文字や映像を通して良く分かった。学生の企画力と実行力の高さには驚いた。

資料編



「ワークショップで社会が変わる」シンポジウム

催事名称	「ワークショップで社会が変わる」
開催日	2011 年 10 月 2 日（日）13:00-17:00
場 所	青山学院大学青山キャンパス 14 号館 11 階第 19 会議室
登壇者	荻宿 俊文（青山学院大学 教授）、五島 朋子（鳥取大学 准教授）、齋藤 啓子（武蔵野美術大学 教授）、武石 みどり（東京音楽大学 教授）、津上 智実（神戸女学院大学 教授）、茂木 一司（群馬大学 教授）、蓮行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任講師／劇団衛星 代表／WSD 推進機構 理事）
主 催	青山学院大学社会情報学部ワークショップデザイナー育成プログラム事務局
共 催	特定非営利活動法人ワークショップデザイナー推進機構
催事の概要	<p>平成 23 年度第 1 回ミュージック・コミュニケーション講座の講師を担当した青山学院大学の荻宿教授呼びかけの下、ワークショップに係る人材育成に取り組む音楽系、演劇系、美術系それぞれの大学が参加し、「ワークショップで社会が変わる」と題したシンポジウムが開催された。第一部「社会は大学を変えるメディアとなれるか」では、司会の荻宿教授と上記 6 名の登壇者による特色豊かな事例報告や活発な議論が展開された。また、会場となった青山学院大学の教室は 130 名を超える参加者で溢れ、登壇者の報告や議論を熱心に聞き入る様子が見てとれた。</p> <p>演劇系、美術系とそれぞれ興味深い報告が行われる中、武石教授、津上教授から、音楽系大学が抱える教育上の問題とそれに対する 3 大学連携の取組についての報告がなされた。中でも、武石教授による、身体性・自己原因性を縦軸とした「伝統的コンサート」から「体験型ワークショップ」に至る音楽と人との関わりの変容の図が大きな関心を集め、また、音楽系大学の学生特有のキャリア形成の現状の報告については場内の参加者からも驚きの声が発せられた。</p> <p>最後に、荻宿教授より「それぞれの専門性を残しながら他者と結びついていかなくてはならない」「積極的に二足の草鞋をはくことが重要」「これからの大学は教育・研究だけでなく積極的に社会貢献する機関であるべき」との課題提起を受けて第一部を終えた。</p> <p>休憩を挟んで行われた第二部は、5～6 人程度の小グループに分かれ、各々自己紹介をしながらの交流会が催された。こちらでも大変盛況で、グループ編成を何度か替えながら参加者同士の盛んな交流が行われていた。</p>



「施設まるごと！ 文化発見フェスタ in ちば」 文化フォーラム

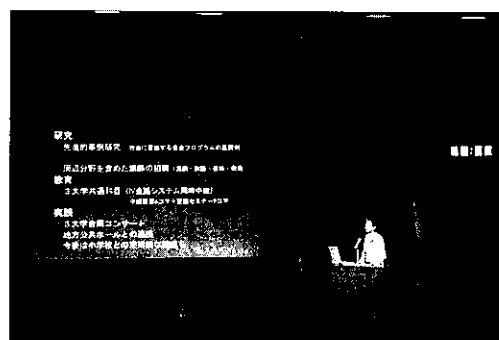
催事名称	「施設まるごと！ 文化発見フェスタ in ちば」 文化フォーラム
開催日	2011 年 11 月 6 日（日）10:30-12:10
場 所	千葉県文化会館
登壇者	<p>基調講演：長田 謙一（首都大学東京 教授 芸術学） パネルディスカッション：司会 長田 謙一 パネリスト：佐治 薫子（千葉県少年少女オーケストラ 音楽監督） 小山内 秀夫（兵庫県立芸術文化センター 企画制作アドバイザー） 武石 みどり（東京音楽大学 教授 音楽学）</p>
主 催	財団法人千葉県文化振興財団
催事の概要	<p>2011 年 11 月 6 日（日）、千葉県文化会館で行われた上記イベントの中で、「子ども達の豊かな創造力の育成と、元気なちばづくり」というタイトルで以下のような内容の文化フォーラムが開催され、パネリストの一人として参加した。</p> <p>基調講演： 長田 謙一（首都大学東京 教授 芸術学） 「まちを／世界をつくる——想像力とこどもたち 3.11 以後」</p> <p>パネルディスカッション：司会 長田 謙一 パネリスト 佐治 薫子（千葉県少年少女オーケストラ 音楽監督） 小山内 秀夫（兵庫県立芸術文化センター 企画制作アドバイザー） 武石 みどり（東京音楽大学 教授 音楽学）</p> <p>基調講演では、東日本大震災で長い時間をかけて築き上げてきた文化が失われるという体験をした直後の現況において、新しいまちと文化を作り上げていくことが求められていること、またその際に、これまでの「ハイカルチャー／ローカルチャー」といった分類は意味を失い、文化施設が中心となってコミュニティーに基盤を置き、何もないところから夢を描くように子どもの想像力を育んでいく活動を行うことが重要であることが指摘された。</p> <p>パネリストの佐治薫子氏は、千葉県文化会館を拠点として行っている千葉県少年少女オーケストラの活動を紹介し、音楽を通して心を育てることに重点を置いていることを強調した。楽器が貸与され無料で参加できるという点で、ユースオーケストラとしてはエル・システマに最も近い稀有の例として興味深い。小山内秀夫氏は、阪神淡路大震災後に復興のシンボルとして開場した兵庫県立芸術文化センターについて説明し、地元の人々との心の絆を深めるためにどのような工夫をしてきたか、「パブリックシアター」としての企画・運営方針の特徴について紹介した。</p>



文化発見
文化フォーラム

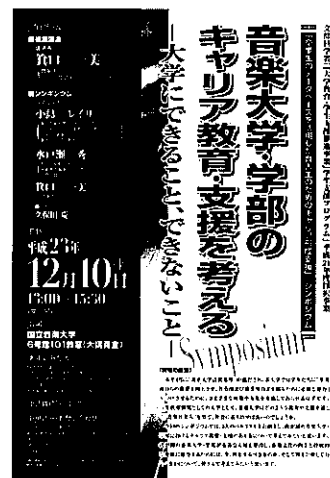
2011年11月6日(日) 10:30~12:10
千歳県文化会館・小ホール

主編 王康 副主編 王明賢 文化評論家 王明賢

[illegible]

「卒業生のデータベースを活用した音大生のためのキャリア形成支援」シンポジウム

催事名称	「卒業生のデータベースを活用した音大生のためのキャリア形成支援」シンポジウム 『音楽大学・学部のキャリア教育・支援を考える－大学にできること、できないこと』
開催日	2011年12月10日（日）13:00-15:00
場 所	国立音楽大学 6号館101教室（大講義室）
基調講演	箕口 一美（音楽キャリア デベロプメント・アドバイザー）
登壇者	司会：久保田 慶一（国立音楽大学 教授） 箕口 一美、水戸瀬 秀（ヤマハ音楽振興会 音楽教育事業部 指導部 指導企画グループマネージャー）、小島 レイリ（東京音楽大学 連携コーディネーター）
主 催	国立音楽大学
催事の概要	<p>国立音楽大学において『音楽大学・学部のキャリア教育・支援を考える－大学にできること、できないこと－』と題し、「卒業生のデータベースを活用した音大生のためのキャリア形成支援」シンポジウムが開催された。</p> <p>このシンポジウムは、わが国の音楽大学・学部が有為な人材を輩出し、音楽文化の向上と持続的な発展に寄与するために、今、何をすべきなのか、そして何を目指していくべきなのかということに参加者とともに考えることを趣旨としていた。</p> <p>まず基調講演として、音楽キャリア デベロプメント・アドバイザーである箕口氏より、コンサートホール等での現場において音楽大学の卒業生と接する中で感じてきた、プロフェッショナルの演奏家として活動していくために必要なこと、そしてその準備として学生のうちしておくべきことについてのお話があった。続くパネルディスカッションでは、ヤマハ音楽振興会の水戸瀬氏から、音大卒業生就職先企業の立場から音楽講師に求められているもの、そしてそれを踏まえたうえで在学中に経験して欲しいことが語られ、本プロジェクト小島コーディネーターからは大学側の試みの一例として連携プロジェクトの紹介、そして米国の有名音楽大学で大きな動きとなっているコミュニティ活動及びキャリア教育の現状についての説明があり、国内外の取組状況の共有が行われた。</p> <p>フロアの他大学教員やキャリア担当者、学生からは多くの意見があがり、キャリア教育への関心の高さがうかがえるとともに、関連情報の少なさが明らかになった。パネリストをはじめ参加者からは、より密なネットワーキングが必要との意見があがり、今後の発展に期待が寄せられた。</p>



新聞掲載記事

平成 23 年 9 月 17 日 (土曜日発行)

小 出 郷 新 聞



昭和音楽大学の学生が企画、演奏した堀之内小学校での学校訪問コンサート

間近で金管五重奏

楽しむ

昭和音大が学校訪問コンサート

昭和音楽大学の学生による金管五重奏「ショウワ・プラス・クインテット」の学校訪問コンサートが9月9日、井口小学校と堀之内小学校で開かれ、子どもたちが間近で聴く生の演奏を楽しんだ。

小出郷文化会館と昭和音楽大学とは、開館当初から提携事業を行ってきっており、今回、学生の実践活動として、同大学生の金管五重奏アンサンブルの訪問コンサートも、学生の企画により開くことになった。

同日午後から開かれた堀之内小学校でのコンサートには5年生68人が集まった。元気のよい「オリンピック・ファンファーレ」で始

まったコンサートでは「トランペット吹きの子守唄」や「ラッス・トロンボーン」など、それぞれの楽器が中心となる曲が演奏されたほか、ホルンは馬に乗って狩をする時に、後ろの人に音がよく聞こえるようにベルが後ろ向きについています」など楽器の説明も曲間に行われた。

コンサート最後には、子どもたちをステージ前に集め「となりのトトロ」メドレーを演奏。子どもたちは生の演奏を間近で楽しんでいた。

コンサートを企画、運営した同大学音楽芸術運営学科アイトマネメントコースの中村辰啓さん、永田美幸さん、中村百合絵さんの3人は「選曲に悩みましたが、音と楽器を覚えてもらえる曲を選び、音楽大学の学生なのでクラシックの曲も入れました。子どもたちの反応もよく、よかったです」と笑顔を見せていた。

小出郷新聞掲載記事 (平成 23 年 9 月 17 日付)

〔公共ホール連携企画：昭和音楽大学 (新潟県魚沼市)〕

越 南 タ イ ム ズ

(昭和25年6月23日 第三種郵便物認可)

平成 23 年 9 月 15 日

小学校や保育園で訪問コンサート 子供たちに音楽の楽しさを伝える

「色々な楽器が面白かった」



神奈川県川崎市にある昭和音楽大学の学生による金管五重奏「Show a Brass Quintet」が九月九・十日、市内の小学校や保育園で訪問コンサートを行い、受け入れも行っている。

昭和音楽大学は小出郷文化会館の開館時から演奏指導などで深い関係を持ち、毎年、アイトマネメントコースの実習生の途中には楽器を一つ一つ紹介していき、長さ比べなどの楽器にまつわる知識も楽しく学べるようにした。

子供たちも演奏が始まると静かに聴き入り、マウスピースで音を出す体験では一生懸命音を出そうとしたりとコンサートを楽しんだ。

音楽で本当に人を感動させるためにはコミュニケーション力、社会性が必要であり、それらを高めるための活動の一環として今回の学生による訪問コンサートは学生達自身により企画された。

九日は井口小学校と堀之内小学校、十日は佐賀保育園でコンサートを実施。佐賀保育園では約二十人の子供たちがコンサートに集まった。学生たちは、それぞれの楽器の特徴が良く出る曲を選び工夫してプログラムを組んだ。また、コンサートの途中には楽器を一つ一つ紹介していき、長さ比べなどの楽器にまつわる知識も楽しく学べるようにした。



越南タイムズ掲載記事 (平成 23 年 9 月 15 日付)

〔公共ホール連携企画：昭和音楽大学 (新潟県魚沼市)〕

おわりに

音楽系大学初の連携事業は何もかも新しい試みではありましたが、充実感をもって最終年度を終えられることを心からうれしく思います。

3大学の共通科目と夏期セミナーは各大学に定着し、また授業内容も、コミュニケーションに焦点を当てながらも音楽以外の分野への広がりをもつものとなりました。国内の研究者・実践者のみならず、ニューヨークおよびロンドンの研究者・実践者との継続的な情報交換や事例調査を通して、共通科目の授業内容が国外の動向とも密接に関連するものとなったのは、3大学連携事業だからこそ成しえたことと言ってまちがいありません。また、各大学がそれぞれ異なる公共ホールと実施した連携コンサートについては、折に触れて3大学間で情報交換をおこなったため、他大学の取り組み方や工夫を見て、相互に教えられるところが大いにありました。異なる大学の学生に接して大きな刺激を受けて成長したのは、学生だけではなく、教員にとっても、大学の壁を超えての協働と研究活動は大変刺激的であり、よいFDにもなったと思います。

平成24年度以降、文部科学省からの財政支援はなくなりますが、3大学の連携事業は継続し、さらに連携と協働の幅を広げていきたいと考えております。東日本大震災を経験して社会が大きく変わり、音楽のもつ意味が問い直されている現在、「音楽コミュニケーション・リーダー」が何をすべきか、どのような可能性があるのかをさらに問い続け、それに対する具体的な回答を教育の中で、また社会の中で見出していくことが必要とされています。

取組期間中ご支援・ご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げますとともに、今後とも、さらなるご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成24年3月

武石 みどり （東京音楽大学）
津上 智実 （神戸女学院大学）
武濤 京子 （昭和音楽大学）

音楽系3大学による共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション
音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて
平成23年度 活動報告書

平成24年3月

発行 東京音楽大学 連携センター
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5
Tel: 03-3982-3513 Fax: 03-3982-3227
<http://www.music-communication.com>
編集 神戸女学院大学音楽学部 連携ルーム
昭和音楽大学 連携ルーム
印刷 株式会社NHKビジネスクリエイト
